

露國商人

北京人の
商店及其
情况

知らざる者はフリーレン(寺領)の内部と誤認す。何となれば此廣場は其の位置に於て喇嘛の建築物と相接すればなり。現時廣場に而して露國商人の家屋あり、其の重なるものはフリーレンの商業街に於ける唯一の二階建なるココウイン及びバソフ商會の家、之に次ぐものは恰克圖人ルムヌルシニコフ、ケロオコロドニコフの家、商人又又シユルンギンの家、恰克圖人なるルアヘレジンの家、バツエウイ商會の家終りに目下庫倫に居らざる商人アイウオロビエフの家なり。然るに晩近十五年間に此貿易場に於ける露國商人の商店の數は過半を減じ、爲めにフリーレンの市場の外觀を損じたるは惜むべし。例へばウオロビエフ、ヘレジン及びシユルイキン氏等は其の貿易を全く廢し、バツエウイ氏は蒙古人の供給する茶を目的として僅かに貿易を繼續し、殘るはココウイン及びバソフ商會とルシニコフ及びオコロドニコフ氏等の零賣店に過ぎず。露國人の三商店の減じたるに代りて、此處に支那人の商店の數は十倍し、彼等の地位は曾て支那人の貿易の中心たりし庫倫の買賣城以外に特筆するに價值あるものと爲れり。

支那人の商店中庫倫に於て其の設備と店數の多きを以て優勢なるものは北京商人の商店なり。今是等の商店を擧ぐれば人和義、萬盛、京隆、順玉、恒和、義人

和厚、萬泰、號通、興義、東富、有通、和號、隆和、玉隆、昌玉、福來、號龍、興號、長興、厚生、號義、豐號、萬通、號、永聚、公、長德、泰、天聚、德、聚豐、恒、協和、公、全聚、德、桂、其他にしてフリーレン(寺領)の市場に於て北京商店の數は三十五に達す。前記商店に匹敵するものは陝西省商人の少數の商店にして即ち廣全、泰、戴、謝、米、伊、赫、ツン等のみ。以上擧げたる北京商店なるものは支那人の習慣に依り、各店一として一商人を店主とするものなく、皆箇々の商會に屬するものにして、且つ店主は殆んどフリーレンに住せず。是等の商店は外觀は比較的立派なるも實質は之に反す。是等の貿易商は北京に於ては、多くは安定門外にて商業を營むの中等若くは下等の商人なり。彼等は蒙古に其の商店を開かんと企圖するや、先づ北京に於て組合を組織し、富者、財主より資本若くは商品を借り、此商品を携へて商業を開くが爲に庫倫に來る、而して先づ其の店頭を飾り外觀を美ならしめんことを務む。之か爲め所謂北京商店なるものは比較的清潔なり。北京商店の構造は、支那商店の一般の構造に倣ふもにして其の店頭の構造に關する詳述は、後段に於て庫倫の貿易地區たる買賣城のことを記述するの時に譲り、今は唯だ庫倫の支那人の商店には其の門と窓に北京の商店に見るがき外部の裝飾彫刻、圖畫及び彩色を具へずと言ふに止

めん。華美巧妙なる彼等の招牌の文字は必ず支那と蒙古の二語にて書かる。去れど支那文字は蒙古人に解せられざるが故に、彼等は僅かに三字にて其の屋號のみを書き蒙古語にては商店の性質を詳記す。北京商店の内部は二室若くは三室に區別せらる。即ち入口の正面に設けらるゝ商品陳列櫥の後方に數段の棚を設けて、其の上に奇麗に各種の零細の商品雜貨を陳列す。此棚の側に絹織物の卷軸が陳列せられ、他の壁上の棚には較々下等の絹及び木綿の織物陳列せられ、商品陳列以外の場所には、仕立の衣服例へば絹布の寝衣、短衣の上着の類陳列せられ、高貴の客を接待する側面の室なる限場或は居間の壁上には、圖書及び蒙古人が此商店に贈りたる頌辭を掲ぐ。

是等の比較的清楚にして華美なる設備は歐羅巴人及び蒙古人の顧客をして知らず識らず其の店頭に立たしむ故に幸運なる時は商會は巨利を得、忽ち富みて動かざるものと爲るも、不運なる時は五年六年の後に其の店を閉づるの例も少からず。然も彼等は其の商店を閉づるの前日まで其の店頭之美を持續す。北京商店に於ける支那固有の製作品中に於て人目を惹くものは、各種の絹織物なり。例へば縐子、絹布、絹紬の類是なり。其の毛織物及び木綿の商品は歐羅巴

の製作品に係る。此外、北京商店は北京に於て製作せらるゝ蒙古人の各方面の需用品、即ち宗教上、社會上の需用品を始めとして、上は王族より下は賤民に至るまでの百般の需用品を網羅す。例へば宗教上の各種の樂器、佛事の附屬品及び佛事の器具、喇嘛の各種の帽子及び垂飾の類是なり。北京商店にては獨り北京製作品のみならず、歐羅巴の製作品をも販賣するを以て頗る雜貨に富む。歐羅巴製の時計、晴雨計、寒暖計、花瓶、彫像、匣、機械裝置或は機械裝置ならざる奇異の玩具等は、各商店に於て必ずしも販賣せられずとするも、多數の商店に於て販賣せらる。猶北京商店は原野の貧困なる蒙古人の需用品をも網羅す。例へばドンボ、木製、磁製、石製の梳、各種の杓子、是各種の勞働器具の類是なり。

フーレン（寺領）に於ける北京商店は、春秋の二期に於て商品に大仕込を爲す。雜貨に至りては年に二回三回最も多きは十回に仕込む。

北京商店は常に頗る多數の雇人を有す。如何なる小店にても五六人の雇人を有せざるなく、大商會に在りては四十人五十人最も多きは八十人餘の雇人を有す。雇人は十歳若くは十二歳の時、丁稚奉公に來り、最初は無給料にて勤む。爾後四年若くは五年を経て、彼等は始めて給料取と爲る。去れど給料取の時代は

未だ信用すべき者と認められず、労働者として待遇せられ、容赦なく使役せらる。給料取として多年勤続し、遂に信用を博したる者は商會員として待遇せられ、漸く一定の利益配當を受くる身と爲る。此配當の單位は、一兩に對する一厘即ち總賣上高の千分の一なり。此時より彼等は商會員として又或る程度までの商館の主人として郷里に歸り、兩親に面會するの權利を受く。但し其の權利には左の分限あり。即ち千兩の賣上に對する一厘より五厘までの配當を受くる者は三年を経て歸省するの權利を有し、五厘以上の配當を受くる者は二年を経て歸省するの權利を有し、十厘即ち一分の配當を受くる者は最早や郷里に住むを得て、輪番に庫倫に來るの義務あるのみとす。勿論彼等は其の希望次第にて永らく庫倫に住するを得るも、多くは皆毎年歸省す。此種の商會員の中には、全然庫倫に住かず、北京に在りて其の任務を行ひ、庫倫の商業より十厘の配當のみを受くる者も少からず。北京商人の庫倫の商店に老年の商人なく、彼等の中にて最も老年の者も四十歳四十五歳にて、五十歳以上の者を見ざるは以上の事情に原因す。北京商人の大商館に在りては、多數の商會員を有するが故に、彼等の歸省は一年に五回六回ありて、其の歸省の時に、彼等は新らしき商品を其の商店に運

び來る。故に北京商店が其の商品を仕込むの度数は不定なり。庫倫に於て其の商業に成功せし商館は益々支店の擴張を計る。例へば人和義の商館の如き、現時フーレン(等領)の市場の各所に四個の支店を有す。東富、隆和、玉人和、厚福、來號其他の商館は各二支店を有す。是れ畢竟多くの商品を捌かんが爲なり。何となれば蒙古人は、甲の商店に於て其の必需品を購求せざれば、乙店に往き又は丙店に往きて買ふを例とし、是等の商店が一の商會に屬するを識らざればなり。蒙古人中に在りて、此秘密を識る者は極めて少數にして、且其の識る者は土地の者のみ、且支那人は之を秘せんが爲に、各店の各稱を異にす。北京商店は、支那の家號にては蒙古人に不明なるが故に、蒙古人は北京商店に蒙古稱の名稱を附して之を呼ぶ。此事情も亦支那人に前記の目的を達するの便宜を與ふ。例へば最も古く且最も大規模なる人和義の商店は、蒙古人の間にバインムンケ商店の名を以て呼ばれ、本店より二百歩以内の地に在る。此商店の第二店はフインテリゲル商店と呼ばれ、第三店はミンカ商店と呼ばれる。

北京商人の小店は、現時廣場に位置を占めず、曲巷に位置を占む。彼等は自己所有の家を有せず、借家にて營業し、其の商店は街頭に出て、多くは露店なり。

彼等の商品は一般北京商店の商品と同一にして、唯其の量の少きのみ。去れど此商店に於て大商店に見るを得ざる精巧なる北京製作品を見ることを得。例へば古稀物高價の花瓶彫像の類是なり。是等の商品は、彼等が北京の古物市場に於て偶然に手に入れ、庫倫に携へ來りしものならん。

陝西省の商人に屬するフーレン(寺領)の商店中の大商店は庫倫の賣買城に在る商家の小賣出張店に外ならず。彼等の中の中商店及びフーレンの市場に於て貿易する小商店に至りては、其の商品を悉く庫倫の賣買城より仕込む。外觀より見れば是等の小商店の商業は頗る廣きもの、如くに見え、購買者常に其の店頭に蟻集す。是等の商店は現金を以てしては、茶をも貿易せざるに反し、其の商品との交換に於ては、蒙古人の持ち來る一切の物を辭せず。即ち彼等は獸皮、獸毛、毛氈、其の他蒙古の曠野の一切の産物を其の商品と交換す。而して彼等は是等の蒙古の産物をフーレンより賣買城の間屋へ送り込む。故に毎日騾、驢、牛をして曳かしむる荷車の列がフーレンより賣買城に絡繹たるを見る。是等の蒙古の産物中獸皮は其の大部分を占むるもの、如し。支那人の言に依れば、獸皮の十分の一は北京に送られ、餘は悉く恰克圖に送らるゝと。是等の小商店は實にフー

陝西商店

レン(寺領)をして現時の膨脹を爲さしめたるものにて、最近の十五年間に此處に現はれたる八個所の新横街は、是等の小商店の興す所なり。

職人

フーレン(寺領)市場の横街には、是等の小商人の外に、左の職業の人々居住す。

一、専ら饘餅と菓子とを販賣する五戸の菓子商店。

二、工場を有して赤白二種の蠟燭を製造販賣する二戸の蠟燭商店。

三、木匠。彼等の工場はフーレンに四十個所以上あり。彼等は毎日工作す。是れ彼等が注文品を製作するの外に、賣品として食卓、椅子、喇嘛教の書を藏する函、小櫃、匣、喫煙用の蠟燭の灰落、其の他の物品を製作すればなり。支那人の木匠は庫倫殊に張家口より來る。フーレンに於て彼等は一人として自己の家屋を有せず、皆借家にて生活す。彼等は借家料として一年に八包乃至十二包の磚茶を拂ふ。

四、銅匠。庫倫に銅匠は二十人あり。此地に於ける彼等の重なる平素の工作は、像を製作するに在り。餘の物は、注文に依りて製作するのみ。銅匠の大部分は多倫諾爾より庫倫に來る。彼等に依りて鑄造せらるゝ像は、敢て其の技術の優れたる所なきに拘はらず、其の價は北京及び多倫諾爾の像に比して甚だ高

價なりと風説せらる。

五、**畫工**。彼等は重もに陝西省より來る。庫倫に於ける彼等の作坊總數は七箇所を超えず。然も此れにても極めて貧窮の生活を爲す。去れど彼等にして格根の會計局の注文を引受けたる場合のみは然らず。此場合に彼等は假令高額の賃金を受けずとするも兎に角注文常に絶えず。即ち彼等ば此場合に布に像を畫き、木製土製の像を彩色し、其他自己の專業に係る他の各種の注文を受けて作業す。畫工の宿舍は多く不潔狹隘にして且つ其の位置は屋後に在り。彼等は此宿舍の借家料として一年に十包の茶を拂ふ。即ち一箇月三留に該當す。

六、**靴匠**。彼等は支那北部の各地より庫倫に來る。彼等の工場は矢張り大ならずして、外覽は畫工の宿舍よりも不潔なり。靴匠は自己の店を有せず、其の製作したる靴を支那人の間屋へ賣捌く。彼等は賣買城に於て支那人の貿易者より露西亞革を買ふ。露西亞革はイルクツスク及びトムスクの製革場の物が最も多く用ひられ、恰克圖の製革場の中には殊にマトレニンの製革場の物が多く用ひらる。

七、**毛皮匠**。彼等は靴匠に比すれば較々豊かなる生活を爲す。彼等の製造場は現時十二箇所あり。彼等は悉く陝西省出身にして財産を有する人々なり。蓋し彼等は各々五千乃至六千留を下らざる毛皮を製出す。去れど彼等の資本の運轉は一年に一次のみなるが故に、彼等は他の職業者に比して贅費を節約す。彼等は其の製造の材料即ち羊皮をフーレン(寺領)の肉商より得、フーレンに於て日々二百頭を下らざる牝牝の羊が屠られ、時として一日の屠殺數千頭以上に達するとあるを以て十二箇所の毛皮製造場の爲に原料の毛皮は不足を告げず。毛皮匠は皆各自に蒙古人の肉商の或る者と特約を結び、此肉商は其の特約を結びたる者にも其の屠殺したる獸皮を供給す。故に毎朝肉商が其の特約の毛皮匠へ毛皮の束を運ぶを見る。毛皮匠は毛皮の仕込を一年間に爲し唯だ夏に於て之れを製す。庫倫の官憲は支那人に圖拉河の水を汚するを許さざるが故に、彼等は毛皮を製するに當りて之を浸すに細流に於てす。支那人の毛皮の製品は蒙古人の製品に比して脆く、且つ温かならずとせらる。是れ彼等が毛皮の裏を極度に削り去るが故なり。然れど其の代りに支那人に依りて製せられたる毛皮は蒙古人の製したるものに比して頗る柔軟なり。毛皮匠が原形の儘にて

毛皮を賣るは至りて少額なり。彼等は多く毛皮を裁縫して布圍及び裘を作る。冬季に彼等は是等の商品を市場に運び、人目に觸れ易からしめんが爲に、之を桿上に懸けて盛に賣り、以て夏季に於ける放資を回收す。

尙商品の製造場を有せざる左の工匠あり。

八、絳裁縫匠。彼等はフーレン(寺領)に住せず多く賣買城バヤンに借家す。千八百九十二年にフーレンに居る裁縫匠は唯だ二人のみなりき。彼等は靴匠と同じく自己の店を有せず、又其の製作品を支那人の店に賣捌くことを爲さず、唯注文に依りてフーレンに住する支那人の衣服を製作するのみ。斯く彼等の職業の區域の狭きは、彼等の數の少なき原因なるべきも、彼等の賃銀は甚だ高價なり。例へば裘若くは、綿入の寝衣に對して、磚茶十個乃至十二個即ち三留ツリウ五十哥乃至四留シウ二十哥の裁縫料を取り、夏の寝衣に對しては、磚茶八個乃至九個即ち二留ニリウ八十哥乃至三留サンリウ十五哥の裁縫料を取る。

九、理髮師。フーレン(寺領)に於ける彼等の數は極めて少數なるも、裁縫匠の數に比すれば較々多數なり。彼等は床店を有せずして、其の業務を或は宿舍に於て、或は得意先へ出張して行ふ。支那人の商人は皆悉く理髮師と一年間の特約を結

市場の狀

び毎月彼等に理髮料を拂ふ。理髮師は此特約に於て、五日目毎に其の得意先なる商館、若くは支那人の家の者の辨髮を梳り、此外夏は十五日目毎に冬は三十日目毎に、前記の家に到りて頭を洗ひ及び剃るの義務を有す。此特約に於て一人毎回の理髮料は六シアラツアイなり。然るに特約外に於ては、剃髮及び梳髮料として、彼等は半磚茶以上即ち十五哥乃至十七哥半を取る。

十、終りに臨みてフーレン(寺領)の市場に居る工匠中の下等なる者は鐵匠なり。彼等はフーレンの市場の僻地に住し、日々鐵砧を擧へて貿易市場に到り、此處にて依頼に應じて勞作を爲す。例へば牛馬に鐵蹄を打ち、或は之を修理す。又時としては鐵架、斧、鋸、其の他の鐵の家具を作ることあり。

フーレン(寺領)の貿易地區の現時の住民と其の位置は上述の如し。此の内、特に市場と稱するは小商業を行ふ場所のみ。此市場の廣袤は、南北約三百二十サージェン、東西約六十サージェンなり。夜間此市場は、寂として人影を見ざるも、夜の明ると共に、支那人は日々此處に八十乃至百二十の毛布の天幕を張り、間屋より仕入れたる各種の商品例へば煙管の吸口、煙管、煙草入、玩具、念珠、布片、茶碗、鏡、條帶の類を賣る。是等の商品は勿論大商店の店頭に見るものなるも、此天幕に於

ける前記の雜貨の賣上高は、支那人の大商店に於ける賣上高よりも多額なり。此の天幕に時として土地の靴匠が出店す、其の製作の靴は商店に於て之を買ふに比して最低一割の安價を以て賣る。フーレン(寺領)に住する蒙古人に至りては一層の小商業を爲す。彼等は天幕内に於てさへも商業せず、賣買城及びフーレーの喇嘛より買ひたる雜品、古物を或は地上蓆の上に陳列し或は小風呂敷の中に入れて行商す。例へば古煙草、古扣鈕、皮片の類是れなり。此種の商業を爲す者は多くは家を有せず、又勞働に堪へざる婦人なり。此他専ら婦人の營業に屬するものは、蒙古人の男女の帽子の商業なり。此商業は勿論、利益の大なるものなるも、之れと共に困難なるものなり。何となれば蒙古人の帽子を縫ふは、頗る熟練と技巧とを要すればなり。曠野の蒙古人が庫倫に來りて賣る品は、女子に在りては牛乳及び馬酪、男子に在りては家畜、殊に馬及び羊なり。普通の馬の中等價格は時期と買人の需用とに應じて、十二留乃至二十留なり。概して家畜の價は冬に安く春に高し、馬其の他の大家畜の價の最も安き時期は一月二月なり。羊の價は年中殆んど變動なく、羊の大小に準じて二留より三留半までの間を下す。庫倫に賣物として曳き來らるゝ家畜の數は、何時も多からずして平素市

場に於ては二十頭の馬、百五十頭若くは二百頭の羊を見るに過ぎず。駱駝は一頭にて賣買せらるゝも、其の賣買は稀なり。斯く庫倫に家畜の賣買の振はざるは、庫倫が多倫諾爾若くは庫庫和屯の如き家畜の市場に非ざるに原因す。即ち附近の蒙古人等は、唯必要に應じてのみ賣るが爲に、家畜を此處に曳き來り、又日用品を買入れんが爲に、一頭づゝ曳き來るのみ。牧草の發生悪しく、若くは獸疫の流行する年は、時として庫倫の貿易市場に、一週の間全く一頭の家畜をも見ざる事あり。千八百八十二年に故人ブルジェワリスキイが庫倫に於て其の遠征の準備を爲さんとせしも、二週の間、此地に於て一頭の適當なる駱駝をも發見するを得ず、氏に購ふことを勧めたるものは、皆茶の輸送の爲に疲れ果て、瘦せ衰へ、一も遠征に堪ふるものなかりきと云ふ。當時偶露西亞商人の周旋に依りて、牲牝の駱駝を手に入れ、鄂爾坤の額爾德尼招より之を曳き來らざりしならんには、彼は竟に庫倫を出發するの期なかりしならん。其の代りに彼が此駱駝に對して拂ひし金額は實に多額なるものなりき。即ち彼は一頭の駱駝に對して、百二十留より百三十五留までを拂へり。然も通例ならば一頭の價六十乃至八十留にして多數の賣買にては、是よりも安價なりしならん。當時通例二十留の牛

が四十留の時價を有し、一ブード以内の重量の羊が四留より六留までの時價を有せり。蒙古人等は家畜の外に曠野より薪と乾芻を供給す。彼等は是等を荷車に積み、牛に曳かせて時としては五十乃至七十五露里の遠方より運搬す。去れど其の數は多からずして、日々三十乃至四十輛に過ぎず。薪は半アルシンのもの五十本以内にて二留の時價を有し、秋より蓄へられたる青き乾芻は一ブード五十哥を下らず。蒙古人が冬日も鐵把にて掻き集め、庫倫に運搬する所謂廢物なる一年越の乾芻は、前者に比して安價なり。即ち一ブード二十哥より三十哥の間なり。

フーレン(寺領)の市場に、割烹店と酒舗は千八百七十八年まで無かりき。此時まで飲食物は貿易市場に於て露店にて商はれたり。飲食物は専ら支那の兵士が之を商ひ、彼等は鐵架を廣場に立て、毛布を以て一方の風を防ぎ、煮たる羊肉、肉入の饅頭、油揚の餅、薑餅を賣れり。然るに千八百七十八年にフーレンの近郊の貿易膨脹し、市場の近傍に支那人の商店の數増加すると共に、先づ此處に食事を爲し、茶を飲み、酒を命ずるを得る一種の飲食店現はれ、遂に旅客も此處に宿泊するに至れり。現時此種の飲食店の數はフーレンの市場に五戸まで増加せり。

此五戸の中の二戸は、規模大にして五十以上の客間を有し、餘の三戸は前者に比して規模小なり。去れどフーレンの旅館は、蒙古の都市に遍在する支那人の旅館(客棧)と全く異なる。商業の爲に庫倫に來る商人は、此旅館に投宿せず。此旅館の營業をも知らず。フーレンの旅館の客間は、公用を帯びて若くは訴訟用を帯びて庫倫に來る小官吏、商人及び喇嘛等なり。予が庫倫に滞在せし時も、フーレンの旅館に、呼圖克圖の會計局と決算を行ひ、多倫諾爾のシアラスメーに住する喇嘛の給料を受取らん爲に來りし多倫諾爾の會計官投宿し居れり。是等の旅館の存在は、敢て貿易市場の食物市を閉鎖せしむるに至らざりき。即ち食物市は依然として貿易市場に行はれ、鐵架の周圍に於て常に地上に坐して、熱き肉入の饅頭を食ふ五六の曠野の蒙古人の群を見たり。猶此食物市の開かるゝ近傍に於て、常に藝人がウアイオリン、胡弓、琵琶其の他の樂器を彈ずるを見替者及び行脚僧が經を讀みて布施を乞ふを見たり。

現時庫倫に於ては、殆んど乞食の徘徊するを見ず。稀に門に立ちて經を讀み、布施を乞ふ小兒若くは老人を見たるのみ。庫倫に最も悲惨の饑饉の有りしは、千八百六十年の終期と、千八百七十年の初期なりき。當時蒙古全地は東于賊

蜂起の爲に、直接間接に打撃を受け、續いて天災の爲に一層の打撃を受け、庫倫に多數の乞食現はれ、彼等は悉く貿易市場に集まりしを以て、當時貿易市場は悲惨の光景を呈し、病みて半裸體なる彼等は、地上に轉輾して露天の下に倒死する者少からず。千八百七十一年に彼等の倒死は甚だ多數なりしかば、沙畢の公署は乞食中の一蒙古人をして衰弱せる病者を看護せしめ、彼等の死したる後、直ちに其の死體を城外に運ばしめたり。此任務の報酬として、彼の蒙古人は公署より衣食を給せられたり。爾後千八百七十年の後半期、即ち予が初度の庫倫旅行の時は、此地に乞食の數は多からざりしが、千八百八十年の初期に、喀爾喀に天災ありしかば、乞食の數は再び増加せり。此時の乞食は、無賴の徒を混じたる一種特別のものなりき。即ち彼等は佛陀の名を念じて布施を受くるに満足せず、竊盜を爲し、馬を盗み、茶券を贗造し、屢々詐欺を逞うし、喀爾喀の住民に多大の損害を加へたり。是に於て公署は非常手段を執り、毎週勢子を派し、包圍して彼等を逮捕し、其の所屬部落に押送せり。然るに此手段は其の目的の半ばをも達せざりき。何となれば、第一に新たに漂泊民續々襲來すると、第二に、押送せられたる者の大部分も亦少時を経て再び歸り來りたればなり。庫倫の呼圖克圖の會計

局が執りし手段は之に優りて其の目的に適ひたり。呼圖克圖の會計局は、壯健の窮民に、或る勞働を課して、彼等に衣食を給し、病者の爲には養育院を建て、彼等を收容せり。千八百八十四年に、喀爾喀が其の狀態を恢復すると共に、此養育院は廢せられしも、其の古跡は今尙存し、庫倫の乞食は、現時此古跡を自己の巢窟と爲せり。庫倫の西南隅に存する乞食の此集合地は、現時悲惨の光景を呈せり。彼等は塵垢の堆積中に起臥し、比較的強壯の者は世人に恵まれ、若くは拾ひ集めたる樹枝を以て陋屋を造り、草若くは氈布を以て其の上を覆ふも、病弱者は屋脊なき露天の地上に横臥して死を待つのみなり。彼等は同情深き尼等より施されたる着古しの襤褸を唯一の被服として身に纏ひ、死するも葬られず、其の場所に放棄せられて野犬の餌食と爲れり。

人民は朝の五時より貿易の市場に現はれ始め、太陽の没するまで此處に居り、太陽の没するに至りて小商人は布の天幕を撤して散ず。日中殊に夜間の警保の爲に、廣場の屯所の賣買城のツサルグチエイの公署管理商民部衙門より派せられたる支那人の警吏駐在す。彼等の數は甚だ不定にして、種々の時に於て三人より六人までの間を往來するも、多くの場合に其の數は四人なり。晝間は彼等

は屯所に坐して家事を營み事件起りて急使來る毎に出張す。夜間に於ける彼等の任務は夜番の役を務むるに在り。此夜番人の定員は五人と定めらる然れども此警吏の威嚴壯重なるより自ら夜番の任を行はざるを得るに至り、フーレン(寺領)の商人は夜番人を雇入れて彼等の給料を負担する事と爲れり。此雇はれたる夜番人は總て七人にて其の中の一人は彼等の長なり。此夜番人の長は商人より夜番料を徴收す。庫倫に住む露國商人も夜番料として一年に毎戸磚茶十五個を負担す。夜番人は二人にて庫倫の市場の全街を巡邏し其の巡邏の證として銅鑼を打つ。毎回の巡邏は二時間を経て行はれ左の時間割を以てせらる。第一回の巡邏は夕の九時に、第二回の巡邏は十一時に、第三回の巡邏は夜の一時に、第四回の巡邏は三時に、第四回の巡邏は夏の朝の五時頃に、冬は同じく五時に行はる。毎回の巡邏は銅鑼を打つの數にて其の何回目なるを知らしむ。即ち第一回の巡邏の時は銅鑼を一打し、第二回の時は一打し復た一打し、第三回の時は一打し次に二打し、第四回の時は一打し次に二打し終りに一打し、第五回の時は一打し次に二打し終りに二打す。夜番人は夜警の外銅鑼を打つの數にて凡の出來事を警報するが故に之を知ると必要なり。例へば夜番人が賊

を捕へんとし市民の應援を求むる場合には銅鑼を連打し、出火を發見せし時は銅鑼を亂打するの類なり。晝間フーレン(寺領)の市場を檢察する爲に、前記のツザルグチエイ(管理商民部衙門)の警吏の外に、シアピン(公署)沙畢衙門、即商卓特巴衙門より一人の檢察官が任命せらる。此檢察官の任務は土地の清潔を監察し、各種の争鬭を審理し、賊を捕縛するに在り。斯く庫倫の警察の配慮は表面行き届きたるが如くなるも、フーレンの市街及び貿易市場の現状は殆んど評し難し。蒙古人は貴賤老幼男女を問はず、到る處に於て大小便を辨ず。加之蒙古人は便所に於て大小便を辨ずるを不可能と爲し、其の排泄の爲に直ちに街上に出づ。蒙古人の生活が斯く不潔を極むに拘はらず、庫倫の空氣は比較的清潔にして、支那人の都府の市街を滿たす其の不潔と惡臭は、此處に無し。是れ一は空氣の作用に因るものならんも、其の重なる原因はフーレンの市街を彷徨して凡の不潔物を食食し、其の同類の死骸をも食ひ盡して餘さざる餓狗の群に在りと謂はざるべからず。廣場に於ては日として争鬭の演ぜられざるなく、且つ之と共に殺人さへ演ぜらる。或日余は廣場に在りて左の如き活劇の演ぜられたるを見たり。一人の喇嘛は他の者より喇嘛の服を二包茶券(支那人の商店にて發行する

信用手形を以て買ひしが賣りたる者は其の受取りたる茶券の贋造なるを知り、彼より服を買ひたる喇嘛を追跡して廣場に捜し出し、他の茶券を以て之に代へんことを迫れり、然るに彼の喇嘛は其の渡したる手形は全く他の手形なりと主張して之に應ぜざりしに、不幸にして證人あり、其の詐偽を許かれ、彼等に毆打せられて十五分の後に死せり。彼はフリーレン(寺領)の喇嘛に屬せしかば、アイマク(部落)の三人の友、忽ち來りて彼を其の家に運び去れり。當時余と偕に此活劇を目撃せしフリーレンの露西亞商人等は彼の喇嘛の死を疑ひて、掏兒輩毆打せらるゝことあれば、永く痛打せらるゝを避けんが爲に死を装ふ者多しと云へり、是れ或は然らんも、余は唯貿易市場に於て殺人の行はるゝことある事實を擧ぐるのみ。喇嘛が殺されたる日、同じ廣場に於て朝の七時に、或る貧民の支那人が急病にて街上に倒れしが、其の知己若くは親屬を尋ね出すに終日を過せり。此日は暑氣殊に酷だしかりかば、死人の顔は黒色を帯び來り、鼻口より血が漏れ出で、全く腐敗し始めたる狀なりしも、庫倫の官憲は、尙死體を運び去るの處置を執らざりき。夕刻に至り始めて親屬の者が棺を運び來り、跪きて經を讀み、其の死體を棺に藏めたり。然るに何故か此棺は其の夜の中に運び去られずして、翌日の朝まで街

上に放棄せられたり。

狹斜の巷

フリーレン(寺領)の公共の家屋を記述し終るに方りて、假令公然のものならざるも、公共の家屋の一部として認むべき狹斜の巷亦此處にあるを記述せざるべからず。例へば貸座敷並に居酒屋の種類あるも公許に非ずして、一種の特別の營業を爲す。庫倫に於て貸座敷と居酒屋を營業する者は、獨り支那人のみならず、即ち貸座敷は支那人の下層民なる日雇人の類之を營業し、居酒屋は家具を賣る小商人之を營業す。支那人の貸座敷は娼妓を養はずして、男女が密會する室のみを有し、家主は客の需に應じて酒食を供給す。遊客が此處に來る順序は、男が廣場の何處かに於て女を見出し、約束成立するに至りて、女と偕に此貸座敷に來る。時として富める客の爲に、貸座敷の主人は、自ら女を周旋することあり、此場合には、貸座敷の主人は男より約束の媒介料を受くるの外、其の周旋したる女よりも周旋料を取るが故に大に利益を占むるも、此事は稀に有るのみ。是等の貸座敷は狭く暗く不潔なること甚だしく、外見に依りて狹斜の稱を與へ難きものなり。此貸座敷は一室より成るのみにして、支那風に依り半ば炕の占むる所なり。來客の爲め此室内に寢臺を据え、之を四方より天井まで板にて圍み、木造の

板戸にて閉ぢらるゝ高さ一アルシ半、幅一アルシの隙間より之に入る、牀上には垢染みたる且つ破れたる毛布あり、其の一方を捲きて枕の形を爲したるものにして、寢臺の設備は之に止まるのみ、此室料は婦人に支拂ふに於ては半磚茶即ち三十哥より三十五哥までなり、去れど時として喇嘛が女と無料にて同衾せんことを約することあれば、此場合には室主は酒を賣りたる外に何の利益をも有せず、此貸座敷の定客は支那人の商館の番頭、蒙古の中官吏の子弟、親戚及び師の許に在る青年の喇嘛なり、次にフーレン(寺領)の居酒屋は店を開放して各種の酒を賣る小店なり、此居酒屋にて阿片をも喫するを得、阿片を商館にて喫するは商館支配人の禁ずる所なるを以て、支那人の商館の番頭等は、特に阿片を喫するの目的をて此處に来る者多し。

ガンタン

喇嘛の居住する庫倫の第二の部分、ガンタン(喇嘛の學問所とも云ふべし)なり。ガンタンはフーレンの西の方高地の上に位置を占む、此高地は西の方桑錦烏拉山まで延び、フーレンを距る一露里半なる青吉爾圖塔羅の廣漠たる礫礫の溪谷に於て塞爾必河の廣場と相別る、現時支那人の商店はフーレンの西方に膨脹し來りて、一方は殆んどフーレンに接し、他方はガンタンを隔つること百五十

サージェンに過ぎざるを以て、若し喇嘛の住居及び廟の所在地のみをフーレン(寺領)と爲さず、貿易場をもフーレンに算入する時はガンタンは既にフーレンと接續せりと謂ふを得、ガンタンは原と佛教の高等學科を修むる者の爲に設けられたるが故に、其の歴史は庫倫に於けるツァニト即ち佛教の高等修業の運命と其の消長を共にす、庫倫に於ては第二代の哲布尊丹巴呼圖克圖の世に蒙古に來りし西藏の喇嘛に依りて開始せられたり、是等の喇嘛の到來の年即ち庫倫にツァニトの開始せられたる年は、記録が此事を明記せざるが故に、指示するを得ざるも、古傳に據るに庫倫がクイマンタルに在りし時、即ち千七百三十六年より千七百四十年に亘るの年代に、ツァニトはツウクチンの廟に於て修せられ、初め喇嘛等はツァニトを修せんが爲め庫倫にのみ止まらず、諸所に轉じたりと云ふ、又一説に據るに、第二代格根の時にツァニトは額爾德尼哲に於て修せられ、其の滞在の短日月なりしに拘はらず、此處にてツァニトを修せんことを希望したる喇嘛の數十人を増したりと云ふ、又同説に據るにツァニトを修する喇嘛のアイマク(部落)は彼等の數が五十人に増加せし時に格根に公認せられたりと云ふ、此説は額爾德尼額爾克編年誌に明記しあるを以て、其の時代は吾人の明知する所

なり、此編年誌の千七百五十六年の記事中に左の如く記す、喇嘛哲布尊丹巴はフーレン(寺領)にツアニトの檀林を建て、其の住職にドンホルマンチジュシリ喇嘛を立てたり云々。此時よりツアニトを修する喇嘛の数は漸くフーレンに増加せしが、彼等は尙未だフーレンの廟内に住して、他のアイマク(部落等)と同居せり。然るに庫倫が隆盛に赴き、政治及び貿易の中心と爲るに至りて、學者の喇嘛等はフーレンに住するを厭ひ、フーレンを離れんと企てたり。彼等は既に第三代格格根の時に此事の請願を始めしが、第四代格格根の時に至りて、始めて其の目的を達せり。即ち第四代の格格根は彼等の請願を納れて、千八百九年に現今の地にガンタンを設立せり。當時ツアニトの廟は大小の二個建てられしが、五代の格格根の時、小廟増築せられしを以て、現時此二廟は其の大きさに於て、建築風に於て、全く同等のものと爲れり。曾てフーレンの喇嘛等が支那人の壓迫を避くるの途を講じ、其の後三十七年を経て、彼等が青吉爾圖の低地に移住せしことは前説せし所の如くなるも、此事は大にガンタンの膨脹を助けたり。彼の喇嘛哲布尊丹巴の邸宅が新築せられ、ツアニトの廟が再建せられ、數個のツアニトの廟建立せられ、ガンタンのアイマクに別たれたるは此時に屬す。アイマクの數目下此地

に四個まで増加せり。即ちニダシチョインビル(ニダシガチョイリン)ニハドマイオガ(四)ラムリム是なり。然るに短時期の間に此地に於て、二人の格格根死せしかば、甲は千八百四十二年に死し、乙は千八百四十八年に死せり。喇嘛等は此地を以て不祥の地と爲し、再び寒爾必に歸れり。是に於てガンタンは再び獨り學者等の住所と爲れり。去れど同時に此地は庫倫の累代の格格根等の埋葬地と定められたり。傳へ言ふ、或日第五代格格根は喇嘛等と談話するの際、余は死後必ずガンタンに出現せんと言ひしが、格格根の死せし時、喇嘛等は格格根の彼の言を想起し、格格根が此地に葬らるゝを望むものと爲して、此地を格格根の埋葬地と定め、後ち庫倫の呼圖克圖等をも此處に葬ることを定めたりと。斯の如く現時第五代呼圖克圖の墓に、千八百六十八年に享年十九歳にして死せし第七代哲布尊丹巴呼圖克圖の墓が加へられたり。去れど第六代格格根は丹巴多爾濟に葬られたり。

ガンタンの外觀はフーレー(寺院)と略同じ。即ち廣き方形の廣場ありて、其の中央に、恰もフーレン(寺領)にマイタリ及びツォクチンの廟あるが如く、ツアニトの二個の廟配置せらる。黃牆内の宮殿の外觀は唯フーレーの宮殿に比して小なるの

み而して其の兩側に壁外より二棟の新築の建物見ゆ。是れ五代及び七代の格根の遺骸の安置せらるゝ靈廟なり。余は曾遊の時に竟に此靈廟内を視察するを得ざりき。最初は内部の改築中との口實を以て、其後は鍵が呼圖克圖の許に保存せられて此處に無しとの口實を以て、余に視察を許さざりければなり。今回の旅行に於ても、余は強ひて此靈廟を視察せんとせざりき。蓋し是等の靈廟は皆同一構造にして、餘は斯る靈廟の二を丹巴多爾齊の寺院に於て視察するを得たればなり。ガンタンに於ける喇嘛教の建築物は同じく方形に布置せらる去れど格根の宮殿の有る南方には其の建築物著しく少數なり。市街の外觀及び邸宅の内部は全くフーレー(寺院)のものと同じ。ガンタンの西北に二十八個の白塔あり、是れ罪障消滅諸難回避の爲に信仰篤き佛徒に依りて建てられたるものなり。去れど其の建立者の名は不明なり。

庫倫の第三の部分はガンタンの如く全く庫倫と分立し、庫倫を距る五露里の東方に位置を占め全然獨立の都市を成す、賣買城是なり。此部分が如何なる事業を専務とするかは其の名稱の示す所なるを以て、茲に説明するに及ばざるべし。庫倫の賣買城はフーレー及びガンタンが布置せらるゝ長圓形の溪谷に位

賣買城の
位置及び
區分

置を占む。此の溪谷は、此處にて他の名即ちトラインタラなる名を有す。即ち此都市を距る四露里の外を流るゝ圖拉河溪谷の意なり。外面よりすれば賣買城は正しき方形を成す。賣買城は圍壁を有せざるも各邸宅の墻垣は並列して此都市を圍み宛然圍壁の觀を呈す。賣買城の内部にフーレーの方向より並行せる三道の街衢通ず。而して此三道の街衢の入口には木造の門ありて常に開放せられ、且つ扉を有せざるものあり。此門内の賣買城は二地域に分たる、即ち一は支那人の居住する商業の地域にして市の中央を占め所謂廟内を成し、他は蒙古人の居住地域にして、恰も廟内を四方より圍む廓外を成すもの、如し。此二地域の名稱は蒙古人等の間に存せず。彼等は是等の地域を呼ぶに、唯内外なる語を用ゆ。即ち支那人の居住地をトトロと呼び、蒙古人の居住地をガタと呼ぶ。蒙古人が斯る區別を爲せしは賣買城の商業地域の周圍に圍柵の存するに因ること疑ひなし。賣買城の内部と外部を別つ此圍柵は七門を有す。即ち三東門、三西門、一南門是なり。是等の門は木造にして、且つ支那人の一般の規則に従ひて、日没後は閉鎖せらる。故に夜間は一の地域より他の地域へ通行するを得ず。

賈買城の土地は庫倫の低地の一般の土地と異なる所なし。即ち其の土地は一般に粘土にして或る場所は砂地を成し所々に石の累積を見る、其の大部分は矮草にて蔽はる。春季雪の解くる時圖拉河には小湖形成せられ熱暑の時に涸る。圖拉河は前に述べたる如く賈買城を距る四露里の外を流れ時として賈買城の住民が水を汲むを得る唯一の場所を成す。圖拉河の解氷は多く四月二十日より三十日までの間に行はれ、十月二十五日頃に氷結す。河水は七月の末若くは八月の始めに氾濫す。去れど此河の左岸よりも高く殊に賈買城の方面に於て隆起するが故に、河水の氾濫は賈買城の住民に何等の害を加へず。圖拉河の外賈買城を距る百サージエンの地に於て北より南にウリヤタイ河流る。此河は其の源を賈買城の西北に在るウリヤタイ山に發し、圖拉河に注ぐ。ウリヤタイ河は其の水域に於て尙若干の水源を有するも、是等の水源は水量豊かならずして、五月の末にウリヤタイ河の水源は常に涸渇し、水は透明と爲りて此河を形成する諸水源は其の水を百五十サージエン若くは二百サージエンの距離に送るのみ。故に圖拉河は賈買城の住民が水を仰ぐ唯一の場所なり。支那人は常に此河より牛馬驢の脊に於て水を運ぶも、蒙古人は其の肩に擔ひて水を運ぶ、斯く水を運ぶの困難なるに拘はらず、彼等は水を運ぶ專業者を設くるの必要に想ひ到らず。

賈買城の地質と灌漑が此の如き性質なるが故に、庫倫の低地の一帶に於て一の林叢をも、一の樹木をも見るを得ざるは當然の現象なり。賈買城を距る六七露里の西方即ちフーレン(寺領)と反對の方向にして、少しく其の西なる圖拉河の沿岸及び圖拉河の支流に依りて形成せらるゝ島に、二三十本の揚柳及び落葉松を包含する四個の森あり去れど、第一に此森は其の距離遠きを以て、第二には同所の樹木は繁茂せずして漸次自滅するを以て、賈買城の低地に算入し難し。此島に遊牧する蒙古人は樹木を伐ることを禁ぜられたるが故に、之を亡ぼす他の方法を案出せり、即ち彼等は樹皮を傷け、其の枯死するを待ちて之を伐採す、此の如くにして多くの樹木の亡びたるや疑ひなし。庫倫の喇嘛等の語る所に據れば、今より四十年或は四十五年前に圖拉河の沿岸は、東の方賈買城外に延び、西の方サンギンウラに達する一帯の森林なりと、唯庫倫を繞ぐる山のみは樺、楊柳、栢、落葉松、杉、松、檜、林檎、野蓋、薇、其の他の樹より成る林にて蔽はれ、住民に燃料を供給す。建築用材はウリヤタイ山に産す。但し其の産額は多からず。八月の半ば

より此處の山林に褐葉胡、越橘子、鹽莓、其の他の果實が産し、蒙古人の婦人に依りて採集せらる。彼等は是等の果實を小桶中に入れ、八フット乃至十フットを半磚茶の價即ち三十二哥半の價にて賣る。獸類の中には此處の山野に於て鹿鹿を産す。鹿鹿の角は藥種として支那人等の間に珍重せらる。故に高價を以て百留若くは百留以上の價格賣買せらる。此他山羊、野猪及び多數の狼を産す。匍匐蟲の中には數種の蛇殊に毒蛇を産す。蒙古人等は是等の野獸を獵するに小銃を用ひ、時としては短銃を用ふることあり。

賣買城の一部は専ら支那人の居住地にして、他の一部は蒙古人の居住地なるも、最近の十年間に、蒙古人の居住地に支那人の住宅及び商店の建てられたるもの少からずして、現時蒙古人は支那人と雜居す。賣買城の總人口は男女合せて五千人と概算せらる。此中千八百人は支那人にして餘は悉く蒙古人なり。

賣買城の市街は其の大部分に於て決して狹隘と謂ふべからず。支那人の居住區に於ても、蒙古人の居住區に於ても、市街は頗る廣きものなり。去れど市街の全部は屈曲して不規則なり。例へば甲の市街は灣曲し、乙の市街は中部に於て廣く、兩端に於て狭く、丙の市街は一端に於て廣く、他の端に於て二輛の運送車

賣買城の市街

も並行し難きまでに狹し。然も賣買城にはフリーレ、若くはガンタンに於て見るが如き馬車を驅るを得ざるまでに狹き巷街なし。賣買城の市街は磴道ならざるが故に、降雨の時若くは雪解の季節には泥濘甚だしく、夏には支那人が一日の中に數回、或は汚水を散布し、或は前夜の殘飯を撒き、或は大小便を注ぎ、或は愈々窮したる場合には、運搬したる水をも撒布するに拘はらず、塵埃塵々たり。市街に撒水するの目的を以て、支那人の居住區には、ウリヤタイ、河より小渠通ぜらるゝも、夏は多く涸渴し、唯だ市街が撒水を要せざる時のみ水を滿たす。市街の兩側に通ぜらるゝ此溝渠の上には小橋を架す。而して溝渠と邸宅の塙との間に幅三アルシン、若くは四アルシンの歩道を通ず。此歩道は主要の街衢に在りては杭を以て車道と區別せられ、二巷街に在りては瘦せたる楊柳を植えらる。賣買城の支那人の居住區に於ては、フリーレに於けるが如く直接の市街に面したる住家なく、若干の商店を除くの外は、背塙を繞らし門を構ふ。支那人は門の側に耳門を設けず、是れ彼等が終日門を開放するが故に耳門を設くるの必要を感じざるに因るならん。

賣買城の支那人居住區は専ら商店より成る。而して其の中の大商店は左の

支那商店の市街

如き構造を有す。落葉松の丸太を堅く列ね粘土にて塗りたる塀は、市街に面して立てられ、其の中央に廣き門が設けらる。門柱は時として煉瓦にて組み立てられたるものもあるも、多くは木の角材なり。門は屋脊を有し、其の裏庇及び垂木は赤、青、緑等の顔料にて彩色せらる。是等の色の配合は屋脊を斑のものたらしむも、遠く之を望めば頗る美なり。殊に棟が其の他の彫刻若くは繪畫にて裝飾せられたる時は一層然り。各戸の門には必ず若干の扁額懸けらる。此扁額の題辭は毎年元旦に變換せらるゝものにして、出所を古典に取りたる祥字なり。豪商に在りては、門及び門の屋脊を彩色し、題辭の外に、古代の衣服を着たる支那人の像を畫きたるものにて裝飾す。即ち我等が支那の茶壺若くは花瓶に於て見る所のものに同じ。支那人は常に廣き宅地を構ふ。然も外部より之を見る能はずして、門より本邸に至るまでの間は、荷車を反へし難きほど狹し。是れ邸内が店舗及び本邸の種々の附屬建物にて塞がるゝと、其の建物の配置方とに原因す。門に接して直ちに邸内一面に店舗、若くは倉庫の長き建物配置せられ、街上より見ゆる。此大建物の後には、厨房、小使部、屋敷倉等配置せらる。此の如くなるを以て、支那人の商店の門を入らば、常に三方より平家建の長き建物にて建て圍ま

れたる小さき中庭を見ん。中庭は之を繞らすに無蓋なる廊下若くは圓柱を立て、周圍の建物の屋檐にて覆はれたる小廊を以てす。廊下の廂を成す屋檐の端は、門の廂に於けると同じく、彫刻及び繪畫にて裝飾せらる。夏季多くの商店は、廊下に花卉及び植物を鉢若くは箱に植えて陳列す。時として此の如き花卉は花壇に陳列せらる。是等の花卉の陳列は邸内に頗る風致を加ふ。殆ど變化なき蒙古の曠野を見たる眼に於ては一層深く感ずるなり。冬季は花卉の代りに、杉其の他の針葉樹を陳列す。大商館に在りては、門と店舗の間に板を敷き詰り、小商店に在りては、門より店舗の入口までの間に板敷の小路を通ず。店舗の入口は兩扉の戸を有せずして、或は藍色の麻布にて縁を綴りたる毛氈の幕にて塞がれ、或は上部に孔を穿ち、其の孔を紙にて張りたる單扉の板戸を有す。商店に於ける窓は、中庭に面したる一方にのみ設けらる。窓は框より成り、其の格子は我が露國の窓格子よりも細かく、且つ圓形、三角形、立方形、八角形等の種々の形を具ふ。格子は表面より彫刻にて裝飾彩色せられ、裏面より硝子の代りに紙を張らる。去れど紙は先線を通ずること多からざるが故に、支那人は中庭に面したる壁の上半部を悉く窓と爲す。豪商の商店に在りては、窓に硝子をも張るも、硝

子を張るは極めて僅少の部分のみ。支那人は紙を張る其の大なる窓に慣れて、今に至るまで一層善く光線を通じ、且つ寒氣を避け得べき硝子窓を設くるの必要を認めず。是れ或は彼等が美術に僻し、硝子を通じて来る眞實の光線を、經驗せざるに因るものならん。蓋し豪商は硝子を其の窓に張るや、必ず此硝子の上に花、動物、支那の古代風俗等の圖畫等を貼附すればなり。此地の支那人は商品倉庫に藏め、店舗には見本のみを置くが故に、店頭に備ふるもの通例甚だ少なく、織物見本の類の如き一二反に過ぎず。此外店舗には雜貨、玩弄物、化粧品、菓子、砂糖、煙草其の他の物品陳列せらる。是等の雜貨は其の儘棧の上に陳列せられ、貴重品の硝子にて蓋はれたる棧及び棚に陳列せらる。商品は常に壁の間に陳列せられ、或る商店に在りては第三壁に商品の衣服を懸け置くもあり、去れど多くは第三壁を以て客の應接所と爲す。故に此處に炕床を設置す。炕床の上には之を覆ふ毛氈と、高さ半アルシンの卓の前に二三個の枕の外、何物をも備へられず。卓の前には常に火鉢を置く、即ち冬季は暖を取るが爲め、夏季は喫煙の爲なり。去れど此處は中等の顧客の應接間に過ぎず。上等の客は店舗の別室に招かれ一層の款待を受く。此處には同じく炕床が設けられ、二三個の床几

置かれ、卓の上には秤、商業用書籍、帳簿等備へられ、時としては商店の帳場の一切の附屬物及び數個の戸棚をも備へらる。商品は此室に陳列せられざる代りに、四壁は鏡、圖畫、書にて裝飾せらる。フリー及び賣買城に於ける支那人の豪商の商店の設備は以上述ぶる所の如きものなり。豪商の商店の設備は皆同一なるも、或る商店に在りては商品の見本を陳列せず、帳場のみを設く。此種の商店にては客の要求に應じて商品を倉庫より運び來る。

次に中商店の商品は、大商店のものと大差なし。中商店は殆ど皆別室の帳場を有せず、且つ商品の貯藏額も大ならず。是れ中商店は支那より多額の商品を仕込むことなく、必要の起る時に商品を庫倫の北京商店より仕入るゝに因る。中商店の營業者は多く支那よりの移住人なり。中商店は市街に面して建てられ、戸の代りに二十乃至十三の板にて店を鎖す。入口より二歩許の處に賣棧が配置せられ、此賣棧の棚の上に商品陳列せらる。零細の商品例へば繩、馬鞍、鞍の裝飾品、蓑具の類は天井に懸けらる。店には主人の居間に通ずるの入口あり、主人の居間には帳場が設けらる。客及び他の人々は此處に入ることなし。何となれば此處は客の應接間に非ずして一家の居間なると、且つは客は零賣品を買

ふが爲に來り、卸賣品を買ふが爲に來らざるが故に、店頭に永居するの必要なきに由るなり。

次に一層下りたる小商店は、其の外部の組織に於て、中商店と同一なるも、内容に於て中商店と異なる。他の土地に於ける如く此處の小商店の商品も日用品のみにて、其の商品の數も各店主の人物、其の資本、信用、商品の仕入方及び賣捌品の千差萬別なるに準じて一定せず。賣買城の廓内若くは支那人の居住區に於ては、重もに大商店營業し、蒙古人の居住區に於ては中商店及び小商店營業す。去れど此處にても商店は蒙古人の住宅と混ぜず、別に一市街を成して支那人居住區の柵の側に位置を占む。此の如くなるを以て賣買城の支那人居住區の門を出て蒙古人の居住區に入らば、再び支那人の商店に接せん。此處の支那人の商店は頗る繁昌を極め、人民は支那人の居住區に於けるよりも常に多し。

商店の外、此處には行商も存す、獸肉を木盤に盛り秤にて賣る者あり、或は蒙古人の獵したる雁鴨時としては兔を柵に懸けて賣る者あり、蒙古の婦人は此處にて果實油、其の他の物品を賣り、又帶、小兒の玩具、帽子等を賣る者あり。去れど商業の繁昌地は支那人の居住する賣買城の西部の中央の門の場所にして、他の場

所に於ては此處に於けるほど繁華ならず。中央西門の場所は實に市場と名づくるを得。唯だ此處には廣場なく、市場として設備整はらざるのみ。但し此處は賣買城の門の入口にして、數街衢の合したる地點なるを以て、此處の場所は一街衢の幅よりも廣し。

賣買城の支那人居住區には商店の外に支那人の宿泊する二旅館あり。宿泊者は一室乃至四室を占むるを得るも、支那人の旅館の構造は各室を獨立の者と爲すが故に、各室を合せて一の居室と爲すを得ず。室内には炕床の設ありて、其の上に毛氈が敷かれ、又枕が備へらる。此の他室内には二脚乃至三脚の卓及び椅子が置かれ、壁には書畫が懸けられ、其の裝飾は各室を通じて一律なり。庫倫の賣買城に於ける各旅館は三十室を有す。故に客室の番號も亦三十なり。一室を占める者の一晝夜の宿泊料は煙食料をも合せて一磚茶、露貨の六十、哥乃至六十五、哥なり。賣買城には備車夫なく、旅館も彼等を雇ひ置かず。去れど旅行の爲に、乘馬及び荷車を雇ふを得。但し豫め此事を旅館の主人に依頼し置くを要す。賣買城には酒舗なく、料理店の類ありて酒食及び喫茶を爲さしむ。此料理店は煙草、麵、饅頭、餅、其他之に類する零細の商品を賣る小商店内に設けらる。

店を通り抜けて奥に入れば、此處に旅館の室と同構造なる三室あり、客は此室に入りて其の欲する食品を命ずるを得。酒食の料は頗る廉價にて、養たる羊肉は支那の一斤に付十六哥、鶏卵五個は十六哥、肉入團子二十個は三十哥、酒精のダラスン一壘は十八哥、同半壘は十哥、酒精のハニシン一壘は六十哥、同半壘は三十六哥なり。此の料理店に支那人は多く來らざるも、其の代りに蒙古人は此料理店に來りて多額の金錢を消費す。殊に酒氣を帯びたる者は此料理店の酌婦を目的として來る。賣買城に此種の料理店は五十七戸あり、何れも皆蒙古人の居住區に在りて營業す。

賣買城の南部殊に東南部に庫倫の材木商が集中す。木材の商業は庫倫に於ける支那人の營業の重なる都分の一にして、庫倫の賣買城とフレンに此營業者の商店は百あり。其の中の二十八商店は張家口商人のものに屬し、三十六商店は庫々和屯商人のものに屬し、一商店は、ビルホトの商人のものに屬し、餘は陝西省商人のものに屬す。賣買城内のみにて材木商の商店は三十以上あり、其中の大商店は六にして、毎年三百包茶乃至六百包茶の木材を取引し、即ち五千五百留乃至一萬乃至一萬一千留の木材を取引す。爾餘の商店の取引高は小額に

木材販賣

して、一年の取引高は五十包茶乃至六十包茶、即ち八百留乃至千留の上を越えず。庫倫よりの、毎年の、木材輸出高は十萬留若くは少しく、其の以上に達す。

木材は庫倫の周圍の地に於て伐採せられ、其の大部分は庫倫の北方八十露里の地に於て伐採せらる。即ち其の地方は布爾噶勒台、庫倫を距る六十露里、グアイマンダル（同上三十露里）、グニグルフ、ウルト（同上八十露里）、ハンダガイ（同上六十露里）及び朋貝子、マンドルワ、公、殊に羅卜藏、多布達親王、ジャンの部落地方なり。大資本の材木商は部落民に掛合ひ、彼等に屬する山林の立木の買取を契約し、然る後に其處へ支那人の勞働者及び蒙古人の勞働者を派遣して伐木せしむ。蒙古人の勞働者は、此場合に支那人の商店より、木材の長さ、厚さに準じ、一本の角材に付、十シアラツアイ（シアラツアイは大磚茶の三十分の一にして露貨の二哥に當る乃至二十シアラツアイの貨銀を受く。小資本の商館は一定の寸法に木取りたる角材を蒙古人より買ひ取る、是等の角材は必ず一定の長さ、幅を有す。即ち長さは支那の尺度にて七尺、幅は一尺、厚さは種々にして一定せず、刻印を以て計算せらる。各刻印は支那の尺度にて二寸の者なり。角材には五刻印乃至九刻印が印せらる。

庫倫に於ける木材の販賣及び輸送は年中行はれ唯春に於て其の取引が少しく減ずるのみ。木材輸送先の重なる地は庫庫和屯、歸化城、張家口及び多倫諾爾なり。輸送は夏に在りては牛車に積み冬に在りては牛馬若くは駱駝に於て駱駝す。庫倫より木材運送の商隊が特別に發せらるゝことは極めて少なし。何となれば庫庫和屯より製造品を張家口より茶を多倫諾爾より獸皮を運送し來りし運送夫は返り荷として此處より木材を運送すればなり。勿論是等の運送夫は運送に便なる貨物例へば獸皮獸毛の類を先づ求め是等の貨物のなき時に止むを得ず木材を運送す。唯だ庫庫和屯及び豐州の運送夫は庫倫に製造品を運送するの請負を爲すと共に庫倫より庫庫和屯に木材を運送するの約束を結ぶ是等の運送夫の増減は庫倫より南方へ木材を運送する運送賃と大關係を有す。庫倫より毎年運送する木材の額は庫庫和屯へ牛車に於て千車乃至千六百車及び駱駝に於て二千駄なり。平均各駱駝及び牛車の載貨を二十八刻印の木材角なりと計算する時は一年間の額は八萬刻印乃至十萬刻印なり。張家口へ輸送する額は牛車に於て千車乃至千五百車及び駱駝に於て三千駄乃至三千五百駄、即ち九萬刻印乃至十四萬刻印なり。多倫諾爾へ輸送する額は總額にて一萬

五千刻印乃至二萬刻印なり。庫倫より庫庫和屯までの木材運送賃は支那人の語る所に據れば年に依りて異なり各一輛の牛車若くは駱駝に付一兩乃至一兩二錢なり。庫倫より張家口までの運送賃は前記の牛車若くは駱駝に於て一兩三錢乃至一兩八錢なり。多倫諾爾までの運送賃は此地が張家口よりも庫倫に近きに拘はらず張家口までの運送賃と同一なり。是れ庫倫より多倫諾爾への往復の運送夫が少きに因る。但し近年に於て多倫諾爾及びビルホトより庫倫へ穀類の供給が増加せし爲に兩者間を往復する運送夫の数は年毎に増加するの傾向あり。

蒙古人より山林の立木を買ひ取る庫倫の商人殊に大商人は木材の價格を見積るに頗る困難を感ず。伐木料は蒙古人に依りて定められ一年間に於ける伐木料は其の區域に準じて五包茶乃至十五包茶なり。支拂は多く茶を以て行はるゝも支那人が銀貨及び商品を以て支拂ふ場合あり。小商館は蒙古人より木材を一刻印に付十二シアラツアイ乃至十四シアラツアイの相場を以て即ち二十四哥乃至二十八哥の相場を以て買ひ取る。併し二十八哥の相場は正しきものと認むるを得ず。何となれば支那人は一方に於て蒙古人の窮民に木材の代價

を商品を以て支拂ひ、他方に於て支那人は木材買取の約束を蒙古人と結び、彼等に商品を前貸し、遊牧民の窮迫に乗じて其の商品の賣價を上げ、木材の價格を下ぐればなり。千八百九十二年に庫倫に於て支那人の材木商より輸送せる材木は、一刻印に付十八シアラツアイの時價を以て、即ち露貨の約三十六冊を以て販賣せられたり。

賣買城に於て木材を販賣する中商店及び小商店の多數は、角材を販賣するの外に、木の各種の製作品例へば荷車、膳具、家具、器具、其の他を販賣す。彼等は是等の商品を専ら庫倫及び曠野の蒙古人に賣捌く、然も各商館の賣上高は四十包茶を下らず。

庫倫に於て木材の商業を營む商店は、木炭の製造に従事せず、木炭の製造は蒙古人の專業に屬す。但し賣買城に於て木炭製造に従事する支那人の組合は二三あり。

蒙古人の
家屋及
生活
状態

蒙古人は支那人と市街をも異にして居住す。彼等の圍牆は粘土にて塗られず、落葉松の丸太より成る木柵なり。門は支那人の門に見るが如き翼庇を有せず、何れも一樣に赤く塗られ、支那人の門と反對に何時も開放せられず。蒙古人

は牛車に乗るとなきが故に、實を言へば彼等は門の必要を有せず。彼等は木戸より出入し、其の家畜乗馬をも此處より出入せしむ。蒙古人の邸内は廣さも附屬家屋は多からず、多くは圍牆の上に一方の翼庇を作り、其の下に牛車箱、桶、其の他の物を置く。邸内の中央にフーレン(寺領)の喇嘛邸内に在るものと同一なる一棟若くは二棟の張幕建てらる。此張幕内に於て蒙古人は冬を過す。張幕の後方に、夏季に於て住居する塗家が建てらる。富裕の蒙古人の邸内には、此塗家は二棟若くは三棟あり。去れど是等の附屬家屋の事を詳説するの必要なし。何となれば是等の家屋は、支那人のものも、蒙古人のものも、同一構造なればなり。フーレン(寺領)の賣買城に於ける一般の家屋は木造なり。支那人の家屋は外觀は藏造りの如きも、唯粘土を以て木材の表面を塗りたるに過ぎず。彼等が粘土を以て木材の表面を塗るは、木材の腐朽を防ぐが爲め、又屋内の温氣を保つが爲なり。建築用材はウリヤタイ山(ウリヤタイ河源)より伐採す。去れど近年ウリヤタイ山の木材は減少せしを以て、庫倫の西北の種々の地方より木材を運搬す。建築用材としては重もに落葉松が用ひらる。家屋の翼庇、圍牆及び邸内の各種の附屬家屋は皆落葉松の丸太を以て造らる。蒙古人は粘土を以て圍牆を塗らざるも、支那人

と同一に其の塗家を屋脊に至るまで粘土にて塗る。賣買城の土質は粘土質なるを以て、粘土の原料は到る處に求むるを得。去れど良質の粘土は賣買城の西北に在る青吉爾岡山より採掘せらる。庫倫にては此粘土を以て壺瓶、煉瓦、瓦を製作す。陶業は支那人の専業に屬し、蒙古人は此種の工業に全く關係せず。煉瓦は露國のものに似たる角材形にして、其の焼かれたるものは七フント乃至九フントの重量を有す。焼かれたる煉瓦の價は二十五個に付六十哥乃至六十五哥なり。焼かれざるものは二百個に付同上の價格なり。煉瓦は焼かれたるものも焼かれざるものも唯壺を築く爲めにのみ用ひらる。支那人中には瓦を以て屋根を葺く者あるも、其の多數は矢張り落葉松の丸太を以て葺く、概して庫倫に於ける家屋の建築は甚だしく高價ならざるも、其の困難は木匠の不足なる點に在り。庫倫に於ける木匠の總數は三十人の上に出でず、彼等の多數は支那人なるも、世人は彼等を雇ふを好まず。何となれば彼等の工事は蒙古人の木匠の工事に比して不堅牢なればなり。家屋は皆請負にて建築せられ、塗家の標準の建築費は十包茶乃至十二包茶即ち露貨の二百二十五留乃至三百留なり。言ふまでもなく、蒙古人は悉く其の家を有するに非ずして、賣買城の蒙古人の多數は借家

住なり。借家は帳幕にして、一帳幕の一個月の標準家賃は、二留乃至三留なり。蒙古人及び蒙古の婦人は、二三人の共同にて借家するを常とす。故に彼等が一個月の家賃の負擔は數哥に過ぎず。

賣買城に於ける蒙古人の食費は、彼等が極めて粗食なるに依りて輕微に辨せらる。蒙古人の常食品は小麦粉、獸肉及び茶にして、此三種の食品は左の相場を有す。磚茶は支那の一斤半に付六十哥乃至六十五哥、色楞格多倫諾爾若くはピルホトより輸入せらるゝ二等品の小麦粉は、支那の一斤に付九哥乃至十一哥なり。蒙古に於ては一般に裸麥及び裸麥の粉を用ひず。小麦粉の一等品は少額が輸入せられ、支那の一斤に付十二哥乃至十三哥なり。骨附にて販賣せらるゝ家畜の肉は、支那の一斤に付四哥乃至六哥なり。支那人は蒙古人に比し美食を爲し、副食物として野菜を用ゆ。故に支那人は賣買城の郊外に菜園を開き、其の收穫を賣買城に於て賣る。野菜の相場は南瓜一個に付半磚茶若くは三十哥乃至三十二哥、胡蘿蔔干芹菜、蒞菹は權衡に懸けて賣り、支那の二十五斤乃至二十七斤に付一磚茶、支那の甘藍は三十把にて一磚茶、馬鈴薯は權衡に懸けて賣ること稀にして、多くは之を並列し、一尋の長さとして賣る。一尋の長さに並列せら

れたる馬鈴薯は十シアラツアイ若くは露貨の二十哥カポなり。此他菜園にて葱蒜、支那種の胡瓜を栽培す。去れど其の産額は極めて少額なり、燃料として蒙古人は落葉松、時としては樺の薪を用ゆ、去れど彼等の殊に貴重する燃料は獸糞にして、冬季各帳幕毎に七十乃至八十車の獸糞を消費す。

支那人の従事する職業は専ら商業にして、唯だ少数の者が工事に従事す。支那人の商店にては支那の商品と共に露西亞の商品をも販賣す。彼等は露西亞の商品を恰克圖及びウエルフネウデンスク、イヒルト、ニジネゴロドスクの定時の開市に於て仕入れ、支那の商品を北京庫庫和屯(歸化城)及び張家口より輸入す。此輸入の途を以て庫倫に歐羅巴の商品、即ち適切に言はば、英吉利の工場の製品は豊かに供給せらる。

賣買城ヤイマシに住する蒙古人に在りては専ら商品の運送に従事す。彼等は茶及び獸皮を恰克圖に運送し、駱駝と羊の毛及び露西亞の商品を張家口に運送す。彼等は賣買城の支那人に雇はるゝと共に庫倫に居住する露西亞人に雇はる。蒙古人は其の家畜を賣買城に於て飼養せず、曠野の牧場に遺し置く。故に賣買城の蒙古人中に千頭の家畜を飼養すと言ふ者あるも、實際賣買城に在る數は、馬は

百頭を超えざるべく、羊は千頭を超えざるべし。蒙古人は賣買城に於て乳牛を飼養せず。何となれば乳牛の飼料は羊の飼料よりも高價なればなり。然も蒙古人の言ふ所に據れば、羊を飼養するは乳牛を飼養するよりも大に利益ありと、去れど牛酪は獨り乳牛の産物にして、此産物は蒙古人に依りて曠野より供給せらる。乳は牛のものゝ外に羊のものをも用ゆ。羊毛は一年に一回即ち秋に於て之を剃り、一頭より剃る毛の量は一フント乃至一フント四分の一なり。此羊毛は賣買せられず、蒙古人の生活に於て最必要品なる毛氈を織るの材料に供せらる。毛氈を織るは蒙古の婦人の重要なる家務なり。羊は一年に一回のみ仔を産む。一疋貧窮なる蒙古人は山羊を飼養し、支那人は豚のみを飼養す。去れど其の飼養額は少數にして、賣買城全市内に於て三十頭の上を超えず。賣買城に於て牧畜が斯く振はざるは主として獸畜の飼料が高價なるに因る。庫倫の周囲の地は、牧草に乏しきに拘はらず、賣買城の蒙古人は、冬季の爲に乾芻を準備せず、故に冬季生草が絶えたる時に蒙古人は高價の乾芻を買はざるべからず。賣買城に於ては乾芻を庫倫の北六十乃至七十露里の地に在るフツアル及び哈喇河の岸より仰ぐ。斯く乾草が遠方より供給せらるゝが故に、其の價は廉な

るを得ずして、乾草を供給する蒙古人は、此商業に依りて莫大の利益を占む。去れば冬季一ブードの乾芻の價が、二磚茶即ち一留二十哥及び一留三十哥に達する場合少からず。勿論蒙古人は其の家畜に斯る高價の乾芻を與へず、冬季鐵把にて掻き集めたる枯草を買ふも、此枯草も甚だ廉ならず。即ち枯草の一車四ブードは二磚茶より廉なること稀なり。冬季賣買城に於て一頭の馬の飼料は、蒙古人の慣用の經濟法を以てするも十留乃至十二留を下らず。

賣買城の住民を其の信教の上より區別すれば、道教徒及び佛教徒の二種なり。前者には單に支那人が屬し、後者には蒙古人の全體と支那人の一部が屬す。此他賣買城には蒙古人の妖術教徒が二十人まで住す。庫倫の妖術教徒は其の妖術教徒たると共に佛教徒なり。其の實證を示せば、予が交際せし妖術教徒の老婆は尼の誓を立てし者なりき。要するにフーレン(寺領)に於ける妖術教は、宗教として存在せず、魔術として、占術として存在す。斯く賣買城には道教佛教の二信教あるのみにて、之に準じて廟宇も亦二種なり。賣買城に立つ廟宇は總て四個にて、其の中の三個は道教の廟宇に屬し、支那人居住區の各所に立ち、一個は佛教の堂にて蒙古人居住區の西方に立つ。

住民の宗教別

以上擧げたる公共の建物の外に、賣買城には支那人居住區の中央にケセルの廟と相對して劇場が立つ。この劇場は常興行に非ずして、俳優も張家口及び庫倫和屯より乗り込む。此乗込は一年に三四回にて、其の乗込の時は賣買城頗る殷賑を極む。

次に支那人の墓地も亦庫倫の賣買城に於ける公共の場所の一と爲すを得可し。同墓地は賣買城の北端にありて、區域廣く、繞らすに木塙を以てす。此墓地の南に一家屋あり、墓地番人の住所なり。同家の裏に兩扉の大門あり、墓地の入口にして、此に葬むる死者皆此門を通過す。支那人の墓地に在る墳墓の數甚だ多からず、墓地を設けたるより五十年餘に亘れるに、此間墳墓の起れるもの二百に上らず。支那人の風習として土地を所有する者は、家族の者を自己の所有地に埋葬するを優れりとするに依り、此風習に基づき、庫倫に於て死亡する者あれば、多くは近親の者之を長城内の故郷に送り、庫倫に遺さるゝ者は極貧の者にして、就中一家を有せざる獨身者多し、支那人の棺は常に甚だ大にして、長さ一サージエンを下らず高さ一アルシン、四分の一にして、之に用ふる板の厚さ二寸乃至三四寸に至ることあり。棺の形、稍我が國の棺に似て、頭の部分廣く、足の部分狹

支那人の墓地

く、而して枕の所の板往々外部に曲突することあり、通例足部より高きを以て、棺の蓋は傾斜の状態を爲すを例とす。是れ死者の屍を濕氣より防ぎ、雨水をして棺より流れ落つるに便ならしめんが爲めなり。支那人は己の墓地に墓を有せず、死者は地中に埋めず、屍を棺に收め、棺を墓地に運びて地面の上に置き、棺の上部の板に死者の姓名、其の出生地、年齢、死亡の日等を記す。更に富有にして死者を敬ふこと深き者は、時として地面の上に置かれなる棺の上に蓋を設く。葬式の方法此の如くなるを以て、支那人の墓地には汚臭紛々殆ど堪ふべからざるこゝとあり、其の外観亦甚だ厭ふべき状を爲す。時日を経過して破損したる棺の内より、死者の骨、頭蓋、汚衣等の散見することあり、窪地及び雨後の水溜りには到る處一種の黄紅色を呈せる脂の如きもの浮動し、見る處として不潔汚臭あらざるはなし。

慈善の目的を以て建てらるゝ病院、濟貧院、養育院等の如きは、賣買城バヤンに存在せず。此の如き設備なきに拘はらず、同地方に乞食の割合に少き所以は、是れ蒙古人が惻隱の情深く、凡そ帳幕に來り請ふ者あれば之に恵むが故なり。惟、微毒患者は此恵に與かるを得ざるに、該患者同地方に甚だ多し。喇嘛ラマの無妻の生活と

富める支那人の獨身の生活が、婦女子をして淫亂に陥らしむるの大原因たること勿論にして、婦女子は幼少より淫を行ひ、且荒淫極まれり。父母は己の女の淫に耽るを見るに、冷淡の目を以てするのみならず、一二柵の茶の爲め拾六留シク乃至參拾留サンシク之を賣りて墮落の淵に落すことあり。夫は其の妻にして家に報酬を持參さへすれば、他に赴きて淫を罷ぐも良心に耻とせず。倫理の見解此の如く低く、男子の數、女子に比して著しく多き庫倫クレンに於て、微毒の猖獗甚しきは自然の結果なり。微毒を患ふる者は喇嘛ラマに就きて治療を受け、少しく愈ゆれば曠野に住くも、愈へざれば辛じて市中を徘徊し、又は牆に倚り轉輾して全く人の顧みる所とならず。此の如くにして遂に死するに至ることなるが、多くは其の汚れたる屍は犬の寸斷する所と爲る。

此事たる歐洲人の視て甚だ奇怪と爲す所にして、必ず問うて曰く、何人か果して此市を監視する者あるか、此市に何等かの官署あるか、何等かの主治者あるかと。我輩答へて曰はん、主治者あり、官署あり、而して彼等は秩序をも監視するの任ありと雖とも、前記の事件の如きは、彼等の視て全く當然の事と爲す所にして、官衙に於ては唯窃盜、掠奪、強迫、殺傷、詐僞等の犯罪事件を處分するのみ。賣買城バヤン

は庫倫の一部分を爲すを以て、固より庫倫長官辦事大臣の管轄する所なりと雖とも、賣買城に於て最も勢力を有するはサルグチエー(商民管理官)にして此地に住し、サルグチエー衙門(管理商民部院)と稱する特別の官署を有す。サルグチエーの職の庫倫の賣買城に設けられたるは千七百四十二年以來のことにして常に滿洲人を以て此職に任じ、法律に依れば、三年毎に交迭すべきものとす。サルグチエーの職掌は市中の秩序を監視するの外、商業に依りてフリーレン(寺領)及び賣買城に滞在し、並に同上の目的を以て土附圖汗及び車臣汗のアイマク(部落)の境内を旅行する支那人は、皆其の直轄する所なり。サルグチエーは蒙古人と支那人との訴訟事件を審理すと雖も、特別權要の事件は自ら裁決するの權利を有せず、事毎に辦事大臣に具申す。サルグチエー衙門は本人の主管する所にして、同人の外裁決を爲すの權利のみならず、事件に容喙するの權利を有する官吏一人もあるなし。故にサルグチエーの官房たるに過ぎずして、書記(司官)ピチエチ(筆帖式)十五名あり、内支那人五名、蒙古人拾名なり。此書記は一人として定額の俸給を受くる者なく、唯支那人に商業鑑札を下付するに就て徵收する衙門收入を利用す。支那人がサルグチエー衙門より受くる所の鑑札は、北京の理藩院

の特別の規定に基きて交付せらるゝものなり。此鑑札の最高價額は、茶六箇半即ち銀價約百兩なり。サルグチエー衙門(管理商民部院)より交付する鑑札の平均数は九十乃至百二十の間なるを以て、衙門の収入は約壹萬五千兩と爲すを得べし。衙門に奉職する者は、此金を分配するものにして、通例衙門に八十人以上を使用する小使の給料も此内より支給するものとす。サルグチエーが支那政府より受くる所の俸給は、僅に三百兩に過ぎざるも、收入非常に多きを以て、此職を得んと欲する者頗る多く、北京に於ては概ね五千兩以内にて此職を賣る者決して之れあるなし。

以上叙述したる所にては、庫倫の狀況未だ悉く盡したりと謂ふべからず。喇嘛のフリーレン(寺領)と賣買城の間に散在する建物甚だ多く、若し之を一箇所に集め合したらんに、殆どフリーレン及び賣買城にも劣らざるの都會を爲さんこと疑ひなし。先づフリーレンの貿易市場の南にツサハーデーレと稱する特別の商業區域あり。此處に尊き過達里の背後にフリーレンの食物市場あり、同市場に於て貿易する蒙古人此に住す、肉商(土音、ヤルガチン)殊に多し。彼等は市

場の附近に帳幕を張り、其の側に於て販賣の爲め購求したる動物を屠り、皮は毛皮商に鬻ぎ、肉は切り割きて市場に運び、地上に直接陳列し、又は柵に懸けて販賣す。此等の商人中資力裕かにして、日々十頭以上の羊を屠る者は、荷車にて肉を市場に運び車上より販賣す。露國人の庫倫に來る者は車上の肉を買ふこと最も安全なり。羊肉の販賣方法は通例左の如し、胸と兩前足より成るの前部は二箇半乃至三箇の茶直段、後部は四乃至六箇の茶の直段、前足一足は一箇半乃至二箇、後足一足は二箇半乃至三箇半の茶の直段なり。牛肉は必ず骨と分ちて販賣し、其の直段は肉一フントに付き二半乃至三半、シヤラツアイ即ち五哥乃至七哥骨は一フントに付き二乃至二半、シヤラツアイ即ち四哥乃至五哥なり。又市中に生きたる牛羊をも曳き廻して販賣す。羊の直段は茶十箇乃至十六箇、牛は茶三十箇乃至五十箇なり。同市場に於て肉の外、麪粉、挽割米及び其の他の穀類をも販賣す。此商業を營む者はフーレン(寺領)の喇嘛にして、前記の物品を支那人より買ひ入れ、利を加へ、量を減じて蒙古人に轉賣す。此に奇とすべきは斯かる事情あるに拘はらず、蒙古人が支那人の商店に就て購求するよりも、市場に赴きて喇嘛より麪粉を買ふを可とすることなり。

ツサハデーレの南東に滿洲及び蒙古アンバン(長官)の衙門あり。是れ亦二街に配置されたる六十餘戸より成るの一市にして、衙門は此市の南部を占む。其の木柵にて圍まれたる廣大なる邸は、東より西に向ひて三部に分たれ、政廳は其の内の中央にあり、西側を以て番兵及び小使の住所とし、東側を以て囚徒の拘留所とし、順に従ひ曳き出して訊問す。拷問及び懲罰の刑具を藏する建物、衙門の文庫及び衙門の財産を藏する倉庫亦此に在り。衙門の背後に在るの街衢には、衙門に奉職する官吏及び彼等と同居する親戚の住する家屋あり。寺領の此部分の東方に獄舎あり、二重の高き柵にて圍まれ、其の丸太は尖りたる杙の形を爲して上に向へり。其の内部は他の此種の建物と異ならず、余は別に之を詳に記すべきも、此には唯此獄を觀覽すること何人に取りても敢て困難に非ざることを一言せん。凡そ看守に接し、之と語ること數分にして、囚徒に施濟するを許さんことを請はゞ可なり、但し案内者たる看守に幾分の贈賄を爲すことの必要なるは言ふまでもなし。

衙門に相對しツサハデーレの南西に位する市の部分をホロンと稱す、即ち客舎の義なり。此に喀爾喀の札薩克の客舎あり、是れ札薩克が呼圖克圖を拜せんが

爲め、王侯の會議に列せんが爲め、又は交代に依りて土謝圖汗のアイマク(部落の事務所に奉職せんが爲め、庫倫に來る時に利用せんが爲め、建築して維持する所のものなり。されば此建物が建築せられて後、僅に一箇月間の住居に使用せらるゝ爲め、時として五六年空屋と爲ることあるは亦怪しむに足らず。此客舎に常住する者は、唯其の留守居のみなるが近頃庫倫の官憲は當該部落の囚徒を其の郷里に輸送せんが爲め、此客舎に收容するに至れり。目下庫倫に在る客舎の數、已に三十餘に達し、而して其の内の二たりとも一軒の家屋より成るものなく、必ず三四軒を有し、増を繞らし、時として小庭の附屬することあり。規模の大なるは、輪奐の美なるを以て名ある客舎中、就中著名なるは第一、三音諾顏及び其アイマクの諸侯、第二、達親王、第三、額魯特貝子、第四、サイト王、第五、額爾根札薩克、第六、和碩特貝子、第七、額爾德尼貝勒、第八、達賴王、第九、ツルゲチ王、第十、土謝圖汗のアイマク、第十一、ハラギン、巴圖爾札薩克、第十二、コビントーセーゲン、第十三、ドン公、第十四、ウイツザン、トー公及び第十四、土謝圖汗及び汗のアイマクの札薩克、即ち和託輝特諸王、第十五、ミハン公、第十六、ニール公、第十七、札薩克圖汗、車臣のアイマク、第十八、阿海公のもの是なり。之より稍東に當り相分離して第十九、土謝圖汗

のアイマク(部落の札薩克、オー王の客舎あり、遂に庫倫の領主たる朋貝子の建物相櫛比す。朋貝子の住所たる家屋の外、此貝子は更に庫倫に己のホシユン(旗)の政廳、タマガー(印務處)を有し、此政廳の側に獄舎、土音、シヨロン)及び文庫有り、又此等と相並んで朋貝子の親戚の家屋相列なる、即ち其の母の家及び曾て朋貝子の後見と爲りて其の部落を管理したる貝子の伯父ツエ公の家屋等はなり。フーレン(寺領)の南西隅の外には前記の建築物の外、他の建物なし。庫倫の東約一露里半を隔て、フーレンと露國領事館の間に、今庫倫要塞の新建物あり、是れ支那兵駐屯の爲め、千八百八十三年に建てられたるものなり。當時蒙古は突然戰時状態に宣言せられ、庫倫保護の爲め、支那兵派遣せられたり。此要塞の建築は今に至るまで、蒙古人が支那政府の壓制の結果として記憶する所なり。當年蒙古全土に旱魃あり、飼料不足を告げ、次で寒氣凜烈を極めたりしが、庫倫に接近する喀爾喀の東方のニアイマクは、其の徵發せられたる兵員の服裝、武裝、出兵費として六拾萬兩餘を費したるに、此外、支那兵に諸種の便宜を與ふるの勞を執りたりしが、要塞の建築の如き其の最たるものなり。支那人は、要塞建築の爲め、蒙古人より材木二千六百六十四本を徵發したりしが、之が調達輸送は汗王會議

の命令に依り、庫倫附近の五ホシユン(部落)に課せられたり、即ちナイ貝子(現今のブン貝子)の部落は六百六本、チャンジュンオー王の部落は六百七本、ナイタン公の部落は五百五十本、マンドルワ公の部落は五十本、車凌多爾濟札薩克公の部落は百九十一本の材木を供給すべき事となりしが、此内、マンドルワ公の部落は徵發の命に應ぜざりしを以て、之に負擔せられたる材木は、ナイタン公の部落に於て全く之を供給したり。此等の材木輸送の爲め、車馬を供給したる外、各部落は更に要塞建築の爲め、特に百騎の人を出すべき事と爲り、又建物を塗り、且之に百五十箇の煖爐及び炕を作るが爲に要する煉瓦及び粘土は、本營より十露里以内を隔る地方より徵發すべき事となりしが、之が輸送の車馬を雇ふに由なく、且支那の官憲は此の如き事務に慣れざるを以て、庫倫に牛を牽き來りて住復する商隊は、其の旅券の檢閲を受くるに當りて、強制手段に依り、一定の期限内に煉瓦と粘土とを陣營に供給せしめられたり。此の如き勞働に慣れざる家畜(就中戈壁のものは疲勞して復た運送に堪へざるに至れり。工事竣成するに及んで支那政府は蒙古人に對し其の勞に酬いんが爲め、材木一本に付五分宛を支拂ふことに決したるを以て、要塞の建築費は總計百參拾兩二錢を要したり。

此要塞は方形にして南に一門あり、周圍約二百四十サージエンあり。其の城壁は蒙古にある一般支那風の型に依りたるものにして、兩柵の間に土を填めたり。此城壁の高さニアルシンに達す。柵の外面上部には生煉瓦を積みたるを以て、此城壁は胸壁の價値を有し、要塞の各方面に四十五箇の銃眼あり。次に此城壁は生煉瓦及び木造の部分とも内外より粘土を以て塗られたり。

庫倫城は廣丘の麓にあり、其の麓の中間に露國領事館ありて城内を瞰望するを得べし。丘の頂より瞰望すれば、城内の建物の位置のみならず、各兵卒の市中を歩行する一舉一動に至るまで仔細に見るを得可し。城の入口は其の堅牢の點、各商店又は茶の倉庫の門と壘も異ならざる通例の木造の兩扉の門を以て防衛す。城内に入りて先づ目に觸るゝものは衛兵の住する二軒の兵舎にして、此二兵舎の南より北に連なりて兵營二列に建築せられあり。此兵營の間の街衢を通行せば、一小廣場に出でん、其の中央に通例衛門及び大官の邸宅の前に建てらるゝ高柱あり。更に此廣場の北方に當りて又二家屋あり、其内の西部の家屋には要塞司令部設置せられ、他の東部の家屋は將校の官宅たり。此家屋と相並び、城内を横ぎりて、東より西に連なれる長き建物あり、是れ要塞司令官の住所に

充つるものにして、此官邸は城内の大街衢を占め、爾餘の建物は皆城壁に沿ふて築かれたり、即ち東西の城壁に沿ふて八軒つゝの兵營と、北部の城壁に沿ふて二軒の建物あり。其の中の甲は北部城壁の中央恰も司令官の邸に對する所にして穀倉たり。他の建物は稍小にして武器を藏する所とす。此武庫は要寨を築きたる後、直に武器を入れたる以來未だ曾て開きたることなく、其の鍵は司令官の手にありと云へり。されば余は固より庫内に入りて武器を實見するを得ざりしと雖も、將校との談話に依り砲は八門ありてクルツツ式八吋砲なるを知れり。砲架は唯模範として一箇を運び來り、他のものは蒙古の工匠松樹を以て之を作れりと云ふ。右と同時に此武庫に銃一千箇を藏したりしが支那風の滑腔銃と施條銃の混合にして、其の何式なるやは明かならず。彈藥の運ばれたるもの五十函なりしが爾來今日に至るまで既に九箇年の間解函せずして、直接濕地に積み置くと云へり。

此要寨を東に去ること半露里以内にして、小丘の間に露國領事館あり、千八百六十三年乃至千八百六十五年の間に建築したるものなり。初め露國領事館は此所より稍南西の方面蒙古諸王の客舎の間にありて、千七百八十六年の建築に

露國領事館

係れり。今日の露國領事館は庫倫に於て外觀上最も美なる建物なるも、其の位置の便宜の地に在らざるは惜むべし。例へば水の乏しき爲め、露國領事館の館員は庭園の設備に少からざる勞力と時間と費用とを費したるに拘はらず、庭もなく菜園をも有せず。領事館は二階建木造の大家屋にして、傍屋二戸あり、此外本館に接して平家建の小なる禮拜堂あり、其の屋上に尖頭あり。領事館の二階は悉く領事の住所とし、階下は右を書記官の室とし、左を翻譯官の室とす。傍屋中左方は庫倫郵便局とし、同局長の官舎亦此に在り、右方の家屋は司祭(僧官)の住所とす。此外館内に猶讀經僧、庫倫學校生徒、哥薩克收容に充つる建物並に厨房等あり。此等の建物は皆外觀上稍觀るに足るものあるに拘はらず、朽ちたること甚しく、就中郵便局長及び司祭の住する傍屋の如き最も甚し。領事館の東方に露國人の墓地あり、初め之を設くるに當りて露國領事の苦心少からざりしと云ふ。喇嘛教の法規に依るに死者の埋葬は呼圖克圖の住所を去ること十清里以内にてす可らずとのことなるに、露國領事館は哲布尊丹巴格根の宮殿を距ること六清里に過ぎず。故に蒙古人は露國領事館の邸内に死者を埋葬したるを知るや、直に其の屍を取り去らんことを要求したり。露國領事は最初に之

を辯解して屍を地に埋めたるは唯暫時のことにして、支那人の例に依り親戚の者必ず之を取りて郷里に持ち歸らんと云ひしに、當時之にて黙したりしが、爾來既に二十年餘を経過し、其の間露國人の墓の増加したること數十なるに、蒙古人は露人の埋葬を見慣れて全く之を冷淡視しつゝ、恰も己の法規を忘れたるもの如し。然れども今日庫倫の露國人亦自ら己の墓のことを忘れたりと云ふて可なり。墓地の墻破れ、墓守の無き爲め家畜は墓地を蹂躪し、犬は之を掘り發き、其の亂雜の狀名狀すべからず、墓の堆土の代りに穴穿たれ、墓標墓碑の如き一もあるなし。庫倫の宣教師アルヒフ、ボリキンの墓に鑄鐵の板を付したる石碑立てられ、其の他の死者の墓に石碑及び其の他の敬慕の意を表するもの立てられたりとのことなりしに、此等のものは悉く蒙古人の竊取する所と爲り、墓標の十字架も蒙古人亦之を竊取して薪材とせり。今は已に昔と異なりて、蒙古人亦言ひ掛りを爲すが如きことなきを以て墓守を置くを可なりとす。往昔には喇嘛は例へば露國領事館の二階の尖頂に懸りたる國旗は、呼圖克圖の宮殿に立てるタヒルイン、モドイ（蒙古人が寺院の門及び高貴なる喇嘛の家屋の前に立て、祭品又は燈を吊すの程）より高しとて國旗を撤去せんことを求めたり。當時露國

人は何の口實を以て之を拒みたるやは余の知らざる所なれども、此事に就ても蒙古人は不満足ながら、首肯したるは疑ひなし。此の如き些々たる要求、言ひ掛りは、初め幾回起りたるやを知らず、例へば露國人の馬に乗りて寺領内を騎行すること、露國人の家畜を放飼する等の如き事に至るまで一々抗議を申込まれたる。而して蒙古人が此等の抗議を申込むや、頗る強硬嚴肅にして、露國人家畜を牧すべき所なく、乾糶を得るに由なく、燃料を三倍高價に買入るゝ等殆んど生活すること能はざるが如く思はれたり。然れども實際然らずして、蒙古人は一たび要求を言ひ出したるのみにて黙し、露國人は從來の如く依然として生活し、且つ其の生活の狀態や蒙古人より遙に自由便宜なり。彼等は今日に至るまで蒙古人の草場より代價を拂ふことは勿論、草を刈り、冬には蒙古の森林より薪を伐り、夏期家畜を放飼するに當り、露國人好牧場を求むれば此に放飼して代價を拂はざるのみならず、蒙古人をして此に入らしめず、獨り領事館員此の如く行ふのみならず、フーレン（寺領）に住する悉くの露國人亦皆斯く行ふものなり。露國人の同地に住する者、四季其の數を異にするは勿論なるも、未だけて百人を下りたることなし。

庫倫正教
會定員の
任命及醫
師の必要

庫倫に於ける露國商人の狀態及び働作に關することは、余は本書第六卷蒙古に於ける露國の貿易及び貿易商のことを専門的に記述する段に於て詳説すべく、此には唯本年千八百九十二年より庫倫に於ける露國人の精神的生活が庫倫領事館の正教會に定員の僧官を定置せらるゝ事と爲りたるに依りて著しく改善せらるゝことを一言するに止むべし。正教會の司祭を有するの必要は、余の千八百七十六年庫倫に始めて赴きたる時、露國人の已に悟りたる所にして、我が茶商は庫倫に住する同胞の請を容れて、庫倫の會堂に僧官を置くの費用として、庫倫を通過する茶一箱毎に一哥宛を義捐するに決し、此金の毎年徵收する高貳千五百乃至參千留に達せしも、一年に一次、基督復活祭に庫倫に司祭者を招ぐに過ぎずして、爾餘の時には露國人全く宗教の式に與かる能はず、病者にして死するも引導する者なく、死者は葬式の禮なくして地に埋められ、子女生るゝも一年間洗禮を受けしむる能はず、聖餐の式に與からずして死する者亦少からざりき。千八百九十二年帝國參議院は、教務院長ホベドノスツエフの建議に基づき、庫倫會堂に定員の僧官を置く事となりたれば、前記の不便は已に昔の夢となれり。

露國人は皆喜んで余と此事を語りしが、今不満足のもの一あり、歐洲風に養

成せられたる醫師を有せざること、是なり。實に庫倫の露國居留地は人口に依れば、支那各地に在るもの、内の最も大なる者なるに、領事館に住する者のみにて、通例五十人、庫倫に居る露國人總計二百人餘なり、全く醫術の助なし。疾病に罹れば喇嘛の外に治療を請ふべき者なく、而して此喇嘛、中西藏の醫術を學びたる者多かるべきも、實際之に精通する者甚だ多からず。加之、良醫は屢々招ぎに應じて出張することあるを以て、必要の時常に必ずしも之が治療を受くるに由なし。且つ此西藏醫師は露國人の治療に適せざることあり、是れ同醫師の自認する所にして、時としては全く藥を與ふるを辭することあり、此の如き場合には手を束ねて病者の呻吟して絶息するを傍觀するの外なし。就中憐れなるは婦人及び小兒なり、婦人科、小兒科、産科等は喇嘛の全く知らざる所なり。千八百八十四年領事代理プロターセフ、看護長を庫倫に任命し、必要の藥局を設けられんことを請願したるも、此問題今に至るまで未だ解決せず。庫倫に醫師を設くることは目下の急務なり。

庫倫の附近中、同市に關係を有する地方としては、此外、フンツイ深谷に就て一言せざるべからず。此深谷は蒙古人の死者の屍を投ずる所たり。蒙古人は墓

地を有せず、死者を埋葬すること甚だ稀にして、通例死者あれば其の屍を襁褓に包み、市外に運び、道路を距て、直接地上に放棄す。然れども此屍は永く此に曝されて汚臭を放つが如きことなく、人目に觸るゝとすら稀にして、送葬人去るや、**フンツイ**の峡谷の各所の穴より群犬出て、屍の包を裂き破りて悉く肉を食ひ、僅に白骨を遺すのみ。庫倫の露國領事館の二階の窓より、屢此葬式の光景を眺望するを得るも、同所附近には人肉を食ふに慣れたる群犬居るを以て、通行すること危険なり。此群犬が生きたる人間を襲ふて、屍に對するが如くしたる場合あり。**フーレン**(寺領)に居る露國人が蒙古人の墓地と群犬のとを隔るに當りては、千八百七十一年露國民たる**フリヤト**婦人が同犬に噛み食はれたることを言はざる者なし。同婦人は馬に乗りて通行せしに、群犬出て、之を馬より曳き卸し、噛み食したり。當時何人も之を目撃したる者なかりしが、馬の領事館に駆け込みたると、衣服の片の散亂しありたるに依りて之を知りたり。

第三章 庫倫より烏里雅蘇台に至る

七月二十四日 金曜日

本日余は庫倫を去り、西部蒙古を漫遊し、其の境界の盡くる處、**科布多**に至らんとす。余は此行の爲め、駱駝二頭と荷車を牽かしむる馬四頭を雇ひ、妻及び領事館員と訣別し、午後二時三十五分出發したり。此行の一般の方針は、今南西に向ふべかりしを以て、直接**フーレン**(寺領)を横ぎり、庫倫**アムバン**(長官)の官衙の側を通過し、庫倫市場の一部を経て、**哲布尊丹巴呼圖克圖**の凱旋門の所にて庫倫を離れたり。我等は此門の所にて、淺水の塞爾必川を渡りしが、道路の北に**ガンタン**の建物連なり、南の方、**圖拉河**畔には、**格根**の白堊の宮殿の聳ゆるを見たり。當地方は到る處砂土にして、處々に石を混じり、車輪の動搖甚しきを以て、車上の旅行は非常に不快なり。我等は右方に千八百七十年に建築せられて、今は半ば破壊し、兵士の居らざる庫倫の要塞を見つゝ、殆ど**ボグドウラ**(汗山)の麓を流るゝ**圖拉河**岸に益接近したり。**圖拉河**は渡渉の場所に至りて、三支流に分れ、其中、前の二流は深さ九乃至十**ウエルシヨク**に過ぎざるを以て、渡渉すると割合に容易なるも、重なる

圖拉河の
河の溪谷

河床は幅四十、サージエンありて渡渉に困難なり、就中左岸に接する急流の所に於て然りとす。支那人の此河に荷車と共に溺死する者毎年三四人ありと云ふ。我等は圖拉河の左岸に渡りて眺望すれば茫々たる溪谷目前に展開して西に向て漸々高まるを見たり。同溪谷には小草繁茂せしも、我等の目には蒼々蒼々たる草場と見え、庫倫の到る處灰色を呈する溪谷に比して大に心を樂ましむるものあり。此所猶ホグドウラ(汗山)に接し、其の深谷は上部に密林鬱蒼として景色佳なり。我等は四時二十分其の深谷の一ヒリユツアマと稱する所に至りしが、此所春には廣き川の水源となることなるも、今は唯乾燥したる深き河床たる觀を呈するのみ。河床に水にて運び來されたる巨石少なからざるを以て見れば、水の氾濫する時には水流の非常に急激なるを知るに足る。我等は四時五分に同河床を渡りて西南西に轉ぜしが、ホグドウラ(汗山)のボグドインツンジンガルボと稱する頂より道路は全く西に向ひ、坂を下りて素諾斯呼蘭圖の溪谷に入る。此に庫倫を出て、より第一驛あり、支那政府の公文書にて之を博素噶驛と稱す。或旅行者の紀行に素諾斯呼蘭圖と稱するものあれども、是れ地名を取りたるものにして、民間の稱呼たるに過ぎず、蒙古人の獨り採用する所の名稱の

み。而して素諾斯呼蘭圖と云へる地名は、驛の北部にある山より取りたるものなり。驛は圖拉左岸の同河が松吉納烏拉に壓迫せられて、北に急轉する所を去ること遠からざる所にあり。此の如く素諾斯呼蘭圖溪谷は北はソングナ山に界し、西は圖拉河及び素諾斯呼蘭圖に界し、南と東は汗山若くはボグドウラ山に接す。驛は蒙古人の十二の帳幕より成りて、其中十一は車臣汗のアイマク(部落)に屬し、一は土謝圖汗のアイマクに屬す。此驛に住する者の中、已に三代を経たる者あり、而して他の者は此に住すること僅に數箇月なるを以て、其の郵便遞送の義務に服するや日猶淺し。驛の附近の土地は郵便遞送の義務に服する者に貸與せられたるものなるを以て、ホシユン(旗)の者若くはシヤビナル(從僧等)の此驛の附近、并に概して道路に沿ふて遊牧する者なし。我等は五時五十分博素噶驛を出發せしに、間もなくアユドシインフツリと稱する高からざる嶺に登りたりしが、右方に當りて更に高さ布爾罕圖達巴と稱する嶺の聳ゆるを見たり。十五年前までは此嶺峻險にして、道路斜坡に通じたるを以て、通行非常に困難なりしが、今蒙古人は此に新道を開鑿し、山の西部を迂回して通行する事と爲せり。此迂回の爲め嶺は更に斜になりて、山を越すは全く便なりと雖も、山の南部

に下るに當りては、道路舊の如くなるを以て極めて不便なり、而して此所道路は、山隘に通ずるを以て他に迂回道路を求むること能はず。此隘路を出づるに及んで南の方、ウルツゼイトハンガイと稱する高山にて限らるゝ、廣からざる溪谷、前に横たはりしが、北に當りては溪谷遙に二十五乃至二十露里に迷なりてサリヒンツィウラ山に及べり。首を廻らせば布爾罕岡の南方に構造の美なる邸ありて、其の牆に沿ひ二三軒の木造の建物あるを見ん。是れ博素噶驛の所謂スーリ（倉廩）にして驛の必要の器具、此所に保管せらる。途にて我等は買物の爲め、又は禮拜の爲め、庫倫に赴きて同所より來れる若干の蒙古人を追ひ越したりしが、彼等の中には殆ど全アイリ即ち四戸の家族の八頭の駱駝に跨がりて旅行する者あるを見たり。タフンダスタインフツィリの高からざる嶺は、此溪谷を牧草豊かにして肥沃の牧場たる、圖魯根果勒の溪谷と隔離す。博素噶驛に屬する馬の群、此に放飼せられ、驛務者の親戚たる若干の蒙古人之を看守せり。其の帳幕は清潔にして、竈に代ふるに鐵爐を以てし、鐵製の煙突を付したり。南西に當りてスムヤーなる高山聳え、其の側に殆ど南に向つてフヘキインタバーと稱する所あり、一の高き坂と若干の小丘より成りて、其の間に小溪谷あり。此溪谷には

良草叢生する所多く、牧畜の爲に便なるも、所々紅沙にて蔽はるゝ所あり、此の如き所に生ずる草は、丈け高からずして且稀なり。我等のフヘーク驛に到着せしは七時三十分なりき。此驛は北東よりスムヤー山にて限らるゝ、廣からざる溪谷にあり、北は松吉納山に接し、其の南麓に圖拉河流れ、南にはバヤスフランツィ山あり、西には高からざる丘陵ありたり。此地方に三箇の泉あり、フイツンフラーク、ジャルガル、フラーク、サルムイン、フラークと云ひ、此泉の水は余自ら、フイツンフラークより掬ひて飲みたるに、蒙古人の言ひし如く、味美くして清し。余は驛に到着するに、及んで余を送りたる蒙古人等に銀貨三留を與へたるに、彼等は皆意外の思を爲し、余の足下に伏して深謝したり、余の到着せし時、出で迎へたる驛頭は、傍に在りて之を見つゝ、部下の驛夫に向て、亦此の如き報賞を受くる如く努むべきを忠告したり。余は茶を喫し了り、夕飯を備へんとて驛頭に羊肉の足を與へられんとを請ひしに、驛頭は答へて、肉を調達することに就ては、毫も訓令を受けたることなく、彼等自身は時、夏季に際するを以て、特別の必要な以上、肉を貯へずと云へり。余は蒙古驛頭の我が領事の要求に對する態度、此の如くなるを見て、稍怪みながら、驛頭との談話を依りて、フヘーク驛の住民は、日用品は或は己の

牧畜より取るか、或は庫倫より購入するを知れり。フヘーク 驛は土音にて往々
バヤスフランツィと云ふを聞けり。驛には例に依りて驛務者たる蒙古人十二戸
あり、皆車臣汗の アイマク (部落) に属する者なり。驛の スーリン (倉庫) は北の方
圖拉河の方向にあり、必要の時には、毛氈の廟を立て、禮拜を行ふ。大祭は通例
夏の最後の月又は秋の初めの月に執行し、大祭執行の時には喇嘛の此に集まる
者百人に達す。

七月二十五日 土曜日

五時—五度 十二時—十八度 三時—十六度 六時—十六度 九時—十
四度

我等の荷物は、午前五時此所より、一は駱駝に積み、一は荷馬車に分載して發送
し、我等自身は七時三十分出發して南々西に向ひたり。バヤスフランツィ山に至る
まで、道路には小砂あり、青草藜芥として平坦なり。同山より多倫驛に至るの道
路は相分れて、西部の道は山を越え、マルツァインダバールと稱する高嶺を横ぎる
ものにして、蒙古人は春季及び天候不良の時節に、此道路を通行し、東部の道は多
倫驛に至るまで溪谷を通過するものにして、我等は此道路に依りて通過せり。

此溪谷の廣さ約四露里あり、其の間に若干の泉の水流及び流水の場所あり、以
て此溪谷の中央の沼沕たるを知るべし、故に此に遊牧する蒙古人は、皆山の斜坡
に帳幕を張り、楢又は桶を以て水を運ばざるを得ず、更に進むに従て、我等は水の
充滿したる若干の穴あるを見たりしが、此の如き場所の地質は通例鹽氣あり。
唯多倫山脈の所に至りて溪谷は稍高まり、處々に巨石ありて、大なるタスシユーフ
(黑氈) 此に居れり。我等の多倫驛に達したるは十時十五分なりき。同驛は溪谷
の隅に位し、驛より北西方面にある多倫烏拉の麓にあり、布里都と稱する二泉を
去ること遠からず、通例に反し、此處にて我等を迎へたる人々甚だ少く、驛には
全く人の居らざる如くなりしが、談話に依りて當地の人々皆祭禮に赴きたるを
知れり。マルツァイ 嶺に多倫驛の スーリー (倉庫) あり、多倫驛の廟も此に建立し
ありて、今此廟に於て年祭を執行し、喇嘛七十人集まりて之を行へり。此の如き
事は曠野に住する人々に取りて、一大祭日たるを以て皆同祭に赴き、残れる者は
老幼のみなりしが、此人々も當地の山上に多く産する マンギルス (草の名) を集め
んとて山に赴き帳幕に居らざりき。

我等は十一時十分多倫驛を去りて、東よりは フゲネーヌール山北西方面より

は、マルツアイ山にて限らるゝ、多倫の溪谷に沿ひ、南西に向て進行したり。此溪谷を横ぎれる丘陵は、殆ど一面土撥鼠の穴にて掘り穿たれたれば、此小獸の夥しきを知るに足る。土音之をタルバガンと云ふ。間もなく我が一行に蒙古の獵夫加はりたりしが、同獵夫は今此タルバガンを獵するものなりと云へり。獵獲物中冬には狼をも獵するも、狼の肉は食物とせず、喇嘛の醫藥として使用する臟腑と膽とを取るのみなるを以て、之を獵するは殆ど唯皮を得るが爲めのみ。タルバガンに至りては、其の肉を食物とし、皮をも販賣す。一夏季に二三百の皮を集めて、或は之を買ふに來れる支那人に賣り、或は知己の運送夫に托して恰克圖又は張家口に送るを例とす。恰克圖にてはタルバガンの此價三四兩なるも、張家口に於ては支那人十五乃至二十(ジヨースチエフ)にて買込むと云へり。獵夫の携へたるは火銃なりしが、我等は間もなく其の技術と獵の結果とを見るを得たり。我等はマルツアイン、ゴツソルの高丘に近づくや、獵夫は穴の口に立てる土撥鼠を見付け、竊に身を進めて、五十五歩の距離より之を射たりしが、穴の口に血痕ありて命中したること明かなりしも、土撥鼠は穴の中に隠れて、機械の不足なる爲め、之を引出すこと能はざりければ、獵夫は其の穴に目標を付け、更に我

等と共に進み行くこと拾五分、我等がバルチナイン、フツリに近づきけると、再び土撥鼠を發見して之を射殺したり。此獵は土地の風俗を示すの好材料なるを以て我等は撮影したり。獵夫が我等の目前にて、一も誤射なく土撥鼠四疋を射留めたりしが、我等は彼と別れ、急行してバルチナイン、フツリを越へ、東の方バルチナ山にて限られ、南の方諸昆達巴にて横ぎらるゝ小溪谷に出でたり。バルチナ山は其の高きと、植物の皆無なるを以て、全く其の周圍にある諸山と趣きを異にし、禿たる花崗石は其の頂に矗立して、近づくべからざる絶崖たり。又諸昆達巴は全く之に反して、青草鬱蒼たり。其の南方より小泉流れ出で、土地の低下するに従ひ、漸々廣き河床と爲り、遂に諸昆達巴の麓を距る半露里の所に於て、ノゴナイウスと稱する一流域と爲る。然れどもノゴナイウスの水は泉源に於てのみ飲用に適し、流るゝに従ひ、淺水の爲め温水と爲り、水溜に至りては腐敗して鹽氣を帯び、汚臭を放つを以て、此流域の沿岸に群居する鶴の爲めにのみ用を爲すものと云ふて可なり。道路は湖の左岸を通過するや、初め東に急轉し而して後、南に轉じて博羅陀羅海嶺に至る。濟爾噶朗、郵驛同嶺の南端にあり。驛は北の前方記博羅陀羅海嶺にて、西の方濟爾噶朗、同嶺にて限らるゝ廣漠た

る平原にあり、南の方、我が目指す所の道路の方面は茫々として際限なく、遙に地平線上に高原あるを認めたり。驛の側には其のスーリン(倉庫)も二軒ありて、一は驛廟とし、他の一には驛の帳幕を藏したり、前者を廟と稱すること或は不適當ならん、此廟には佛像と祭式の道具ありて、驛に住する喇嘛は日々像前に供養の爲め看經をも爲す。然れども大祭及び年祭日に喇嘛の多く集まりたる時には、此廟の戸の前に毛氈を以て廟を作れり、帳幕の大なるオルホ即ち烟窓を設けたる四本の赤塗の柱は、常に廟の紀念として存せり。

我等は二時二十分此驛を去り南々西に向ひ溪谷に沿ふて進みしが、行くこと十分ならずして阿達金布拉克と稱する泉あるを見たりしも、驛に住する人々は其の水を飲料とせずして、唯家畜に飲ましむるのみなりき、泉の邊には小丘多くテレスン(剛草)の叢生するを見しも、其の先は地質紅砂となりて小石を散見したり。驛を去る四露里の所蒙古人のシレーと稱する卓狀の丘陵の麓に於て、余の目を惹きたるは四箇の巨石なりき、其中三箇は已に仆れ、一箇は猶立ちありて、恰も墓碑の如し。石は人手にて研かれたると疑ひなきも、何等の題字もあらざりき。我等は温都爾多博驛に至る前、一露里の所に於て小丘多き鹽澤に出で、小丘に

登れり、其の名稱に依りて察するに、此丘は蒙古人に高き胸(ウンツル)は高き、ドホは胸の意なりと見ゆるものゝ如し。此丘の斜坡に郵驛あり、我等の此驛に達せしは四時三十五分なりき。

此にて我等は一日又は二日分の食糧を備へんが爲め、羊を買ひ入るゝ事となりしが、買入は速かに行はれ、一歳の羊を四包の茶貳割四拾五に買入れたり、但し當地の習に依り皮、頭、臟腑、足を與へず、主人自ら肉を調理したり、主人に羊肉あり我等にも肉ありたる爲め、驛中殆ど祭日の如き觀を呈し、余は驛頭を招き、夜十一時まで之と談話せしが、饒舌なる老人は既往を追懐して、回々教徒等が喀爾喀に最後の襲撃を爲したる時勇戦したるの狀を語れり。余が此談話を聞き、寢に就きたるは夜の二時四十分なりき。

七月二十六日 日曜日

五時—十二度 十二時—二十度 二時—二十四度 十時—十四度

温都爾多博驛は温都爾多博と稱する小丘の斜坡にあり、水は同名の井より汲み取るものにして、西の方ウコムールと稱せらるゝ高からざる丘陵にて限られ、他の三方面は全く開豁たり。驛務者は車臣汗のアイマク(部落)の十二の帳幕よ

り成りて親戚と共に總計四十五戸あり。我等は八時四十分温都爾多博驛を出發し南に向て進行せしが茫々漠々たる曠野にして、界標とすべきものなく、蒙古人亦自ら區劃するに苦み鄂博石塊を立て、目標とせり。九時十五分、我等は博羅和碩と稱する小丘に達せしが、同所より溪谷は、一般に東に向て傾斜し、遙に温都爾多博驛の驛務者の住する帳幕見えたり。博羅和碩丘の先きは殆ど一面砂磧を敷き詰めたる如く、所々に凹地ありて、雨水を湛へたり。九時四十五分、ジエヌノホと稱する新たな小丘見えたりしが、其の左方に棟科爾滿珠習里呼圖克圖のシャビナル（從僧等の帳幕十二あるを見たり。我等は此小丘を越へて直に奔巴圖と稱する他の小丘に登りしが、蒙古人は此所を驛路の中間と稱するも前途の部分甚だ短し。此間、道路の景色の一樣單純なるは驚くべし。十時十五分、西の方に當りて明に察罕德勒と稱する高からざる山見え、山上の硫黄塊日光に曝されて白く、恰も墓碑の如し。十時四十五分、搭拉布拉克驛に達せり。此驛驛務者の帳幕十二あり、之に住する親戚五十戸あり。驛の側に二廟と、祭事品を藏する倉庫一、食糧及び帳幕并に種々の器具を藏する倉庫三あり。驛は平坦なる曠原の間にあり、唯、東方に當りて烏尼格特と稱する丘崗連なれり。

我等は十一時二十五分、搭拉布拉克驛を出發し、溪谷に沿ひ南に向て進み、此溪谷に界するウハフツリと稱する小丘に至れり。此間、次驛に至るまで地質は一面砂磧にて蔽はれ、草の生へること極めて稀なり、唯新奇なるは、丘上の頂到る處漸く石多くして、其の露出したる石層に恐るべき烟色を呈することなり。十二時五十分、我等は深谷に達したるに、其の中に大なる水溜ありき、是れ所謂ヒライヌール即ちヒライ湖なり、但し此所に實際湖あるに非ず、其の水は地中より湧出するに非ず、雨水の湛へたるのみ。溪谷の地質鹽分を帯ぶるより、此水辛くして鹽氣あるを以て、家畜の飲用に適するも、人間の飲用には全く適せず。我等は同所より石多きヒライヌールインウルゾートロゴイに登り、此れより沙深き溪谷に下りしが、此處には植物極めて少く、唯四方に迅速に駆け廻はる蜥蜴目を樂ましむるのみ。我等は更に一驛を越へて那藍驛の溪谷に到着したり。此溪谷は甚だ廣漠として南に連なれり。此にはナランフラークと稱する井あり、清水にして冬期にも結氷せず。驛務者は皆車臣汗のアイマク（部落）に屬する者なり。驛の倉庫は此より北東にあり、今より三年前、哲布尊丹巴呼圖克圖より賜はりたる、シャビナル（從僧等數戸、此の那藍驛に住す。

我等は三時四十分驛より那藍の溪谷を横ぎらんとて、直に南に向て出發したり。驛の帳幕附近は、本日強雨降りたる爲め、泥濘甚しかりしが、南に赴くに從て土地高くなりて、乾燥し、漸く復た一變して砂礫に蔽はるゝ地面と爲れり。サムインデフセンと稱する丘に登るに及んで、那藍驛を見失ひ、互に丘陵にて隔たる、溪谷を通過するに至りたり。丘陵中の最も近くして、且最も高きものをアルウスナイフツリーと稱し、其の南方道路の側に小井あり、トー公のホシエン(旗)の人々、毎年春秋此に遊牧す。此所より道路は復た丘陵の上に登り、次でフルキインホールと稱する谷に降り、之に次で窪地あり。フハイインホンホールと稱す、其の次にシバガンツアインホンホールあり。此地方の道路は細砂なるを以て騎行には頗る便なり。此より西に當り地平線上にイーヘアツアク山及びバガーアダツアク山見えたり。我等はシバガンツアインホンホールを過ぎて五時五十分郵便道路が帳家口より北西に趣くの道路にて横ぎらるゝ所に至りたり。同道路はバガーガツアインチュール山の北方を通過す。此二道路の合する所より次ぎの莫敦驛の人々の遊牧地の北端たるヒラインツゲリクと稱する地方と爲る。此所の窪地に井あり。次にアルーホホチュールと稱する小丘あり。六時二十

五分我等は岩石の累々たるチュールナイヒール嶺に達せしが、其の頂に露世したる巨大の花崗石塊は、遠く之を望めば恰も齒形を爲せる城壁の如し。此よりツルベリジンウハの卓状の高驛を超へて六時四十分莫敦驛に到着したり。此驛は廣からざる溪谷にあり、四方山にて圍まれ、東には莫敦山あり、南には烏蘭德勒の低き山脈あり、南西にはハダンホシユーの高丘あり、更に其の南西に當りてハダンホシユインウスと稱する鹽辛き池あり。驛務者は車臣汗のアイマク(落部)の十二帳幕に住する人々なり、驛を去る遠からざる所に二廟あり、其の一の保護者は庫倫に住する堪布巴克席にして、他はジアサライ呼彌勒罕寺なり。昨年此呼彌勒罕寺に於て、重なる堂、火災に罹りしが、今年之を再建したり。木材は庫倫より運び來り、支那人の工匠の手にて建築し、哲布尊丹巴呼圖克圖は之が竣工祝として九貫目ある阿玉璽の銅像を寄附したり。

七月二十七日 月曜日

五時—十二度 十二時—二十四度 三時—二十三度

午前七時四十分出發したり。驛を去ること百サージェンならずして烏蘭德勒の高丘に登り始めたりしが、岩石多く、其の高き箇々の石は、恰も廣き墓地に於け

る石碑の如し。此所の道路并に烏蘭德勒丘を降りたる後にも概して石益々多く、溪谷代る毎に植物益々稀少と爲れり。烏蘭德勒の窪地よりヘレムインホシユ一丘に登るに及んで、我等は其の頂より東に當りてヘレムヌールと稱する二湖あるを見たり。同湖の南西に當り、道路を横ぎりてデレスン(剛草)の發生せる廣大なる窪地あり、我等は此窪地よりウハヘレムと稱する高からざる丘に登りしが、其の次に溪谷あり、行程一時間に亘りて平坦にして細砂に蔽はれ、車行の爲めには好道路なるも、草木なきと景色の一樣なるとは、旅客をして倦服に堪へざらしむ。唯其の南西の端にスツジフツク井あり、其の側に莫敦驛の驛務者の親戚の住する二箇の帳幕あるを以て、此處稍賑へるのみ。兩驛中間の距離と見做さる、デレギンフツリの登口は此の井より始まり、デレギンエンギリの溪谷之に次ぎ、更にシャルガルインスツジの溪谷に入る。此所に套里木驛の驛務者の帳幕あり、地勢は漸々遠く西に蜿蜒として、エムツウ井に至る。此井大なる爲め、人稱してエムツウ湖と爲す。我等はシャルガルインスツジより、高からざる石多き山脈を越えて、九時五十分套里木驛に達したり。套里木驛は高からざる丘陵にて圍繞せられたる峡谷にあり、其の丘陵中土地の蒙古人は驛

の東方に並立して、合約爾鄂博と稱する二箇の丘を尊崇すること殊に深し。此處の十二の帳幕に住する驛務者は、昔車臣汗のアイマク(部落)に屬するものなり、驛を去る遠からざる所に喇嘛の呼喇勒罕の廟あり、同廟は套里木及び博羅達噶二驛の廟と見做さる。

我等は十時三十分驛の帳幕より出發して套里木と稱する窪地に下れり、驛は蓋し此地名を冠したるなり。此窪地に驛の使用する井あり、之れより稍東に當りて大なる釜形の窪地あり、窪地に溜る水は雨水に過ぎざるも、土人之を套里木湖と稱す。此湖に相接して廣大なる平原あり、湖畔には小丘あるも、次で砂礫にて蔽はれたる平坦の曠野となる。此溪谷は北西より南西に蜿蜒たるシャクートイリムイン、ホイツヌールの連峯に横ぎられ、同所より先きは、此溪谷シヤラトリムイン、ホンホールと稱せらる。此に大なる井あり、南西に傾きたる此溪谷は、遠く南に連なりてハタンサラ山に接するもの、如くに見ゆ。此所の溪谷は一般の稱を有せず、各地其の稱を異にす。我等は此溪谷を通過して、ホロクチンゴルと稱する窪地に下れり、是れ湖の稱なるも、雨水を湛へたるのみにして、雨水の多少に依り其の大いさを異にし、時として全く乾燥することあり。

我等の通過したる時には其の幅一露里に過ぎざりしも、河床凹凸甚しく、車行困難なりしを以て、西端を横ぎるに二十分を費したり。此の如くにして我等は博羅達驛に到着したり。同驛は廣くして長き溪谷にあり、西より東に連なりて小丘之を圍み、溪谷の北東方面に屹立せる高からざるボロクチン山其の最たるものなり。驛には二箇の井ありたるも、我等の至りたる時には井より水を汲まずして、雨水の水溜より取りたり。此事は驛頭が余に茶を饗しつゝ、其の味の他に異なるを示さんとて、此水は僅に三日以前に降りたる雨の水溜より汲み取りたるを以て、最も善きものなりと云ひたるによりて余は之を知れり。驛務者は皆車臣汗のアイマク(部落)に屬する者たり。

余は驛丞と談話するの間に套里木驛の北にある額木圖諾爾井より才壁土謝公の部落の南境に至るまでの間は、喀爾喀の官衙の需要に充る爲め牧する家畜の官有牧場にして、今博羅達驛を去る二露里よる遠からざる所に該牧場の管理所あることを知れり。余は此管理所のこと就き詳細の調査を爲さんとして、馬を借り受け、章京(驛丞)と共に騎して管理所に赴きしに、十分を出てずして牧場管理所に到着せしが、管理所は三箇の帳幕より成り、中にはツサラクチー(所長)

官有牧場ノ視察

住し、乙には其の書記官住し、丙を以て役所とし、役所の書類は此に保管し、番人亦此に住せり。此番人は小使の役目をも務むる者なり、所長は駱駝の群の分管所を視察せんが爲め、エムツイーヌールに赴きたりとして在らず、書記官は役所にありて執務し居たるを以て之と談話したり。其の談話に依りて我等の先づ知りたるは、牧草の不足なる爲め、家畜の多くの群は才壁土謝公の遊牧地に逐ひ送りたるを以て、目下此地にある官有家畜甚だ少く、保管所も亦遠からず同地方に移す事とならんとするなりき。管理所には常置の定員なく、之を組織する役員は三箇月毎に更迭するものとす。其の組織は札薩克若しくはツサラクチー(所長)一名、附屬書記官(筆帖式)一名、各群を牧する章京(牧長)三名及び牧者の職を負擔する所員五十名とす。現任ツサラクチー(所長)は夏期の務を行ふが爲め、此に來りたる者なるも、公衙の依頼と本人の承諾を表したるとに依りて、更に秋の三箇月間留任したる者なり。此常に更迭する役員の外に、サヒラフチーと稱する特別の官職あり、アイマク(部落)より任命する所にして更迭せざる常職なり。此官吏は畜類の状態を些細の點に至るまで知悉して、専ら其の群を監視するを任とし、更迭する官吏は、多くは唯形式的に事務を執り、通例の官文書の往復を司るに過ぎず、目

下此所の牧場にあるものは土謝圖汗の部落より割勢馬六百七十四頭、牝馬五十二頭、駱駝百八十七頭、牛五十一頭、羊千百一十一頭、車臣汗のアイマク(部落)より割勢馬五百五十八頭、牝馬四十三頭、駱駝五十六頭、牛四十六頭、羊六百八頭、大小家畜合計三千五百頭なり。此等の群は決して一箇所に遊牧することなく、牧草の乏しき爲め二三百頭づゝ箇々に分ちて遊牧し、一組五百頭より多きことなし。家畜の群を管理する法規に就きて、余は書記官より聞く所ありしも、此事は本書第三卷の蒙古に於ける官有牧畜のことを述ぶる段に詳説する事とし、此には唯喀爾喀の治理法の特殊なる性質を知るに足るの事件を擧示するに止めん。現在管理所長と書記官は第二次の交迭勤務を始むるに當り、財政上の始末を付け、今や役所の官房具を購入するに必要な金額支出の問題に苦心し居たり。書記官曰く、我等は所長と共に始めて此職に任ぜられ、此に来るや、當地の法規を知らず、凡そ官房に要する筆墨紙、米肉等は皆アイマク(部落)のジサン(會計)より交付せらるゝこと普通の規則なるは人の皆知る所なり、我等は本年三月の末、此に来るに及び我等より先きに此職を奉じたる所長達什璉沁に就き、何處より如何にして此等の物を受くるやを問ひしに、此地方にては官房に要する筆墨紙及び米肉

蒙官署維持ノ例

等は定數外の家畜を販賣して得たる所の金額にて購入するの規則にして、其の家畜は常置官サヒラフチー根悖(根悖)の手に在り、此の根悖より羊又は金を受けて、凡そ必要のものを購入するを得べきが如く云へり、當時サヒラフチー根悖は遠く戈壁土謝公の部落に遊牧し居りて、同人の許に赴く能はざりしを以て、我等は前任者の言に信を措き、アイマク(部落)の出入商人たる支那人ダライナスツより紙二百枚、此價銀一兩、墨二本、此價四錢、筆十五本、此價五錢、合計壹兩九錢を借り受けたるに、此等の筆墨紙己に書き盡して次回の交迭期の爲め費用を要するを以て、サヒラフチー根悖に此事を通知したるに、氏は春季交迭期の終る時には、實際定數外の羊四頭を引渡されたるに、家畜の夏季検査の爲めアイマクより派遣せられたるツサラクチー(所長)達什璉沁が、其の部下の官吏と共に來りたる時、此等の羊を徵發し、食糧として食せりと云ひ、夏季點檢の際には更に繁殖したるものなく、今猶羊若くは其の他の家畜の定數外のもの一頭もなしとの事なりと。是に於てか、今如何にして支那商人に前借を支拂ふべきや、再び如何なる金を以て筆墨紙、米肉を購求すべきやの問題起り、書記官は此事に關しアイマクのジサン(會計)官に交渉し、其の指揮を仰がんとて公文書を作りしも、同會計官の此金を交付せ

ざるべきを想像し、屢罵りて嗚呼我が會計は貧なる哉と云へり。我等は博羅達噶驛に休憩し、三時三十分同驛を出發したり。我等の道路は直に南に向ひたりしが、我等は平坦なる砂道を往くこと半時間にして高からざる塞爾騰山脈に達したり。此山脈、ボロクチン溪谷を博羅達噶溪谷と分つものにして、我等は塞爾騰の鞍形脊に沿ふて博羅達噶溪谷に下れり。同溪谷の北方を横ぎるムングテータバナイウスー川の窪地あり、此川は春季に限り東方の山より流るゝのみ。我等は此川より博羅達噶丘の麓に達しが、博羅達噶の西に當り全く麓と相接して他の更に廣くして高きサラと稱する丘あり、我等が已に套里木平原より眺望したる所のものなり。博羅達噶溪谷は我等急行五十分にて通過したるを以て見れば、約十露里あるべし。同溪谷は南西の方、セルテンゲンウハの小丘にて限られ、之を越ゆれば再び釜形の窪地となりて、高からざる小山脈あり、此山脈に五箇の高峯あるを以て、土人塔本陀羅海と稱す。此所を兩驛道路間の中央地點と爲す。此後半の道路も亦到る處窪地小丘ありて、前半の道路と異なるは石塊多き一點のみ。此地方に於て車行の爲め、稍平坦なるはアルラド溪谷のみにして、我等の此に達したるは恰も五時なりき。此に湧泉ありて巴彦

和碩驛の驛務者遊牧し、此溪谷を越ゆれば、道路はハダンゲンツオホー丘に上り、其の頂には一面に立石あり、巴彦和碩驛に達するまでの道路も亦、概ね此の如くにして、我等は五時二十五分同驛に到達したり。

此驛は峻峻なるも高からざるサラ丘の麓にあり、此丘は南西より巴彦和碩の溪谷と界するものにして、同溪谷は遠く南東に連なりて、唯地平線上に之と界せる布音圖と稱する山脈見ゆるのみ。此山はウイツサントー公の遊牧地の附近にありて、土人は守護神として之を尊崇す、其の北にはウイツサン公のホシユン(旗の大廟あり。此驛に住する人々は、泉より水を汲む。驛務者は車臣汗のアイマク(部落)の十帳幕と土謝圖汗の二帳幕なり。烏里雅蘇台に赴く者は此驛より直に張家口烏里雅蘇台道路の錫刺什布泰驛に至りて、五箇の通過旅程と驛とを省略するを得べし。之が爲めには、察罕呼都克及びソドホーの二箇所に於て二たび馬を易ゆるを例とすることなるが、是より數日前烏里雅蘇台に赴きたる車臣汗は、唯一たび易へたるのみなりしに、旅程甚だ長かりしを以て、困難少なからざりしと云へり。

我等は六時十分巴彦和碩驛を出發し、捷路を執るに由なく、又其の望もなきよ

り賽爾烏蘇に至るの道路に依りて畢爾噶庫驛に向ひ進行したり。我等の道路は南西に向ひたるが故、我等は直にサラ丘に登り、其の頂より、我等の目前に廣漠たる曠野となりて、遙に地平線上に没し、畢爾噶庫山其の峻崖なる傍山と共に其間に巍然として偉人の如く聳えたり。此間、目を止むべきもの一も有ざるが如くなりしも、曠野を下りて之れを横ぎるに當り、目標とす可き若干の地方を發見するを得たり。先づ六時三十五分、我等の認めたるは岡古里克烏蘇にして此に井あり、驛に附屬の家畜を牧せり。此れより曠野は他の物にて區別せらる。例へば其の北西隅の如きハンガー、ウラ山の聳ゆるあり、此山に平行する曠野は同じくハンガーと稱せらる。七時十分、我等は石多きサラ丘に達し、此丘陵の間深く砂礫にて蔽はれたる狭路を通過し、八時畢爾噶庫山に達せしが、同山の種々の石や、雲母は西山に没せんとする日光を受けて燦々たりき。山の背後に廣大なる鹽澤あり、同所より我等は丘陵の連なれる間に入りしが、其間の狭路に畢爾噶庫驛あるを見たり。當時烈風砂塵を捲き揚げ、非常に惱まされたるを以て、此驛は我等に取りて眞に避難所なりき。且余は驛に入るに及び、饒舌博識なる驛頭と面會し、蒙古に於ける郵便事務の機密を聞くを得て、二重の幸を得たる思を爲

せり。余は驛頭と相語りて、夜半十一時半に至れり。

七月二十八日 火曜日

五時—十四度 十二時—三十一度 六時—十九度 七時半—十三度

九時—十二度

畢爾噶庫驛はムシカー村に在り、村名は同地の井の名稱を冠したるものなり。元來畢爾噶庫の附近に此驛を設くべき豫定なりしも、同地は一には水の悪しきと、二には畢爾噶庫山附近一帯は濕地にして、雨期には濕潤甚しく、健康を害するの恐あるに依り、驛務者は同所に住するを不便と認めたるなり。今より二十年前、彼等は已に此事を庫倫アムバン(長官)に具さに奏上したるを以て、同官はムシカーに驛を構ふことを許したり。驛務に従事するは車臣汗アイマク(部落)の十二帳幕なり。彼等は常設の廟を有せざるも、一年に一回祭事を修するが爲め、喇嘛僧此に集會す。我等の到着五日、前畢爾噶庫山の鄂博の例祭ありしが、驛務者各其の費を分擔したり。此祭に驛務者及びホシユン(旗)より集まりたる者約二百名に達し、祭事終りて後、角力及び競馬の餘興あり。優勝力士と馬とは茶六箇の懸賞を受けたり。

我等は七時四十分畢爾噶庫驛を出發し、ムシカール丘陵の間より出て、西の方モグー山にて限らるゝ溪谷に下れり。此れより相並んで立てる和勒博察罕の二丘の鞍形脊を越え、又直に洪俄爾察罕の小丘に上りて、砂土の溪谷に下りたり。此溪谷は南の方喀喇鄂博にて限られ、同所より石多き峡谷と爲り、兩側に高からざる山ありて、道路其の斜坂に通じ、其の歩道は或は山腹に登りて高まり、或は之れより降りて低くなれり。此の如き坂此に七あり、故に此地方はドロンドバと稱せらる、即ち七嶺の義なり。此の最後の嶺を下りて、我等は其の麓に蘇魯海驛を見たり、同じく車臣汗内の人々の維持する所なり。

余等は未だ蘇魯海驛より展開する景色の如く索莫として寂々々たる所を見ず。四方見渡す限り茫々たる灰色の平原にして、其の地質は皆砂土、植物は殆ど絶無にして稀に石の下より小草の動くを見るのみ。我等は今此平原を通過する事となり、十時十分を以て蘇魯海を出發したり。此曠野は錫伯格戈壁と稱せらる。其間に道路より東の方に、圖古里克烏蘇の井あり、驛に住する蒙古人時として此に遊牧すと云ふ。十一時三十分に至り黄色を帯べる丘陵遙に南方に見え、地平線は蕩々たる哈畢喇喇山脈にて蔽はれたり。此黄色の丘と見へしは

砂丘にして北東より南西に亘りて曠野を横ざれり。殆んど之と相並んで、北西より南東に連れる他の丘起伏するを以て、道路は狹隘となり、沙巴克台峯の所に於て、砂丘を巡りて次ぎの丘陵の間を通過すること一露里にして札們和鄂博山にて横ざらる。此山の頂より我等の目に觸るゝ所のものは、又是れ南東に傾けるツフーム戈壁に對する索莫たる觀なりき。戈壁の周圍は山上より凡そ百露里を瞰望し得べく、其間に一戸の住所もなし。十二時二十五分、我等は此沙漠を横断して山丘に近づきしが、其中、道路より西に當りて巴彥烏拉と稱する山、獨り巍然として聳えたり。此山搜吉驛の驛務者の尊崇する所なり。搜吉驛は此山の南の方四露里を距たざる所にあり、我等の同所に遷したるは十二時四十分なりき。搜吉驛は庫倫アムバン(長官の管内にある布哈諸驛中の最後の驛なり。此後賽爾烏蘇驛より始め庫倫張家口の道路は張家口、烏里雅蘇台の道路と合し、烏里雅蘇台に於て道路は兩市共通のものとなす。搜吉驛より賽爾烏蘇の側を通り、直接に張家口、烏里雅蘇台道路の莫敦驛に向ふの方向を取る時に、更に近く烏里雅蘇台に至るを得。驛頭が余の旅行のザール(通牒)には、實に此の如き道筋を取るべきことを明示せられ、且該知照が領事館の要求に依りて致され

たると余に通知したるには余一驚を喫したり。然れども余若し賽爾烏蘇に至らざる時は、余は蒙古に於ける郵便局の中央本局の實況を視察するの便を失ふものにして、余の決して黙過すべからざるものなるに依り、余は自ら責任を帯び賽爾烏蘇のサルグチエー(事務官)に己の來れることを通牒せしめ而して後、余を賽爾烏蘇に送るべきことを命じたり。賽爾烏蘇にては余を接見せざるやも知るべからず、又我が爲めに他の道路を指示せられたるを口實として、前進の爲め馬を給せざるやも知るべからざるも、余が蒙古の事情に通曉し、郵驛通過の如き些事に對して、支那人の常に親切を表することを思ひ、且法律に依るに、旅行する官吏は必ず賽爾烏蘇に至る路順に依るべく、蒙古人の恣に慥出したる如き迂路を取るべき事とせざるを、余は自ら道理ありと信ぜしを以て、漸く之を斷行するに決し、豫め賽爾烏蘇に余の到來のことを通牒せしめて、二時四十五分同地に向て出發したり。我等は南々西に向て進み、頂に黒色を帯びたる細圓石の累々たるハラ―チユル山脈を越えて、溪谷に下りしが、此溪谷の南西にも亦他の石塊磊々たるサムインツアヒールと稱する山脈あり、唯此山の石は白色を帯びたり。此山脈より賽爾烏蘇に至るまで、外觀全く一様にして、唯地方に依り名稱を異にする

る粗砂の茫々たる平原なり。前記のサムインツアヒールに接して、デン村あり、デレス村之に次ぎ、ハラガナー又之に次ぎ、遂に郵驛のある賽爾烏蘇あり。余の希望空しからず、此旅行中未だ曾て見ざるほど美麗なる帳幕我が爲に設けられ、其の四壁には布を張り、前方に炕を設け、幕内に二卓あり、凡そ蒙古人の設備すべき便宜悉く備はれり。余が帳幕内に入りて旅装を解くや、サルグチエー(事務官)即ち司員(の)衙門より通譯官來り、サルグチエーの名代として今日更に前進するや將た宿泊するの意なるやを問ひければ、余は宿泊する旨を答へしに、通譯は自己の意見として余に彼等のアムバン(長官)(此にてはサルグチエーのことを呼ぶに此稱を以てす)を訪ふ意あるや否を問ひしを以て、余は禮儀上訪問するの義務ある旨を答へ、通譯に茶を侷め、雜談少時にして相分れたり。此れより十五分を過ぎざるに、サルグチエーの書記(筆帖式)再び來りて普通挨拶の詞を述べたる後、何時サルグチエーを訪問するやを問ひしを以て、余は旅中の疲勞甚しきを以て少しく休息すべき旨を答へたり。余は書記との談話に依り、サルグチエーが四品の位を有するに過ぎざるを知りたれば、遠慮なく之と應接するを得べし。書記の去ると共に、烈風颯然として起り、五分を過ぐるや、西北西の地平線に黒雲

陰々として電閃き雷轟き、遂に大雨の襲來するを認めたり。余は温度の變化を知らんと欲し、出でて寒暖計を見たるに、十九度を示したり。沙漠一面旋風にて捲き上げられたる砂塵の柱にて蔽はれ、東に向て吹き上りしが、間もなく我等の驛も暴風の襲ふ所となり、風隙間に颯々として吹き入り、辛うじて帳幕を支ふるを得たり。過ぐることに半時間にして、驟雨沛然として來り、降ること二十分に於て天空碧如たりき。七時三十分寒暖計は十三度を示したれば、即ち一時間に温度の降りたるに六度なり。此雨歇むや當地の署長ダゲスクイ(官名)來りて余に問ふに、サルグチエー(事務官)を訪問するの時刻を以てせしに依り、余は疲勞したると降雨のありたる故に由り、本日は訪問せずと答へ、サルグチエーに余の名刺を渡さんことを請へり。十五分を過ぐるや書記、ダゲスクイ、サンギンの三名、サルグチエーの名刺を携へ來り、サルグチエーの名代として第一に彼の挨拶を述べ、次に余の疲勞したるを慰む旨を述べ、遂にサルグチエーが余の前途の旅行の安全ならんことを慮り、管内に余の旅行に便宜を與ふべき特別の知照を發したりとのことを述べたり。此に注意し置くべきは、支那政府の郵務局の命令に依り、郵驛に依り旅行する者に就ては、獨り旅行者の出發地よりのみならず新管

轄區の始まる驛より知照を發せらるゝこと是なり。余は今賽爾烏蘇驛に到着して、賽爾烏蘇郵務局の管轄内に入りたれば、定規に依りて知照の發せらるべきは當然の事なるも、サルグチエー(事務官)が特に余に對する厚意を表せんと欲したること疑ひなきを以て、余は敢て意中を漏さず、唯其の厚意を謝するに止めたり。余は五日間の旅行にて疲勞したること實際甚しかりしを以て、來客の去るや漸く日記を認めたりて、熟睡殆ど死する者の如くなりき。

七月二十九日 水曜日

五時—十二度 十二時—二十六度 三時—三十一度 九時—四度

余は覺め起き約六時、茶を喫せんとするや、サルツリーホシユン(旗)のメーレニ(官名)なる舊知のマクサルなる人余を訪問せり。千八百七十六年余の曾遊せし時には氏は烏里雅蘇台の蒙古アムバン(長官)衙門に書記の職を奉じ、余の爲め若干の謄本を抄寫せしが、今は衙門の職を辭し、己のホシユンに歸りてメーレニの職を奉じ、三品官更たることを表示する藍色透亮頂兒を戴き、三驛に於けるハフスルガー(驛夫)の事務を監督せんが爲め、三箇年の期限にて賽爾烏蘇に特派せられ、

二年間已に同職を勤了し、今は最後の三年目勤務中なりと云へり。我等は一見舊知の如く既往を語り現狀を談じて時の移るを知らず、我の了解に苦む所のものに就ては、彼れ明確の説明を與へ、我は半ばを聞き、已に記録するを得るに至れり。余は偶時辰を檢し、已に十一時なるに猶ほサルグチエー(事務官)を訪はざるに一巻を喫し、勿々朝餐を了りて、マクサルと辭し、人をして、サルグチエーに直に訪問すべきことを通告せしめ、從者 イワン、通譯官及び驛丞を伴ふて赴きたり。余の帳幕より、サルグチエーの家に至る半ばに、書記出て迎へ、慣例に依りて膝を跪き安否を問ひて余に隨行したり。家の入口には、サルグチエー自ら出て、余を迎へ、互に挨拶の辭を交換し、相讓ること少時にして、室に入り炕に坐せり。サルグチエーの宅は生煉瓦を以て造りたる家にして、塔及び門前の籐牌も亦同じく生煉瓦を以て造れり。屋内は寂しく不潔にして、三室に分たれ、中央の庭より直に入る所の室は、サルグチエーの客室及び書齋にして、亦之を以て役所に充て、此所に於て事務を執れり。室の北方に炕あり、壁には支那人の尊崇する孔子及び諸哲の土像を安置したる椽あり、次に卓あり、卓の兩側に座席を設け、炕の隅には支那書籍を堆積したり。室の南壁の窓の側には一卓ありて、種々の家

具を陳列したり。兩側の室に入るの戸口には、藍色の帷を懸けありしが、是れサルグチエー(事務官)の家族の住む所にして、右室を以て夫人の室とし、左室を以て小兒の室と爲せること、彼等が好奇心に驅られ、展帷帳の内より窺き見んとして、自ら其の頭を出したるに由りて之を察するに難からざりき。サルグチエーは四十歳代の人なりしが、余に向て行先き、用向き、出發の時日と歸途等を問ひしを以て、余は余の重なる道筋を述べ、露國商人の事件に就て赴く旨を云へり。されどサルグチエーは余の答辭に對して反問し、且其の知らんと欲する所、庫倫出發の時日に非ずして、聖彼得堡出發の時日なりと云ひたれば、余は已に氏がマクサルより余の人と爲りを聞き知るものと察したり。余の此行甚だ遅々たるに拘はらず、サルグチエーは之を以て頗る迅速なりとし、談漸く鐵道及び歐洲の事情に移れり。サルグチエーは支那語を以て歐洲の事情を記述し、多くの寫眞銅版を挿入したる上海出版の一書を出し、挿畫を翻きつゝ、其の畫の眞なるや否やを問ひ、隨頭自ら斯かる書の有益なることに傾きたり。余は我が旅行家は實景を寫すの寫眞器械を携へて旅行するを以て、此挿畫の圖より眞實なることを保證し、且之を好機として、余も亦露國に歸りて此紀行を記述せんとする旨を告げ、

寫眞器械をも携帶するが故、當地方を撮影するを許可せらるゝを得ば、余の甚だ欣ぶ所なりと述べたり。此許可は苦もなく與へられたるのみならず、ザルクチエー(事務官)は直に我が爲に廟を開き、余の往かんと欲する所に我を導き、寫眞機を運ぶに助力すべき命令を下し、且若し必要ならば馬をも給すべしと云へり。時已に午後二時なりしを以て、余は其の厚意を謝して訣別したるに、ザルクチエーは家の門外に我を送りて此に相別れたり。

余は宿舍に歸るに及んで直に往て撮影するに決せり。我等は給せられたる馬に跨りしに蒙古人は寫眞器械入の箱と、三脚とを負ひ、駱駝に乗りて出發したり。

賽爾烏蘇

賽爾烏蘇は南西兩方面より山にて限らるゝ廣漠たる平原にあり。南には色爾木烏拉塔奇勒克圖、別名ネミヘイ及びシユフツの諸山聳え、西の方は地平線上にシヨングウラ山脈連綿として相連なれり。驛の建物は四區に分れて、溪谷の間に散在す。南の方に清朝の尊崇する關帝を祭るの廟あり、繞らすに塔を以てせり。同廟より北に距ること二百サージエン、沙漠内に賽爾烏蘇の井を掘り

ざるに從ひ鹽澤は益稀になりて、三露里を經、四時四十五分にしてツアヒルツイン戈壁に出でたり。此地の平坦廣漠たることツフーム戈壁に彷彿たりしが、此地方の草更に繁くして曠野悉く青々たり、我等は五時十分此曠野がフダーウラ山にて横ぎらるゝ所に達したりしが、此山嶺を超ゆれば曠野は其の北端にあるドボークウラ山の名を取りて、ドボーク戈壁と稱せらる。我等五時四十五分兩驛の中間に達したりしが、同所より曠野の名稱タルフガーと變ず。此に井あるも水少なし。タルフガインタラーの曠野は石の累々たるタルフガインヒライ斜坂にて限られ、其の東の窪地に湖あり、タルフガインヌールと稱す、湖と云はんよりも雨水の水溜なり、其の附近にケルファンゲウエー井あり。此れより道路は石の累々たるツアフチライツオホ丘陵の間に入り、窪地之に次ぎ、ツアフチライフルークの深き二河床之に接せり。同河床の南にあるものは乾燥したれども、他の河床には水溶々として流れたりしが、此水は地質の鹽氣を帯びて飲む能はざりき。我等は此窪地より上り、夕七時察布齊爾驛に達し、此に宿泊したり。

八月一日 土曜日

五時—七度 十二時—十五度 三時—十四度 九時—六度

寫真器械をも携帶するが故、當地方を撮影するを許可せらるゝを得ば余の甚だ欣ぶ所なりと述べたり。此許可は苦もなく與へられたるのみならず、サルグチエー（事務官は直に我が爲に廟を開き、余の往かんと欲する所に我を導き、寫真機を運ぶに助力すべき命令を下し、且若し必要ならば馬をも給すべしと云へり。時已に午後二時なりしを以て、余は其の厚意を謝して訣別したるに、サルグチエーは家の門外に我を送りて此に相別れたり。

余は宿舍に歸るに及んで直に往て撮影するに決せり。我等は給せられたる馬に跨りしに、蒙古人は寫真器械入の箱と、三脚とを負ひ、駱駝に乗りて出發したり。

賽爾烏蘇

賽爾烏蘇驛は南西兩方面より山にて限らるゝ、廣漠たる平原にあり。南には色爾木烏拉塔奇勒克圖、別名ネミヘイ及びシュフツ一の諸山聳え、西の方は地平線上にシヨングウラ山脈連綿として相連なれり。驛の建物は四區に分れて、溪谷の間に散在す。南の方に清朝の尊崇する關帝を祭るの廟あり、繞らすに壙を以てせり。同廟より北に距ること二百サージエン、沙漠内に賽爾烏蘇の井を掘り

欠

MISSING

さかるに従ひ、鹽澤は益稀になりて、三露里を經、四時四十五分にして、ツアヒルツイン^{ゴビ}戈壁に出でたり、此地の平坦廣漠たること、ツフーム^{ゴビ}戈壁に彷彿たりしが、此地方の草更に繁くして、曠野悉く青々たり、我等は五時十分此曠野が、フターウラ山にて横ぎらるゝ所に達したりしが、此山嶺を超ゆれば曠野は其の北端にあるドボークウラ^{ゴビ}山の名を取りて、ドボーク^{ゴビ}戈壁と稱せらる。我等五時四十五分兩驛の中間に達したとしが、同所より曠野の名稱タルフガーと變ず。此に井あるも水少なし。タルフガイン^{ゴビ}タラーの曠野は石の累々たるタルフガイン^{ゴビ}ヒライ斜坂にて限られ、其の東の窪地に湖あり、タルフガイン^{ゴビ}ヌールと稱す、湖と云はんよりも雨水の水溜なり、其の附近に、グルファン^{ゴビ}ダウエー井あり、此れより道路は石の累々たるツアフチライ^{ゴビ}ツオホ丘陵の間に入り、窪地之に次ぎ、ツアフチライ^{ゴビ}フルークの深き二河床之に接せり。同河床の南にあるものは乾燥したれども、他の河床には水溶々として流れたりしが、此水は地質の鹽氣を帯びて飲む能はざりき。我等は此窪地より上り、夕七時察布齋爾^{ゴビ}驛に達し、此に宿泊したり。

八月一日 土曜日

五時—七度 十二時—十五度 三時—十四度 九時—六度

察布齋爾驛のツアクダはホシユン(旗)の管下の人氏より成りて、墨爾根王二帳幕、オ一王四帳幕、戈壁土謝公二帳幕、バルンソ一公三帳幕なり。ハフスルガーは皆悉く戈壁土謝公の部落に属す。茲に住する人々は烏蘭陀羅海丘の側に在る同名の井より汲む。

朝より北西の凛烈なる寒風吹きたり。我等は午前八時驛を出發して、再び北西に向ひ石の累々たる兩山脈の間を貫けるマンナイツオホの窪地を通過して、南に傾斜せる廣漠たるタルバイ溪谷に入りたり。此溪谷の下部に當り、我等の道路より遙に背後に湖見へたりしが、蒙古人の言ふ所に依るに、淡水にして飲用に適すと。タルバイ溪谷は高からざるタルバインデフセク斜坂にて限界せられ、次に亦溪谷ありて、同じく高らずして磊々たるヒライソングー斜坂あり。我等は此丘を通過する時一支那人に逢遇せり、烏里雅蘇台アムバン(長官衙門の使者にして、賽爾烏蘇のザルクチエーに送るの封書を携へ、三人のウラチン(運送夫之と同伴したりしが、往くこと半露里にして、亦此使者の僕なる支那人に逢遇したるに、二人の支那人亦之に伴ひたり。一封書を送達する通常の支那人たる使者は、蒙古を旅行するに此の如く十頭の馬と五人の嚮導者を作ひて威儀堂々たり

此れより前途は、皆斜坂に横ざらるゝ溪谷にして、即ちバダルガトロゴイの溪谷の斜坂次に、マンガトウハーの溪谷と斜坂あり、才壁土謝公のホシユン(旗)の北に突出したる遊牧地は同丘を去る遠からざる所に於て終り、此所より同部落の地は再び唯驛の牧場の南端に接するのみにして、此に於ては土謝圖汗の部落と界を接す。其の遊牧地に於て道路より北方にホルモツアク及びオロンツアクの二山明かに見へたり。我等の道路は益々窪地と崖の間に入りたり、マンガトウハー以後の分を順序に述べれば、ビンダントロゴイ、オツソントロゴイ及びズルガントロゴイなり。同所より北方に諸山の間に巒然たるツグリギインオホ山あり、道路は此山の峰の麓を迂回しつゝ、シユルンチユルと總稱する地方の三箇所の石多き窪地と丘とを通過す。同所の北端に特古力克驛あり。

特古力克驛は公文語にて達母哈沙圖と稱し、境界地點にして、同所以東は土謝圖汗部落の地、西部は土謝圖汗のアイマク(部落)のジヨノン公ホシユンの地たり。哈沙圖驛に住む者は喀喇沁人六十戸にして、ツアクダに至りては其の定數帳幕中、土謝圖汗のアイマクのウイツサン公のホシユンに属するもの唯一あるのみにして、爾餘のものは悉く車臣汗のアイマクより出てたる者なり、此等の人々は皆遠隔

の地方より來りたる者なるを以て、此に住すること既に三四代に及べり、ハフスルガーに至りては皆附近の部落に屬する者なり。

我等は十一時十分ハ沙圖驛を發して、釜形窪地の鹽澤に沿ひ進行して、ゼルゲネーウハ一丘に至りしが、其の麓并に兩側に深き流沙あり、同丘を越ゆれば南東に連なりたる廣漠たる溪谷あり、我等の道路は北西に向て漸次高まるものゝ如く、遠く地平線と合し、茫々として我が目を遮るものなし。此平原を「フター」と稱す、即ち灌木の意也、實に當地は一面に灌木ハラガン繁茂して、車行の爲め頗る不便なり。十二時十五分に至りて、漸く地平線上に當りて、遙に「ホンドツ一丘」を見たりしが、同丘に達する間に、同曠野中にある「マルツアク」村を經過す、此に同名の非ありて、其の側に數帳幕遊牧し、ハ沙圖驛に屬する駱駝及び馬の群が牧せらるゝもの多し。此「マルツアク」村落より溪谷は「ホンドツ一タラー」の稱を帯び、我等は之を通過して「ホンドツ一丘」に達せり。其の北方に博羅溫都爾山見へたりしが、此山は「ジヨノン」公部落の東方に於て殆ど同部落に屬する土地の境界點たり。此所より我等は察罕特墨圖の窪地に降りしが、此窪地は北方に傾き、同方面より高山「オゴツオク」ウラにて限らる、同山の西に當り驛の土地の北方に沿ふて、土驛

圖汗の「アイマク」(部落)との境界あり、而も南方に於ては此地は依然猶土驛圖汗に屬する戈壁土謝公の旗と接壤す。此後「ゲンフツク」村落を過ぎ、オリクツ溪谷と丘とを越え、二露里間連亘せる「ボロウツズール」高原を通過し、午後二時哲林驛に到着せしが、我等は「ボロウツズール」の頂より遙に同驛に一種活動の狀あるを認めたり。

哲林驛は東より西に連なれる廣漠たる平原にあり。此溪谷は概して鹽氣を含める粘土の地質にして、處々に全く不毛の鹽澤あるを以て、此地方に在る二箇の井の水は清冽なるも稍鹽氣を帯べり。驛に住するは喀喇沁の五十二張幕(内定數のもの十八とす)「ツアクタ」の定數張幕十一及び「ハフスルガ」六張幕なり、彼等の故郷の遊牧地は此驛に近きを以て、驛務に従事する者の中、驛の土地と、己の部落の土地とを區別せず、彼此に均しく遊牧する者多し、故に其の牧場は甚だ廣くして、此驛の人民は幸福なり。我等が驛に近づくに從て認めたる動搖は、二の原因に由りて起れり、第一首たるものは當驛の廟に於て當日適達里の祭禮を行ひたることなり。此驛の廟は、驛の以西同驛を去ること約二露里の地に設けあり、此寺廟は七堂より成りて、重なる三堂は花崗石を以て造り、屋根は瓦葺にして

支那の建築法に適へり、爾餘の四堂は生煉瓦を以て組立て、屋根は土塗とし、廟の周囲の牆も亦粘土製なり、遙遠里の祭禮に至りては其の式大廟に行ふものと異ならざるも、固より寒村の小寺に行ふものなるを以て、莊嚴ならず。四方にフルデーを畫きて彩色したる黄色の高き車に遙遠里像を載せ、之を蔽ふに小なる絹布の蓋を以てし、其の兩側に「シャルツアン」を吊し、車の兩側にも種々彩色したる飾物を昇ぎ運びしが、唯此地に於て車を昇ぐ者は喇嘛に非ず、驛の境家にして、老幼男女を問はず此祭禮に與かりたる者約四百人なりき。余は此式を撮影せんと欲せしも、寫真機を立つるや、人々は其の佛像を棄て群を爲して寫真機の前に集まり、撮影するに由なきを以て、我が傍に立てる人々なりとも動かずして、撮影せしめんことを請ひ、蒙古人も互に制止して妨害せざらんと勉めたるも、各寫真機械の球を覗きたるを以て、遂に祭禮の實現を撮影するを得ざりき、此時喇嘛附の如きも式を廢して我が側に來り、念經する者若干の老僧に過ぎざりき。

驛の動搖したる他の原因は、塔爾巴哈台參贊大臣管下の蒙古韃靼人の子孫より清廷に獻納する爲め、北京に輸送する貨物の此に止まりたるものなりき。蒙古の遊牧民は支那政府より國税を課せられず、唯其の管馬の證として唯

毎年白馬八頭、白駱駝一頭を清廷に獻納す(即九白の貢)。此に止まりたる遙遠物は、即ち此白群にして九頭のみならず種々の毛色の獸畜百餘頭なりき。何故に斯く多きやと問ひしに、蒙古人は説明して塔爾巴哈台の參贊大臣が前記九頭の獸畜の外、此機會に乗じて北京に住する知己同僚親戚等に百餘頭の馬を送るものなりと云へり。チユクチャク(塔爾巴哈台の露名)より之を輸送せんが爲め、滿洲官吏を首として十九人の兵を付したり。次驛に之を送るが爲め、哲林驛より乘馬十九頭、駝馬二頭、乘馬護送人三十六名、駱駝四十頭を出し、駱駝の一部分にて貨物護送人の荷物を輸送し、他の多數の部分にては袋に入れたる馬糧の黍を運送すと云へり。蒙古の曠野に生育したる馬が、黍を食すとのことに就て余は甚だ怪訝に堪へざりしも、法律に依りて斯く制定せられたりと云へり。右兵卒の爲めに驛に九箇の張幕を張り、乳製の食物の外に羊二頭と磚茶を給せしが、其の張幕の間には實に毛氈にて編みたる黍入の叭紫々たるを見たり。

余は哲林驛を視察しつゝ、一建物に目を注ぎしに、驛亟は是れ驛の倉庫なりと云ひ、驛亟自ら戸を開きて余に内部を示したりしが、内には官有張幕の毛氈、絹布の枕覆物等を入れたる四箇の大概の外、蒙古人の種々の家具、紅青の縫附したる

帳幕三張と弓矢の積み累ねありたり。驛亟の説明に依るに、此矢弓は驛の武器にして時々上官來りて檢閲する時、驛務者之を携へ出で、檢閲を受くと云へり。

我等は五時十五分哲林驛を發し、サタガイフンツイと稱する廣からざる溪谷に沿ふて進行したり。此溪谷は西に赴くに從て益々狹隘と爲り遂に、ムルグツインハフチリの隘路と爲るものにして、我等の同所に達したるは五時四十五分にして之を通過するに八分を費さざりき。此隘路を出づれば北西に向て斜に高まれる廣漠たる溪谷アルーボクツあり、眼前平坦なる曠野の外、目に觸るゝものなし。六時四十分に至り漸く東方よりタバーク丘見え、西方より達罕得爾丘見ゆ兩丘の道路に於て平行したる所よりサタカイツー溪谷と稱す。此溪谷は植物繁茂するを以て西の方博羅庫圖勒山脈に由りて限界せらるゝ所に至るまで車行の爲め頗る困難なり、博羅庫圖勒山脈の北方を以て兩驛道路の中間なりとす。此れよりツアルフル、ウンツルシリ、ダムシリ、ボロシレ、ムフルシリ、ボロタフツアン等の斜坡ありて、之を昇降したりしが、此れより斜坡の間に在る溪谷は益々廣漠と爲りて鹽分多き地質たること明かに知られたり、例へば北の方より

エルギツエクの高原にて限らるゝサムイントイリムの溪谷、シャバルタイントリイムの溪谷の如き是なり。同溪谷より瑪尼特の高原に登り、又之を降りて小丘多く、沼沔たるオンギンゴラの溪谷に出づれば殆ど川の側に恩依錦驛ありたり。我等の同驛に到着したるは午後九時なりき。

八月二日 日曜日

五時—五度 九時—十一度半 十二時—十三度 六時—九度 九時—四度

恩依錦驛は恩依錦川の岸恩依錦鄂博の高原にあり。此驛に住する者六十五帳幕に過ぎざるを以て驛の規模敢て大なりと云ふ可らず。賽爾烏蘇郵務廳は恩依錦驛を以て遠隔の一支部と見做すが、賽爾烏蘇の郵務官吏の此に出張すること一年に二回より多からず、此郵務の事務を執行することは地方官并に驛務者に一任せらる。此事は恩依錦より始めて驛の帳幕并に其の設備が著しく前驛のものに劣るの一事に由りて、外觀上直に之を判知するに足るべし、驛の經費を要すると隨て低廉なるべきは疑ひなし。帳幕、卓腰架等の木造品は當所の驛務者皆三番蹄顏のアイマク(部落)の北部杭愛地方のホシユン(旗)より購求するものにして、最大最良の帳幕の木架の價拾五兩を出でず、物品を以て支拂ふ

恩依錦驛

ものとす。恩依錦驛に於ては始めて支那の商人を見たりしが、是れ帳幕の修繕及び其の必要附屬品補充の爲め來れる者なること疑なし。彼等は夏期北京より此に來り、恩依錦以て北喀喇沁の各驛を巡りて秋に歸るを例とす。彼等は反物、磚茶各種の雜貨を携へ來りて販賣することなるが、其の貿易は専ら蒙古曠野の產物との交易にして、支那人は駱駝を貳拾乃至貳拾五兩、羊を壹兩乃至貳兩五錢、羊毛を一斤五分と見積り、物品と交易す。

我等は午前八時恩依錦驛を出發し、川を越えんとしたりしが、恩依錦川の幅三十サージェンを越へず、徒涉場の最も深き處十五ウエルシヨクを出でず。水勢甚だ急にして河床に石多し。徒涉場に於ける右岸は高く、左岸は斜にして沼地なり。我等は川を渡り、恩依錦鄂博の山脈を迂回し、デレスン(剛草)の繁茂したる窪地を通過し、次て小丘に登り、砂礫多くして植物の稀なる溪谷に沿ふて進行したりしが、此溪谷は遠く北西に連なれり。北方に當りて岱青車(凌多爾濟)公の部落に屬するフルグルタインヌール山脈見え、更に遠く額爾哲伊圖温都爾の高山見へたり、是れエルデニウイツサン公の管下の民の遊牧地にして、公の帳幕と其の重なる廟此山にあり。山は遠く望めば巨大なる黒き崖の如く、其の廣き部分は南に向ひ、狭

き部分は北に向へり。道路には到る處灌木繁茂して小丘を作り、石は溪谷に累々として散在し、乾燥又は瀟水の凹地多くして車行すること全く不可能なるを以て、余は騎行する事としたり。余は同伴の蒙古人と談話しつゝ、烏里雅蘇台兵の軍需品を如何にして此道路に由り運搬するやと問ひしに、今より七年前、支那より烏里雅蘇台に新砲を運搬したる時には、砲架と共に駱駝に積みて輸送したりと云へり。我等ウランチヒー溪谷に登るに及んで、道路は稍良好となりしが、スーリの平原に達するに及び全く好道路と爲れり、其の北西隅のサダガイ小河の畔に烏訥克特驛あり。

我等は十一時四十分烏訥克特驛を發し、哈爾海圖高原に沿ひ進行したり。此高原は六箇の丘を爲し、道傍に下りて窪地と爲り、道路は斜坡に通じ、此窪地に由りて或は降り或は昇り、遂に和勒博烏蘭丘に達し、額爾哲伊陀羅海高丘之に次げり。此より青草の叢々たるサムインホフールの溪谷と爲り、百花爛漫として景色絶佳、久しく斯かる植物を見ざるの癖客をして、言ふ可らざるの快感を起さしむ。唯當日風吹き天寒くして秋雨蕭々、聊か此快感を損じたり。之に次げるシヤンター溪谷も亦此の如き植物の性質を帯び、此地に哈達圖郵驛の廟あり、此廟に木

造の堂宇三あり、又之に住する、フワラクの家二十戸あり。

我等は此よりフルツニホロイ溪谷に下りて、遙に草の叢生したる高山、哈達圖山を見たり、哈達圖驛は此山に在るべき理なりしも、此時は南の方約十露里の所に移り居りて、我等は一時間を過ぎ、布爾罕圖山の隘路、ホロホイツフルク泉の側に之を發見したり。巴達圖は、賽爾烏蘇管下の喀喇泌の最後の驛にして、余は此地に於て、喀喇泌の驛に於ける管理の制度及び課役履行の方法の調査を、完結補充するの必要あるを以て、時辰二時三十分を示したるに拘はらず、宿泊の爲め止まることに決し、爾餘の時間を調査に費したり。

八月三日 月曜日

五時—一度 九時—十二度 十二時—十六度 六時—十一度 九時—二分の一

余は寒氣に慣れざるより、三時五十分夢醒め、帳幕より出て、眺むれば、四方濃霜に蔽はれて、皎々たりき。哈達圖驛は前述せし如く、夏期には常にホロホイツフルク泉の泉の側に位置を占め、驛の帳幕は、狹隘なる深谷にありて、賀通圖高山の支脈其の北に見えたり。此驛當時の位置にては、東の方、エルデニウイツサン

公の部落の境と西の方、三音諾顏の部落の境に全く相對峙せり。

我等は午前七時四十五分、哈達圖を出發したり。天には黒雲朦々として、空氣は恰も晩秋の如く、濕氣を帯びて寒く、余の案内者蒙古人の中には、毛皮の外套を纏ひ、毛皮の帽を戴きたる者ありき。我等は坑と丘の斑々たる驛の窪地より出て、賀通圖山に登りしが、同山は長き鞍形背にて分たれたる二峰、嶙然として其の附近北方を壓せり。此山の麓と其の斜面には、石少からざりしも、到る處に草蓬々として花多かりき。道路は初め一は賀通圖の高山と、一は道路の西にある稍低き併機圖山より連なれる波形の山坂より作らるゝ窪地を通過したりしが、我等は此の窪地に由りて、漸々賀通圖達巴の頂に登りしに、杭愛山脈の莊麗なる勝景我が目前に展開したり。此の厖然たる黒き山脈中、就中東の方に聳ゆるはアシガツ山にして、西の方に聳ゆるはツアガンハイルハンなりしが、兩山とも三音諾顏の部落に屬するものなり。我等は前記の嶺を越えて、ホトンツウウラインハフタガイの隘路に入りしに、同所も亦既に跋渉したる窪地の如く、石塊累々たりしが、此隘路より出づるに及んで、道路は始めて平坦と爲れり。此より廣漠たる原野と爲りて、最初の間、目に觸るゝものは、唯だガンツアトロゴイ孤丘のみ。

午前九時に至り天漸く晴れて地平線著しく擴まりたり。我等はコンツアトゴイを過ぐるに及び同山の背後に隠れて道路の南東にある巍々乎たる雪山博果圖烏拉を眺望したりしが蒙古人の言に依るに同山は三音諾顏の部落墨爾根諾顏呼圖克圖のシヤビナル(從僧)等の遊牧地内に在りと云ひしも彼等は抗愛山脈より遙かに遠方に在りたり。博果圖烏拉の雪は遠くより眺むれば皚々たる白雲の如くなりしが後ち日光に映じて煌々たりき。我等の通過せし所の平原は此處に於てタライイントゴイの名を冠し道路より右方に同名の小丘あり此の丘の所に於て道路は分岐し一は北の方次驛の人々の冬期遊牧所に至り他の今我等の通過しつゝある所のものは其の夏季遊牧所に至るものなり。要するにタライイントゴイの平原は延長四十露里を下らず北西方面に於て抗愛山脈に倚れるものゝ如し。此の平原は一般にタライイントゴイと總稱するも各部分は地方に依りて各々其の稱を異にす。例へば我等は九時四十分ウフルチュールと稱する窪地に至りしが此の稱は道路の右にある六個の巨石より取れるものなり。此の深からざる窪地附近の溪谷の一部も亦ウフルチュールの稱を冠す。同溪谷にある次の窪地にダンヌール湖あり。此窪地は一面小丘及び剛草に蔽はる

を以て軍行には極めて不便なり。ダンヌール湖は周圍約六露里ありて其の南方に哈拉尼敦驛あり。

哈拉尼敦驛の二十驛内に入る事

此驛に於て余は喀喇沁の擔夫と訣別したり。此の驛より烏里雅蘇台に至る間の二十驛は已に喀爾喀人の維持する所にして烏里雅蘇台將軍と其の副長官の特別の管轄に屬し台吉の監督を受くるものにして此の台吉は各五驛を分管す。喀爾喀の郵驛は牧場の爲め確然區劃したる地面を有せず驛務者たる特別の階級ツアクタをも有せず唯だ定数の驛務者十四戸と、ハフスルガ七帳幕より成れるのみ。此の驛務者は車臣汗及び土謝圖汗のアイマク(部落)の種々の旗に屬するもハフスルガは三音諾顏及びエルデニウイツサン公の二旗の者のみ。驛務者もハフスルガも喀喇沁人の如く常に特別のフリー(家族)なるものを有すと雖も喀爾喀人の驛の人負は喀喇沁人の驛の人負より著しく少し。

哈拉尼敦驛は廣漠たる平原中のダンヌール湖の窪地にあり其の南及び南東に當りて猶地平線上に我等の曾て哈達圖驛を出て越したるホトントウウラの高山見えたりしが北の方は前記の抗愛山脈に至るまで已に遠からざりき。哈拉尼敦驛は夏季には常に其の常住所に於て遊牧するも冬季にはダンヌール

の東に在りて二井を有する哈喇尼敦地方に移る。ゲンヌール湖は鹽水にして人間の飲用に適せざるも、獸畜は同所附近を流るゝ小川と區別なく飲用す。我等は同湖に鶴鶩鴨鵝の類夥しく居るを見たり。蒙古人の言ふ所に依るに、極貧の者は此等の鳥を獵して食用に供すとのことなるも、此の如き獵は甚だ稀に行ふ所ならん。同所の鳥が人を恐るゝこと甚だしからず、四十サージエンまで人の自由に近づくに任かするに由りて之を知るべく、我等は斯る距離より灰色の鷺一羽を殺したり。

我等は十一時四十分哈喇尼敦驛を發し、同一の平原に由りて進行せしが、此平原はダンツァガン湖の北岸より石多くなりて剛草叢生す。此地方の平原はゲンフリツターの稱を帯び稍ありてフリツネーゴール河に接す。此の河は幅十サージエンあり、深さ半アルシんに達せず、南々西に向ひて流下す。我等はゲンフリツターを越えて再び剛草の叢生したる平原に由り、北西に向ひて進行を繼續し、抗愛山脈の前に至りしが、此の高原はサラトロゴイと稱せらる。此の高原の南部斜坡の麓に當りて察罕諾爾湖あり、細き線を成して東より西に連なれり。サラトロゴイの斜坡には石塊累々たり。我等は之を通過して十二時十五分直

ちに西に轉じて北より南に流るゝゴリツインゴール河の溪谷に入り、此溪谷を溯ること二十分にしてゴリダー驛に達したり。哈拉尼敦の夏季遊牧地を距ること十露里に滿たず。

余は此等の地が我が地圖に示すこと甚だ不確實なりと思惟したるを以て、蒙古人に就きて此河の流のことを問ひしに、彼等の談話に依りて、我等の曩に渡りたるゲンフリツネーゴール河は、其の渡場より二十露里の下流に於てゴリツインゴールと合し、此兩河所謂アラゴインゴールを成し而して此河は我が地圖に示すが如く、無名の湖に陥るに非ずして、沙漠の間に没すと云へり。此の如き湖は實際此處に存在せず、アラゴインゴールの没する場所は、三音諾顏の部落に在りて、到る處砂土及び砂多き山のみ。此の如き地圖の誤謬は、此先きにもあり、張家口、烏里雅蘇台間の郵便道路は、我が地圖に依れば殆んどゴリダー驛に於てゴリツインゴールを横ぎり而して後、此河と離るゝものとすれども、余が前途の旅行に由りて自ら目撃したるが如く、實際全く之と異なれり。

我等は午後一時十分ゴリダー驛を出發し、此河の剛草叢生して同じく石多き溪谷を溯りたり。此の溪谷は、驛を距ること遠からずして、巴彥烏蘭山に接す。

之が爲め河床は高丘に遮られて西に轉じ、之と共に道路も亦西方に轉ず。此れより道路は、コリター河岸に沿ひて進みつゝ、山間の凹地に入り、此凹地に流入するコリターの河床と相並んで上り始む。此の河床は、場所に由りては、狭くして深き溝渠の形を爲し、又所々平坦と登りて砂礫にて敷かれたる廣き河床と爲ることあり。凹地は高からざる山にて剛まれ、其間に崩然たるは、シャクツインオロイ山なり。此れより凹地は數度小丘にて横斷せらるゝことなるが、其中、騎行の爲め最も困難なるは、高からざるも頗る峻嶮なる和々鄂博の一丘のみ。我等は之を越えて、コリターの凹地に沿ふて登りつゝ、三時二十五分に至り、フリツネーフルントロゴイの高丘を見たりしが、此高丘の北に接して、廣漠沮洳たるアリツィ平原あり。此の平原に多くの泉あり、コリター河も此に其の源を發す。此にてゴリツィンゴールの河床は北に傾きたるに、我等の道路は西方に傾き、ガンガータバ嶺に向ひたれば、我等は此河の流と相別れたり。此嶺よりの下り路は、斜坡なれども石多く、巨石累々として恰も城趾の如し。我等はガンガータバを降りて、シャルガインゴールの溪谷に入り、塔楚驛に到着して宿泊したり。

八月四日 火曜日

五時—二度 九時—十三度 十二時—十八度 四時—十八度

塔楚驛の場所は非常に濕氣あり。シャルガインゴール河は廣き河床に依りて流れ、多くの小流に分るゝを以て、之が周囲の溪谷の地質にも、空氣にも自然濕氣を生ずるに至るなり。驛務者は此濕氣を免かれんとして、高丘に己の帳幕を張るも、夏季に於てすら、夜間は毛皮の外套を纏ふて歩行することあり。余は毛織の夜具を用ひたるも、夜間濕氣に襲はれたれば、毛皮の外套を以て身を包むに至れり。塔楚驛の驛務者は、車臣汗、土謝圖汗及び三音諾顏汗のアイマク(部落)の種々のホシユン(旗)に屬する者にして、ハフスルガは皆悉く三音諾顏のアイマク管下のホシユンに屬する者たり。此處のハフスルガの内には三音諾顏の部落即ち各區の代表者ありとのことにて、余は此部落の七區に分るゝを知れり。第一ホンドゴ、第二バガーフルン、第三イエヘイフルン、第四ツズーン、第五ゴル、第六ハムシルガー、第七バガーハムシルガー是なり。

余は早朝、旅行する支那人の驛務者に對する關係を描寫するに足るべき醜態を極めたる事件を目撃したり。余は其の相接の原因たりと云ふも可なるも、斯ること當地の郵驛には通例ある事なりと云へり。此に其の要を記せんに、昨夜

余の驛に到着するや、驛頭は余を驛中最も廣くして清潔を極め裝飾を施せる帳幕に入れたりしに、黄昏に至り科布多參贊大臣及び烏里雅蘇台參贊大臣の派遣するツヤガンアツガ明日此驛に到着すべしとの報あり、暫時ありて此アツガの護送隊の支那兵一名、護衛隊の宿泊所を檢分し、其の帳幕を備へんとて此に駈け来りしが、余が最良の帳幕を占むるを見て怒號せしも、驛務者の響應を受け、且つ支那武官が盡に到着すべく、余は早朝出發するを以て、帳幕は其の到着前空虛と爲るに依り、支障なかるべしと説き聞かざるゝに及び、首肯しつゝ、支那護衛兵に供する若干の帳幕を某所に移すべき處置を爲して寢に就けり。然るに前夜支那武官は朝寢せざりしと見え、午前七時驛に到着したり。驛頭は膝を屈めながら出て、之を迎へ、第二の帳幕に入れしに、前夜來りたる支那兵は大帳幕が余の占むる所なりと告げしかば、支那武官赫として怒り、驛丞を罵り鞭にて亂打すること半時、間隙に及び、驛丞は武官の入らる帳幕に毛氈絹枕等運びたれども、武官の怒解けず、余の出發する時にも猶止まざりしが、余を送りたる他の驛丞は勇かに余に囁きて、彼の武官に若干の贈賄を爲さざれば怒號止まざるべしと云へり。

我等は午前八時塔楚驛を出發し、初め巴彥布拉克の高原に上り、後ち北西に轉じて深き凹地に由り塔楚川に下りたり。此凹地の兩側に高峰の蒼々として聳え、其の巍々たる狀と形狀の種々相異なる狀、眞に絶景なり。其の北部に在る山には殆んど植物なく、石塊累々として嵯峨たりしが、南部の山は初め草にて蔽はれ、斜坡にして景色に富みたるも下るに及んで荒山と爲れり。凹地は其の中間に於てオンゴナイフツール山脈にて横ぎられしが、我等は此窪地に依りて行進を繼續せんとて、山脈を越えたり。余は此形勝の地を撮影して記憶に留めんとしたるも、畫伯の筆獨り之を寫すべくして、寫真機にては全く之を撮影するに由なし。此凹地には一定の總稱なく、附近の高丘に因みて名づけたる若干の名稱あるのみ。例せばフライ、温都爾烏蘭等の如き是なり。此最後の高丘より凹地は斷崖絶壁と爲り、ハフツアガイの稱を冠し、其の先きは廻廓の形を成せり。此所より北西に當りて、遙かに四峯の層々屹然として聳ゆるアルツアトウラ高山に對する勝景を眺めたり。我等の行進を繼續したる凹地の通路は、此禿山の間にありて、依然高き肥草にて蔽はれ、百花天々たりき。我等は此凹地を出づるに及んで、塔楚川の溪谷に入りしが、其の左岸に高き灰色の一遍石の形を爲して建

てられたる古碑ありたれども何等の形像なし。塔楚川は此處に於て石多き二支流と爲りて流れ各支流の幅此時五サージエンを出て深き十ウエルシヨクを越えざりしも河床は三十乃至三十五サージエンならん。河床の傾斜甚だしきを以て塔楚川の流急にして水下の石に觸れ泡起つて流る。行政上の關係に於ては塔楚川は三音諾顔とラムイン格根の部落の土地の境界と爲りて左岸は三音諾顔に屬し右岸はラムイン格根に屬す。塔楚の下流には前記二部落の人々の播種する大耕作場あり。塔楚は我が地圖に據れば察罕諾爾湖に注ぐものとすれども、蒙古人の説に據れば此見解正しからず。其の言に依るに塔楚はラムイン格根の耕作場の較々下流に於てタヒンヌガインゴールに流れ入り此タヒンヌガインゴールは察罕諾爾湖に入るものと爲す。同川には水少かりしも河床大なりき。道路は塔楚川の右岸に上りてアルツァウラ山の南麓を通過す。我等は此に古き墓地を見たりしが内に大なる墓十八あり中央に數個の圓塔あり方形の石塔を二重に繞らしたり。此外此に六個の小墓あり圓形に土を盛り圓き石塔を繞らしたり。アルツァウラの中央山脈より道路は西に急轉してアルツァインウスー川の流る窪地に下る我等は之を越え次に岩石多きマンダルトロゴイ正を迂回し、

再び北に轉じてボゴチー深谷に出たり。此深谷に於ける道路は恰も昔々たる草場を通過するが如く傾斜したるボゴチーフツーリに登りて再びハイルハンウスーの溪谷に降り。此名稱は道路の北にあるハイルハン山より流れ出づるの泉より取りたるなり。此にて我等はラムイン格根のシャビナル(從僧の十一帳幕あるを見たり。其の家畜はハイルハンウスーの溪谷並に之れより北東方面に隔離しアルナリンの窪地に於て牧せしが其の色の青々として外形の柔かなる草の豊饒なる驚くべし。此窪地を通過すればフツークャルツーに至るべく同地には同名の郵驛あり。蒙古人の言に依るに當地より南方三十露里の所に支那の古城址あり昔博羅和屯と稱せしことなりしが今は已に一石だも遺らず唯僅かに壁城と建物のある所を知るを得るのみ。此蒙古人の言には充分信を措て可なり殊に遼瓦齊及び阿睦爾撒納の戦争の時支那兵此城に住みたりとの説あるも一方には城の建物が皆粘土と生煉瓦を以て建造したりと云ふに於て然りとす。城の存在したる時代には此に耕作のみならず果樹を栽培したる園もありたりと云ふも疑ひし。我等の呼都克烏爾圖驛に達したるは二時十分なりき。但し行進したるは二時二十分を出てす。自餘の時間はハフ

ツアガイ絶壁の撮影と博羅和屯の談話に費したり。

呼都克烏爾圖驛は呼都克烏爾圖の小河にて灌溉せらるゝ廣漠たる溪谷に在り此小河は附近の山の頂より流れ出づる多くの小泉より成るものたり。此溪谷より博果圖烏拉雪山と墨爾根諾顔呼圖克圖に對する勝景復た眼前に展開す。呼都克烏爾圖驛に屬する者は車臣汗アイマク(部落)の十一帳幕と三音諾顔のアイマクの三帳幕にして此の驛のハフスルガの七帳幕は皆三音諾顔のホシエン(旗)に屬する者なり。

午後一時出發せしが、道路は驛より西に向ひて錫伯平原に入る。此平原の北に屹然として長き塔奇勒噶鄂博山あり此に鄂博の名を付するは呼都克烏爾圖驛にて此山を尊崇するが故なり。此山の南麓に六個の圓形の墓と、四方に石垣を繞し、四隅に高さ石柱を建てたる方形の大なる墓あり。塔奇勒噶鄂博より西に連なれる山脈の嶺は甚だ石多く、灰色花崗石の露出するもの夥し。同嶺よりマニツフルン窪地に下り、次で一の廣き窪地を通過し、同所より額爾德尼庫圖勒に上りて、同所よりケシエンツアガン及びフレンホシエーの小窪地を横斷したり。此名稱は北より之に接する山より受けたる所にして、該窪地は南方一帯色

爾騰烏拉山と界し、同山は亦更に北に連なりて、道路之に次げる。フイスインフンデイの窪地とも南より界せり。此窪地より道路は北方に急轉して、遙かに眺むれば、高き方形に見ゆる卓狀の高山、ツルスインウラより連なれる山脈に至るまでツルスインタラの溪谷を通過す。我等は此山腹を下りてスーリトロゴイ山間の深谷に入りしが、此深谷は北に連なりて漸々擴まり、北より之と界する罕鄂博山の所に至りて廣き溪谷と爲る。我等は此山の嶺より沙爾噶勒卓特河の溪谷を見たりしが、此山の北方の麓には同名の驛ありたり。

沙爾噶勒卓特驛に來りて、我等は驛吏の一人も居らざるに奇異の思を爲せり。驛には驛丞もフンツイーも居らず、獨りホシコー(驛夫)のみ居りて忙しく奔走せり。斯かる奇怪の現象を來せし原因は、伊犁將軍のツアガンアツに陪從して北京に上る官吏の一行が驛に宿泊せしかば驛丞とフンツイーは次驛までの驛傳に要する最良の駱駝を、自身にて徵發せんとて近傍の村落に行き、驛夫が支那の官吏の意を迎へんとて奔走するものと知られたり。余が到着するに及びて、驛夫は余が爲に、輸車を準備せんとて周旋甚だ勉めたり。是れ余も同じく此驛に宿泊したらんには、一層の多忙の加はるを恐れたるものならん。斯る事情なり

しを以て驛の情況に關して一も問ひ質すの機會なく、唯だ知るを得たるは此處のハフスルガの三帳幕がエルデニーウイツサン公の旗に屬し、四帳幕が巴勒丹札薩克の旗に屬するの一事のみにして、定員の驛務者の十四帳幕は車臣汗部落に屬すとのことなるも、此事が信を措くに足るや否や、余は斷言するを躊躇す。

我等は五時十分に驛を出發し、五分を経て沙爾噶勒卓特河の岸に達せり。河床の幅は此場所にて約四十サージエンを有するも、現時沙爾噶勒卓特河は岸に沿ふて二支流と爲りて流れ、各支流の幅は六乃至七サージエンを超えず、河の右岸の溪谷は斜坂と、今は涸れたる山溪の床にて點綴せられ、此河を北より繞ぐるフーレン群山に近づくに従ひて、較々平坦と爲る。我等は此群山を過ぎて峽間に入り、今は涸れたる床のみを遺すフーレン溪谷に下れり。フーレン溪谷は甚だ礫礫にして、車行大に惱みしが、案内者が前程の地名を知らず、之が爲に余が此の地を詳記するに由なかりしは、余をして一層の不快を感じしめたり。此地に於て道路は皆悉く今まで目撃したる他の溪谷と異ならざる六溪谷に沿ふて通じ、各溪谷は粘土及び珪土の地層より成る低き群山にて區割せらる。余は此處の重なる地の名稱を後ち知るを得て、推驛に於て書き留めたり。例へばフー

レンの第三の溪谷は、低き嶺と共にセンチーと名づけられ、次なるは新溪谷と、此溪谷に例の四個の匾石にて造られたる四角の牌石在るに因りて名づけらるゝ和碩特嶺なり。其の次なるは塔の建てられたるハインツツルヘー山に在る溪谷なり。蒙古人は言ふ、此山の南方にラムイン格根のフーレン(寺領)存すと、此山の終點を成す嶺は奔巴圖と名づけられ、側面に岩石露出して頗る奇狀を呈す。此嶺に於て余は災難に遭遇せり。山を下る時に、熟練せざる馬は、輪車の重量を支へずして驅走し、運送夫も亦輪車を放棄せしかば、輪車は轉覆し、余は車上より飛び下りて強く頭を打てり。奔巴圖嶺の次の甚だ峻峻の礫礫なるハラーチュルイナイダバー嶺は、此嶺の東方に在るラムイン格根のシャビナル(從僧)等及び此嶺の西方に在る達親王部落民の遊牧地の境界線として著名なり。此嶺は推驛の在る推河の溪谷に連なれり。

推驛の驛務者は四アイマク(部落)の蒙古人にして、ハフスルガはハエルデニーウイツサン公旗の二帳幕、三音諾顏部落の二帳幕、車臣汗部落の二帳幕、達親王旗の一帳幕より成る。推驛より沙爾噶勒卓特までの間には、僧他の間道あり、間道は山路にして、途中にグルバンウゲールサと名づけらるゝ三大嶺あり、唯だ騎行或は歩行

(荷を馬に駄して)に適するのみ、余は此事情を推察に若して始めて知りたり。蓋し沙爾噶勒卓特驛にては前述の如く驛吏と談話を交ふるの機会なかりき。余若し此間道を通行したらんに、所謂「エフデルヘーヒタ」の廢墟を通過するを得て、一層の愉快を覺えしならん。蒙古人の言に依れば此「エフデルヘーヒタ」は「諾們汗」の古刹なりと、現時彼處に二個の建物あり、一は小にして、「諾們汗」自身が居住せりと傳説せらるゝ、西藏風建築の大廟を成し、他は大にして曾て數個の廟が存せしと云ふ前者の寺院なり。「エフデルヘーヒタ」には石に刻したる紀念物の一の存するものなし。今を距る五十餘年前、一層威力ある「ラムイン」格根諾們汗の隣に居を下するに及んで「諾們汗」此處を去れり。傳説に據るに、「ラムイン」格根は「諾們汗」と會談し、二人の呼圖克圖は一處に住みて、各々其の任を行ふを得ずと爲し、卿は教法の王即ち「諾們汗」なれば教法の種を播くが爲に、信徒の少なき地に卜居せざるべからず而して教法の弘布せられたる時は、卿の場所に余が代りて入らんと言ひしかば、「諾們汗」は此後札薩克圖汗に去れりと。

余は達親王旗に屬する「ハフスルガ」の帳幕に入り、其の家主に就きて達親王の遊牧地の甚だ大ならざるを知れり。此旗には目下七十人の兵ありて、帳幕は二

百を超えず。今より十一年前に、父の死後其の位を襲ぎし現今の王は當時病氣にて旗内の政治に堪へず、職權と親王の稱號を幼弟に禪るを決意し、既に此事の允許を北京に奏請せり。

八月五日 水曜日

五時—七度 十時—十八度 十二時—二十一度 六時—十四度 十時—四度半

朝來後頭部の疼痛と前額の擦過傷は余をして昨日の遭難を回想せしめたり。余は少時安臥せば此疼痛は止むべしと思ひ、一時間横臥せしも、疼痛は依然として止まず、然も時間は経過せしを以て、余は出發せんと決心し、八時三十分驛を出發せり。道路は今直ちに西に向ひ驛の帳幕を距る二露里の處に於て、惟河を横斷す。河は此處にて廣く流れて多くの小河に分れ、我等の渡過の場所に於て、十五支流ありたり。河は急流にして多くの瀑あり、瀑の高さは場所に依りて「アルシン」に達し、淺瀬に於ける河深は一「アルシン」の四分の三を超えず。河水は青色を帯び、河床には石極めて多し。河岸より我等は今までと同一なる西の方向に於て進行を續け、河の谷を出て、「バインウツツール」群山の峽谷に入れり、時に午

前九時五十分なり、斯く時間を費したるは、我等が河岸に於て河を撮影し、一時十五分間立ちたるに因るなり。 **バインウツツール**の山後に於て、道路は少しく南西に傾き **サムインフツツイ**と名づけらるゝ他の峡谷に移る。此峡谷を繞ぐる群山は赭色にして山頂尖がり、砂より成るものゝ如し。然も此處の道路には石少なく、余は大に之を喜びたり。蓋し輸車の動搖は今や一々余が頭を刺撃して苦痛言ふべからざりければなり。十時五十分、我等は南の方 **フツクウラ**山より延びたる高原に出でたり、此に **フルクツ**なる異名を冠するも、實は **フツクウラ**山の接續なる溪谷に沿ふて進行を續けしが、此處より其の南麓に **布里都諾爾湖**ありと云へる **ウフスツ**ヌール山嶺は明かに望見せられたり。此處より我等は急に西に轉じて、**メルゲネイフツツリ**、**ナラン**及び**オボツフツツリ**の窪地と斜坡を横断せしが、**オボツフツツリ**の下り坂は上に於て甚だ峻にして、後ち斜面と爲り、長く且つ石多き坂路と爲る。 **オボツフツツリ**より道路は、**チジアルツイン** **ホロイ**の窪地に通じ、次に **チジアルツウラ**の上り坂と爲り、更に同名の深谷に沿ふ下り坂と爲る。此後我等は **ハラ** **チュルゲ**と**フツネイフツツリ**の二斜坡を過ぎしが、**フツネイフツツリ**の斜坡の頂より **烏爾圖哈拉**河の溪谷見

えたり。此溪谷には **烏爾圖哈拉**の郵驛あり、此郵驛に我等は十二時五十分にて到着せり。

烏爾圖哈拉驛は **アスハム** **バー**山の斜面の窪地に在り、窪地は **烏爾圖哈拉**の小河若くは適切に言へば溪流に灌溉せらる。 **烏爾圖哈拉**の小河は頗る微々たる流域にして、其の名の溪谷に於て地下に隠るゝものなり。當驛の驛務者は **車臣** **洋** **土謝圖** **洋** **三音諾顔**の **アイマク** (部落) に屬し、**ハフスルガ**は凡て **三音諾顔**人のものにて附近の **瑪札薩克** **達賴** **公** 及び **達親** **王**の旗に屬す。我等が到着の時に是等の驛務者の間に、全く祝祭の如き現象あり、其の顔に喜色を滿へ、腿を叩き、小兒の雀躍して滿面に笑を合ひ、何事か喜ぶべき事のありたるを證したり。余は初め此現象の何故なるやを解せざりしも、頭を垂れて立てる有角畜と羊の小群を見て、此現象の原因を容易に解したり。過る冬に此處の三人の驛務者の間に、牝牝の牛四十頭まで斃れ、第四の驛務者の許にては、約百五十頭の山羊斃れ、前者の許には僅かに一頭づゝの牝牛残り、後者の許には二十一頭の綿羊のみ残り、是等の帳幕は去歲十二月より全く亂調に陥り、同一驛の者は有角畜を有せずして困難せる其の隣者を見るに忍びず、加ふるに輪番に當らざるに旅行者に乳油乾酪

其の他の物産を供給し、彼等に代りて義務を行ふに依りて苦痛を感じたりしが、其の残れる山羊を失ふに當りて、一層の苦痛を感じたり。是に於て此驛の秩序を整理せんが爲に、此驛を管する台吉は烏里雅蘇台將軍の台命を仰ぎ、土謝圖汗アイマク(部落)の會盟に其のアイマクの郵務を適當に行ふを助くべきを命ぜしを以て、會盟は彼の窮迫に陥れる驛務者に必要の數の家畜を送りて助くべきを、其の所屬各族に命ぜり。我等が到着の半時間前に、是等の獸畜は曳き來られ、有角畜を失ひし者は六頭づゝの牝牛を受け、一名は此れ以上二頭の牝牛を受け、山羊を失ひし者は四十頭の綿羊を受けたり。牧畜を業とする遊牧民に在りて之に超えたる幸福なく、今や全驛舉つて小兒に至るまで、此給與の牲畜を圍みて之を撫て、四方より環視し、後に紛雜なからん爲に、外貌の微細の點までを觀察して其の周圍に群集せしなりき。

我等は二時四十五分に烏爾圖哈拉驛を出發し、北西の方向に於て察罕庫圖勒の高からざる上り路に進行せり。此處より下れば小窪地に出で、此小窪地より道路は札們哈達山の山腹に沿ふ。我等は三時十分此山に到着せしが、此地に於て三部落地が交代せらるゝ故に、余は此處より勉めて時間に注意せり。札們哈達

の山腹に沿ふて登りつゝ、我等は三時四十分此山の頂に達せり。此山の頂は達親王部落の西境にて、此處より東は瑪札薩克の部落なり。札們哈達嶺より之に續く斜坡のタンガトフツリーの名を戴く窪地に下りて、我等はホムボツライインの地は既に終り、達賴公の地と爲る。斯く我等は一時間と十五分に於て、全部落の地を横断せしなり。但し瑪札薩克の部落は北に於て細き帶狀を成し、南に於て其の境界は離隔し、戈壁に近づくに従ひて益々廣潤となるなり。余に隨行せし蒙古人は瑪札薩克に關して余に多く談話する所ありたるが、彼等の談話は余之を後章に於て記する所あらん。此處の沿道は頗る植物に富み、時々出水を被ひりしものと見ゆる丈高き草あり。夥多の花あり、園さへあり、是等は我等が久しく見ざる所のものにして、大に珍らしく、殆んど數拾露里を眺望するの觀ありき。又此地の特色として認むべき點は、凡て窪地が南西に傾斜を有するに在り。兩驛間の中間と數へられ、此故にガツザリンツンツーフツリーと名づけらるゝ嶺に達し、此處より臨めば、道路の左方に鄂洛該湖見えたり。此湖は次の二窪地とフツリンフツアー嶺よりも見え、又甚だ峻坂を有するハルタルダバーの溪谷と嶺より

も見ゆ。此後 **ホゴチンダバー** を過ぎ、我等は五時十分に **鄂洛該驛** に着せり。此宿驛の全延長道路は最も美にして、路上の砂礫は草の伸長を妨ぐるに至らず、唯車行に危険の虞あるは土撥鼠の穴のみ。此日余が頭痛は余に豫定の三驛を通過するを許さざりければ、**鄂洛該** に宿泊せり。

鄂洛該驛 は草茂生し、植物に富み、北は **ハラガナー** 山東は **濟爾噶朗** 山、南は **ホゴチ** 山西は **額勒素圖陀羅海山** にて境界せられたる廣濶にして頗る勝景なる平地に在り。我等の地圖は、此地方の描寫に於て多くの缺點あり。余は之を訂正するの必要を認めたり。余が目撃する所を以てするも、蒙古人の語る所を以てするも、此地の大河、小河の流域は、左の如きものなり。**ウフーク** 嶺の少しく東に之と並行して **濟爾噶朗** 山あり、此群山の南方より水源を發する二河あり、東なるは **濟爾噶朗** 河と名づけられ、西なるは **テーリン** **ゴール** と名づけらる。此二河は共に合して **鄂洛該** 河を形成す。**鄂洛該** 河は其の流域に於て、南西の方向を有し、若干の小支流を合せて **ウフーク** 河と合し、更に **ツアガン** **ツルン** 河と合するまでは、此名を以て呼べるゝものにして、又 **ツアガン** **ツルン** 河は左方より **拜塔里克** に注ぐ。

鄂羅該驛に於て砂金を採る

此地の諸河の流域を照りて、蒙古人は余に此處の多くの地に砂金の有るを告げたり。砂金のあるは峽谷にして、殊に **鄂洛該驛** の南東なる **瑪公** の旗に多しと、蒙古人は余に砂金を含有する地の區域を語るを得ざりしも、唯此處に斯る地の多きを證言せり。蒙古人は稀に砂金を採取すも、此事たる竊かに行ふものにして、冒險的なり。何となれば、支那政府は砂金を採取するを嚴禁し、之を犯す者を死刑に處すればなり。**瑪扎薩克** 旗民の一人は三日間に二百五十兩の金を採取したりと云ふ、然も蒙古人は機械の補助を假らざるものなれば、余は此砂金脈の大に見込あるを思へり。

鄂洛該驛 は其の名を此驛の南西に在る長き湖より受けたり。此湖の水は鹽分強く人の飲むに適せず、獸畜のみ之を飲む、湖には野鳥の棲息するもの多し。驛より此湖は見えず、**額勒素圖** 山の背後に隠るゝを以てなり。此湖は湖としては、勿論普通の湖と異なる所なきも、此湖畔に於て行はれたる事件に因りて、**喀爾喀** 人の間に著名なり。**喀爾丹** の戦争の時、即ち千六百八十八年に、此處にて **喀爾喀** の運命が決せられたり。**喀爾喀** の土謝圖汗及び **三音諾顏** は飽くまで其の獨立を貫かんと期し、此年の秋に、**鄂洛該** 湖畔に於て **喀爾丹** と血戦を交へ、三日間戦

ひて竟に敗れ、南に走りて支那に歸順せり。今時の喀爾喀人は此事件を殆んど記憶せず。余は最初に席に居りし四驛の台吉たる者と、逝去せし土謝圖汗の親王の侍従たりし者に、此事件を尋ねしに、二人共鄂洛該に住すること既に十二年間なるに拘はらず、一の識る所なかりき。唯後に余が許に來りし一人の老驛吏のみは、此處に起りし戦争の事を聞知せりとて、余に語るに、當時準噶爾人の軍は湖の南方に陣し、喀爾喀人の軍は北方に陣せし由にて、今に至るまで兩軍の陣せし跡を存すと。余は好奇心を以て其の跡を検せしが、圖らざりき。驛吏は圓き鹽澤を指して此場所にて兩軍交戦せし故に今に至るまで一草を生せずと、眞面目に語れり。

歴史談より語頭は現時の事に轉ぜしが、喀爾喀人は露西亞人が此地に來り、此地と全喀爾喀人を領有するに至るべしと確信して疑はざりき。余は此事よりも他の平和的征服の既に殆ど成れるを聞て、一層喜ばしく感じたり。前記の蒙古人等は猶語頭を進めて、鄂洛該と其の次驛の烏塔に、毎年烏里雅蘇台より露國商人、イグナチエフ貿易の爲に來ること既に五年に及び、イグナチエフの商隊は蒙古人の日用品を輸入するものにして、驛の住民は今や此貿易に慣れ、其の需用

露國商隊
に關する

品の買入を延ばして彼が商隊の來るを待つの有様なりと云へり。此事は鄂洛該人の談話に徴し、又此席に居りし烏塔驛の二人の蒙古人の談話に徴して明かに知られたり。唯蒙古人は、イグナチエフが此處にて單に茶と銀のみを貿易に受け、其の他受くる物は少數の山羊のみなるを不満とするものゝ如きも、兎に角遊牧民は、此露國の貿易商に満足し、露國商品は大に歓迎せらる。斯る狀況なるを以て烏里雅蘇台の他の露國商人、メゼンツエフは當年鄂洛該まで侵入せり。蒙古人の風評に據るに、彼が貿易は餘り振はずと。是れ彼が新參なるが故にて、凡そ習慣は蒙古人に取って神聖なる規約とも謂ふべきものなり。

八月六日 木曜日

五時—三度 九時—十四度 十二時—十五度 六時—十一度半 九時—四度

我等は鄂洛該驛を七時五分に出發せり。道路は此處より驛の置かる、平原に沿ふて直ちに西南西に向へり。我等は殆んど驛の帳幕の地點にて鄂塔該河の淺瀬を渡れり。同河は此場所に於て五乃至六サージエンの廣さを有し、半アルシン未滿の深さを有せり。鄂洛該の第一岸を渡りて進めば、道路は西に向ひ、ハビルガ

嶺に通ぜり。此處の溪谷は粘土にて、近頃降りし雨の爲に此處に多くの激水現はれたり。尙西に向ひて少く進めば、溪谷は礫礫と爲り、山に近づくに従ひて益々礫礫と爲る。進行半時間にして、我等は遂に和勒博山に達せしが、溪谷の中央に立つ此二山は互に酷似して、余は其の奇に驚けり。此山の殆んど側に十五サージエン以上の幅を有し、十二ウエルシヨクまでの深さを有する大河流る。此河の名を蒙古人は種々の異名にて余に告げたるが、此事は左の事情に基因す。此河は附近の北の諸山より發するアルシヤンツ、アキーツ、オローツ、ゾローツ及びフリムツの五小河より成立し、此五小河合して一の河を成すものなるが、蒙古人は各々己が住し、己の知れる水源の名稱を用ふるが故に、斯く其の名が區々に呼ばるゝに至れり。去れど最も普通に用ひらるゝ此河の名稱は、フリムツの名稱なり。フリムツは少しく下流に於て鄂洛該河と合す。但し道路より此會合點を見るを得ず。フリムツの河の三支流を渡りて、我等は道路を距る四露里の河上に立つ達賴公の天幕と、寺院を遙かに望み、和勒博山の南側に沿ふて進み、斜面にて石多きシヤンタナイフツリ嶺に登り始めたり。此嶺の麓に於て、我等は周圍一露里を下らず、今は雨水を滿たす釜形の窪地に遭遇せしが、惡寒、風の無

数の群は此澤に群り、宛然禽園の觀ありたり。シヤンタナイ嶺より我等はオル、ツ、山脊に降りしが、此山を左に過せば、道路は直ちに北の方ウンツルボゴチインフツリ嶺に方向を轉ず。此嶺より下れば、道路は烏塔平地に通じ、此平地は道路との並行に於て蒙古人の鞍に勞勞たる形狀を有し、エメーリ、トロゴイと名づけらるゝ窪地に切斷せらる。此處より平地は烏塔河までの間、全く砂地と爲る。烏塔河は此處にて三支流を爲して流れ、其中の最も大なる支流は三十乃至四十サージエン、未滿の幅を有し、河の深さは一般に十ウエルシヨクを超えず。我等は烏塔の郵驛が、河の右岸に布置せらるゝを望見しつゝ、遂に午前九時四十分、此驛に着せり。

烏塔驛の驛務者は車臣汗、土爾圖汗、三音諾顏のアイマク部落に屬し、ハフスルガ(驛站)は悉く達賴王旗の負擔なり。此人々の言に據るに、我等が今渡りたる、烏塔河は現在の名を、支那人の官用語より受けたるものにて、支那人は此河側に在る烏塔郵驛の名に因みて、此河を斯く名づけ、又烏塔驛の位置は、指令を以てウツ(廣さの意)と名づけらるゝ、現在の溪谷に定められたりと。ウツの此溪谷に沿ふて二河流るゝが、其の中にて我等が渡りし溪谷の東方に在る一河は、蒙古人間

にツアガンツルーツと名づけられ、西方に在るはバインヌルインゴールなる名稱を有す。俗稱に於ては、前記の第一河は時として烏爾圖果勒(南河)と呼ばれ、第二河は灰圖果勒(北河)と呼ばれる。此二河は此處より南に在るウツー山陞の溪谷より出口に於て相合す。其の場所にて蒙古人は此河をウタインゴールと呼ぶ。

十一時十分に烏塔驛を發し、驛の帳幕を距る半露里の處に於て、バインヌルインゴールを渡りしが、此溪谷より道路はアフダランツイントローチフツリの上り坂と爲る。此高からざる斜坡を下れば、其の名を此處の山脈より受けたるホーサイルヌルーの窪地と爲るも、道路は直ちに此山に近づかず、少しく離れて西の方向に於て此山に隨行す。此窪地を過ぎて、我等は種々の溪谷と嶺を横断せり。是等の中、我等が最初に接せしは、非常に石多き温都爾庫圖勒なり。此嶺の麓にて我等は烏塔驛の驛務者の一人に屬する馬群に遇へり。次に十二時十五分に、我等はフツアトロゴイを通過し、十二時四十分、シユティン、ダバーを通過し、一時十分に斜面にして長きナリンハマル嶺に上り、一時二十五分に一層斜面にして長きイエヘーダバー嶺に達し、一時五十二分に、ホトインフツリを通過せり。諸溪谷を繞ぐる群山は高からず、險峻ならずして、矮小の植物にて蔽はれ、

道路の横はる諸溪谷の地質は、砂地にて、野生裸麥其の他抗愛山に見る草を密生し、或る場所には鹽澤あるも、其の數は極めて少數なり。ホトインフツリの頂より、道路は拜塔里克の溪谷に下る長き下り坂と爲るが、我等は此坂を下るに一時四十分間を費せしを以て、此坂の延長は約二露里なり。此坂下の窪地に於て、我等は庫々和屯を経て、支那内地に曳き行く、大盛魁商會の支那商人所有の多數の羊群に遇へり。牧人の告ぐる所に據れば、其の曳き行く羊群は、一群千頭づゝに總計二十群なりと。然れども其中の或る群は千頭に満たずと假定すれば、總計にて一萬五千乃至一萬八千餘ならん。此羊群は眞に全山陞を充填したり。

羊群の牧人なる陝西人は、廣き麥稈の朝を被り、青木綿の綿入れの短表衣を着、同じく綿入れの駄荷袋を穿ち、長き無袖外套を着、手に長杖を持ち、其の狀恰も舊約全書中の牧者の風采に髣髴たり。拜塔里克の河に下りて、我等は此河を淺瀬に於て渡れり。此河は此處にて十一支流にて流れ、其の深さは一回も十二ウエルシヨクを超えざりき。水勢は推河よりも弱きも、其の石多き河床には、高さ十ウエルシヨクに達する數瀑あり。拜塔里克の河の左岸は、諾們汗のシアピナル(從僧)等の遊牧地の境界にして、右岸は、デードター王別名額爾德尼王部落の起點

なり。河の殆んど岸に郵驛の帳幕立ち、我等は三時四十分に此帳幕に着せり。斯く我等は四時間半旅行を繼續せしなり。去れば烏塔驛より拜塔里克までの距離は四十五露里を下らざるものと想像するを要す、此驛は庫倫より烏里雅蘇台までの旅行中に於て最も長きものなり。

拜塔里克驛の驛務者は車臣汗及び土謝圖汗のアイマク(部落)の蒙古人にしてハフスルガー(驛站)はデードター王及びビジョン公部落民に屬す。此人々と談話して、余は拜塔里克の下流に餘程大なる耕地のあるを知れり。是等の地の一部分はデードター王達頼公及び瑪札薩克部落の中立地を成し、一部分は該部落の遊牧地に屬す。要するに、拜塔里克には左記札薩克等の五耕地あり、(一)拜塔里克の左岸に在るデードター王の耕地。此耕地の區域は廣からず、何となれば此河の右岸は山にて圍まれ、耕作に適するは狭き地のみなればなり。デードター王の播種高は五十石を超えず。(二)左岸に在る達頼公の耕地。彼が播種は最も多額にして、毎年の播種高は二百五十石を下らず。(三)同じく左岸に在る瑪札薩克の耕地。彼が播種は最も少額にして、デードター王の播種高に超ゆるとなし。此年瑪札薩克部落に亂ありて播種を妨げし故に、余は其の田畝に播種したるや否やを問ひしに、

能く答ふる者なかりき。拜塔里克の下流には、前記の地頭所領の耕地の外に、猶(四)車臣王の耕地あり。車臣王の部落は遠隔の地にあるも、同王は往古より此處の達頼公所領地を借地し、其の借地に五十石までを播種す。終りに(五)同一の事情に於て、此處に達親王の耕地もあり。凡て是等の耕地は拜塔里克より通ずる溝渠の用水にて灌漑せらる。各部落は其の部落民を派遣して、耕地を耕耘せしめ、部落民は賦役として此勞に従ふ。耕地の收穫は平常七十倍と算せらる。

拜塔里克驛は蒙古人の言に據るに、烏里雅蘇台の露國商人イグナチエフの番頭が、永く逗留する地の一なりとのことにて、余が談話せし驛務者の語る所に據れば、彼は此驛に來りて少くとも一個月間は逗留すと。貿易の重なる品は、山羊及び柔毛獸なりとす。但し山羊及び柔毛獸の中なる狐、鼬は現物取引なるも、土撥鼠の皮は八月中若くは九月初旬限りに此皮を受取るの契約を以て露國商人は其の商品を前貸す。

拜塔里克の驛より我等は北西の方向に於て、初めは小丘多く、テルスン(剛草)の生じたる拜塔里克の溪谷に沿ひ、後は此溪谷よりアタランツインフツリなる名の下に有名なる、高からざる斜坡を上りて進行せり。此斜坡の次は一層高きツア

ガンドローチの斜山と爲るが、此斜山の頂上より扎克河の溪谷に下り始め、漸く近づけば、此河の水波眼中に映れり。ツアガンドローチの頂より河岸までは、八乃至九露里の上に出でず、此旅行は河に向ひて小傾斜ある平坦なる路を行くものにて、其の途中には、バガーヘセギンツールに通ずる一窪地あるのみ、此窪地は南に向ひて傾斜を有し、扎克の溪谷を通路の右方より圍む、サギインハラ山より延長す。

扎克驛は、扎克河の殆んど岸の廣き平地に在り。此平地は南の方、セベクツ山に圍まれ、西の方河の右方に連なる山脈に圍まる。此山脈は其の個々の嶺が、テングラインムフルウラントロゴイ及びツアガンオボーツーなる名稱を有するに拘はらず、全體の名を有せず。北西遙かに沙喇烏蘇圖群山見え、此群山を距る遠からざる處に、次の霍波爾驛あり。扎克驛の驛務者の中、二帳幕は土謝圖汗アイマク(部落)に屬し、六帳幕は車臣汗アイマク(部落)に屬し、六帳幕は此處の部落に屬し、ハムシルガ(驛站)は悉く此處の部落に屬す。露國商人中、扎克驛に於て常に商業を營むは、烏里雅蘇台に其の商店を有せず、彼處に商品の貨物のみを有するメゼンツエフなり。蒙古人は、扎克驛に五驛を管する台吉駐在するが故に、好商業地

なりと風評するも、果して然るや否や、商人に質したる上ならては、斷言し難し。此處にて露西亞商品と交易する品は、矢張り土撥鼠其の大部分を占め、之に次ぐは、狐及び鼬なり。メゼンツエフの番頭は、扎克に五月の半ばより六月の下旬まで居れり。

八月七日 金曜日

五時—六度 九時—十二度 十二時—十五度 三時—十四度 九時—二度

午前七時四十五分に出發し、扎克河を驛の真近にて渡れり。扎克河は、此處にては、四支流と爲りて流れ、其の中の重なるものは、六サージエンまでの幅と、八ウエルシヨクまでの深さを有し、自餘のものは、幅三サージエン、深さ四サージエンを超えず。河より我等の道路は、東の方察罕齊爾圖群山に境界せられ、西の方察罕諾爾嶺に境界せらるゝ、長き深谷に沿ひて延び、察罕諾爾嶺上には、他の諸峯を抜き、て哈喇陀羅海峯屹然として聳え、遠く之を望むを得たり。道路は、察罕齊爾圖山の麓にて迂曲す。八時二十五分に我等は、東方より扎克河の深谷に合する小深谷に達せしが、此深谷は、ハバンゲインヤスーと名づけられ、察罕齊爾圖を兩斷する

に拘はらず、其の名稱を變ぜず。八時四十分と同じく東方より扎克河の深谷に
 ウランシルガールと名づけらるゝ新深谷合せしが、此深谷の處より察罕齊爾圖群山
 はフスンウラなる新名稱を受く。此群山は西の方向を有し、漸々察罕諸爾嶺に
 近づくも北より南に延長し、札克溪谷を閉塞する。沙喇烏蘇烏拉嶺に切斷せられ
 て、此群山は竟に察罕諸爾嶺と合するに至らず。沙喇烏蘇烏拉嶺を経て、我等は
 濟爾噶朗圖達巴嶺に上れり。此嶺よりの下り坂は霍波爾驛の立つ沙喇烏蘇河
 の溪谷に通じたり。

霍波爾驛は南東に傾斜し、南東に於て沙喇烏蘇烏拉山に圍まれたる平地に在
 り。東は察罕齊爾圖山脈に圍まれ、此山脈の中央にフルキーンオロイ山聳ゆ。北は
 奔巴圖群山に圍まれ、此群山に土謝圖汗アイマク(部落)の資を以て維持せらるゝ
 烏里雅蘇台庫倫間の郵路通ず。

此處の驛務者等は、殊に慇懃に余を迎へたり。余が茶を喫する間に、彼等は余
 に彼等の河が、此處にては最早や札布干の水路に屬するを告げたり。正確に言
 へば、沙喇烏蘇河は驛より遠からざる處に於て、哈喇烏蘇河を受け、後ち、フヤンツ
 ーゴールと合し、又フヤンツーゴールは札布干に注ぐものなり。猶彼等は余に

霍波爾驛
 民と驛近
 との接近

霍波爾驛の地は部落の境界として、政治上の關係深きものなりと語れり。即ち
 此地は東の方デードター王の部落と界し、西の方ジヨノン公の部落と界す。ジ
 ヨノン公の部落は、曩日老侯の時に車臣公の部落と呼ばれて著しき地なりき。
 彼等は其の生活の近狀を語りしが、其の談話の中に於て、烏里雅蘇台の支那商人
 に不満を抱き、此地が烏里雅蘇台に近きに拘はらず、支那商人が殆んど此處へ貿
 易に來らず、彼處の支那人が商品に對して重にも通貨を要求し、又蒙古の物産を
 非常に安買すと告げたり。此原因に依りて、霍波爾驛の驛務者等は、茶豆等を買
 入るゝの必要起りたる時は、阿拉善の西に在りて、霍波爾を距る駱駝の駄行にて、
 二十日路程の肅州及び甘州に行く。概して南方にては、獸毛、羊皮及び一切の獸
 皮を高價に買ひ取る。此事情は、霍波爾の住民をして、露西亞商人と接近せしめ
 たり。露西亞商人は、此土地の物産を高價に買ひ取らずとするも、自身に驛に來
 り永く滞在して驛の住民のみならず、附近の住民の需用を滿たす。此處に來る
 露西亞商人の中、殊に著名なるは、ボタノフなり。

我等は霍波爾驛を十二時十五分に出發し、河の右岸に連なる諸山を迂回して、
 沙喇烏蘇河の溪谷に沿ひ、南西に向ひて進めり。十二時四十分、道路は、河の谷

沙喇烏蘇
溪谷及古
物の紀念

が諸山に壓せらるゝ場所に近づけり。即ち左方に於ては殆んど岸まで ツェン
 ゲジンウランウツール 群山近づき、右方に於ては同じく岸まで巴彥和碩近づく
 の場所なり。此諸山に壓せらるゝ河は、直ちに西に轉じ、道路も亦河と共に巴彥
 和碩の岬を迂回す。此處より其の中央に屹立する テメーフツツー 及び イエヘ
 ー テメーフツツーの二山の名を取り、テメーフツツーと名けられ、漸々西に降下す
 る溪谷展開す。此二山の中の前者の前面に於て、我等は初めて古碑 ホンヨーチ
 ユルの立つを見たり。即ち花崗石を削り、其の表面に曲線圓線を刻したるも
 のなり。土地の蒙古人が此碑を尊ぶの證は、紐を以て貫きたる山羊の肩胛骨の
 懸け列ねらるゝに據りて知らる。去れど此碑に宗教上の何等の意義の加へら
 るゝに非ざるは疑ふべからずして、此事は余が始めて肩胛骨を除去せんことを
 請ひしに、直ちに其の請を納れて紐を解き、肩胛骨を地上に散亂せしめたるに、依
 りて察するを得。此碑は高さ三アルシン十三ウエルシヨク、幅十二ウエルシヨク、厚
 さ四ウエルシヨク 半なり。彫刻の裝飾は表面にのみあり、側面と裏面には何の裝
 飾もなく、唯だ碑の上部に明瞭に畫かれたる輪を、碑面全體の裝飾より區別する
 輦が碑の周圍にあるのみ。

此處より猶西に向ひ同一の溪谷沙喇烏蘇に沿ひて旅行を續け、遂に此河を渡
 り、次て河の左岸に崛起する ゲテゲールトロコイ 山に達せり。此處より沙喇烏
 蘇は再び南に曲り、此曲り角に於て哈喇烏蘇河を受く。沙喇烏蘇河は前途の流
 域に於て殆んどチテゲール山に近づき、其の支流は所々にて會合し、其の會合の場
 所に於て巾二十サイジエンを有す。道路は此場合に毎時山の方に壓迫せられ、斜
 坡に沿ひて通じ、極めて危険なり。我等は三時十分布木巴驛に着せり。

布木巴驛は南の方ト固尼群山に限られ、北の方烏爾圖群山に限られ、西の方我
 等の前途に横はるチンフツリーの斜坂に限られたる圓形の溪谷にあり。我等は
 三時三十分に出發せり。チンフツリーを過ぐれば、道路は沙喇烏蘇河の小さく
 圓き溪谷に下向し、此溪谷より眼を放てば、西に他の諸山を抜きて屹立するビル
 ツー山別名巴彥海爾罕山の景展開し、東に之と相對する額伯爾濟爾噶朗圖山の
 景展開せり。此山の殆んど麓に於て更に沙喇烏蘇の右岸に渡りしが、此處より
 道路は西に傾きたる此河の溪谷に沿ひて通ず。此溪谷を繞ぐる高地は、高さに
 於ても、景色に於ても、注目に値なきも、沙喇烏蘇河の左岸の哈布塔噶烏蘭山には
 同名の驛あり。此驛に於て庫倫烏里雅蘇台間を往復する土謝圖汗車臣汗及び

此處のジヨノン公の驛務者等驛傳の義務に服す。河の右方に此哈布塔噶山と相對して、鐵の鑛泉あり、胃加答兒に功能ありとて、多くの蒙古人此處に来るとのことなり。此鑛泉を距る四露里にして、道路は北に轉じ、沙喇烏蘇に注ぐ。圖魯根果勒小河の溪谷に近づく、我等が渡るべき此小河は二サージェン半以下の幅と、約五乃至六ウエルシヨクの深さを有す。此河の右岸の圖魯根山に近き處に於て、我等は更に其の形狀の我等が曩にテメーフツツに於て見たるものと酷似せるホシヨールチュルに接せり。此碑は頗る時代を經たるものにて、殊に其の上部に於て多年風雨に晒されたるを示す。余は時晚く、太陽が山後に隠れたるに拘はらず、之を撮影せり。此處のホシヨールチュルは道路を距る約百サージェンの處に在るも、余は蒙古人が此碑に對するの冷淡に驚けり。余の隨行者六人の中四人は、未だ曾て此碑を視察せしことなき者なりき。然も彼等は驛傳の任務に依りて、殆んど毎日此處を通行する者なり。圖魯根果勒の碑は、テメーフツツの碑よりも文低く、且後者よりも多く裝飾せられたり。此處のホシヨールチュルは高さ二アルシン入ウエルシヨク、廣さ七ウエルシヨク半にして、周圍は一アルシン十二ウエルシヨクを有す。此碑に於ける彫刻の裝飾は、南に向ひたる表面のみならず、側

面にも施され、唯だ北に向ひたる裏面のみ圖畫を有せず。形像上より判斷すれば、此ホシヨールチュルは所謂鹿碑の類ならんと察せらる。我が考古學者は鹿碑には相對して臥す鹿が畫かるゝと爲すも、此ホシヨールチュルの彫刻密なるに拘らず、其の中に一鹿の像をも發見すること難かるべしと思ふ。但し碑の位置は、墳墓の上に立つを以て、此紀念物が墓碑なるは疑ふべからず。墳墓は二アルシン四ウエルシヨク四方のものなり。

此後我等は沙喇烏蘇の溪谷に沿ひて旅行を續け、ヤラツ山を過ぎしが、此處より河は西に急轉し、道路も亦、河と共に西に急轉す。我等は西に轉じて行くこと十分に於て、烏布爾濟爾葛朝圖驛の帳幕に達せり。

烏布爾濟爾葛朝圖驛は、布爾噶烏拉山側の沙喇烏蘇河の山陰に在り、此處の驛務者は土謝圖汗及び車臣汗アイマク(部落)の蒙古人より組織せられ、ハフスルガールはジヨノン公及びホシユチ貝子の部落に屬す。彼等は皆富裕なるが如く見受けられしも、寒氣の早く近づきし爲め、自己の運命を嘆じ、間もなく遊牧の期至るべしと怨言せり。此怨言は種々の談話の端緒と爲りしが、其の談話の中に於て余は張家口、烏里雅蘇台間の郵驛が什爾噶驛に始まりて、札克驛に至るまで、皆毎年冬

季南に遊牧し、現在の郵路を距る約三十五露里、遠きは四十露里の南に位置を變ずるを知れり。此處の驛、烏布爾濟爾噶朗圖及び次驛の阿魯濟爾噶朗圖の名稱は是等の驛の冬季の遊牧地なる山の名より取られたるなり。此驛にては毛氈の帳幕の内に念經堂を設く、然も驛の喇嘛等は皆念經堂の周圍に群集す。彼等の數に關しては、定數の驛務者の二十一帳幕あり、内に喇嘛の數總計三十八人ありと云ふに因り察するを得。晚に十人の喇嘛、余が帳幕に集まりしが寒氣に關する談話起り、余は寒暖計を検せんとて出て行きしに、一人の老人は寒氣の早く來るは人々が天の旨を知らんと企つるが故なりと喋々と辯ぜり。彼は少くとも七十五分間此事を辯ぜしが、此結果として喇嘛等は遂に余を疎んじ余が許を辭し去れり。

八月八日 土曜日

五時—一度半

今日は午前四時半に例の如く次驛に前進する爲め駱駝に荷を駄し始めたり。旅行の準備終りし時は、既に五時にして寒暖計は一度半を示せり。太陽の昇るに従ひて暖氣加はり來るを以て、余は今日此現象を研究せんと思ひ立ちたり。

顔を洗ひ終りて、余は五時三十分再び寒暖計を検せんとて出て行きしに、豈に闌らんや寒暖計は破碎せられありたり。表盤は金屬の匣より半ば抜き出され、水銀の入りたる球は跡方なく、附近にも破片らしきもの見當らず、唯針線にて緊着せられたる細管のみ遺存せり。此所爲は蒙古人が其の裝置を検せんとて好奇心を以て爲したるものなるか、或は昨夜の老人の言に於て表白せられたる妄信に依りて行はれたるものなるか、何れ原因は二者の中の一にあらんも、余の落膽は言辭に盡し難く、殊に他の寒暖計を有せざりしかば、其の失望は一層大なりき。勿論此事は余が不注意に歸すべきも、斯る堅牢なる裝置の物が破碎せらるべしとは豫期せざりしなり。去ればとて豫備品を携帶すれば、行李嵩みて際限なきなり。蓋し何の品が、妄信若くは好奇心に依りて、蒙古人に破碎せらるゝかを先見するを得ざればなり。斯る場合に處して、安全を期する唯一の策は罰金あるのみ。此事情は余をして千八百八十三年に庫倫に起りたる事件を想起せしめたり。當時庫倫に支那兵駐屯せしが、彼等は屢網にて魚を捕へ、其の捕魚の爲に「サンギナイブルーク」に行けり。土地の喇嘛等は此捕魚を余が寒暖計の使用に於ける如く、其の教規を破るものと爲し、支那人を懲さんと決意せしが、彼等

の中の一人は網の乾しを在りし時機を覗いて之れを寸断せり。是に於て支那人は損害賠償を要求せしが結局 サンギナイフルーク管内の者は損害を受けたる者に一網に對して四百兩を償ひて落着せり。以來支那人のみならず露西亞人も圖拉河に於て自由に魚を捕へ、又安心して河岸に網を乾すを得るに至り蒙古人は網の側へさへも近づかざるに至れり。今回の所爲に對して余は其の原因を究めんものと思ひ、驛丞の許へ使者を遣はせり。然るに使者は歸り來りて驛丞は奔巴圖驛に事件起り其の審理に赴きて不在なりと答へたり。余は更にフンツイーの許へ彼を遣はしたるに、彼は歸り來りて、フンツイーは野の馬群の許へ行きたりと答へたり。余は最後に驛の書記の許へ彼を遣はしたるに、彼は歸り來りて、書記は何處へ行きしか家に居らずと答へたり。茲に至りて彼等が余に遇ふを避けたることを明かにして、前夜の所爲の故意に出でたることを明白と爲れり。去れど余は一層此事を確めんが爲に、驛夫を喚びて、余は斯る不幸に遇ひしも、此事を訴ふべき吏員一人も居らざるが故に、汝は余の所持の寒暖計が此驛に於て破碎せられしも、驛に吏員一人も居らざるを以て、犯人を搜索するを得ざりしとの證明書を與へよと云ひしに、驛夫は此請求を諾して帳幕より出で行きし

が十分を経ざるに驛丞とフンツイーと書記は余が許に來れり。彼等は低頭平身して赦罪を乞ひ、早速犯人を搜索するを約せり。斯くて茲に犯人の檢舉と訊問と裁判と行はるゝこととなりしが、其の檢舉と訊問と裁判は實に滑稽を極めたり。驛吏は先づ寒暖計の懸け在りたる輸車の監視が誰に屬せしかより檢舉せしが、輸車の監視に當りし者は、昨夜説を爲せし老人の喇嘛なりと知られたり。然るに此老人の喇嘛は、輸車の監視を其の雇人なる二十歳の若者の喇嘛に命ぜしに、若き喇嘛は監視に出でず、家に在りて熟睡せりと辯解せしに、若き喇嘛は之に反して、主人の命令に接せし覺なしと明言し、駱駝を監視するは、其の主人たる老喇嘛の義務なる故、彼れ實に輸車の傍に立ち居れりと言へり。然るに驛丞は之を聞くや、若き喇嘛が主人の命に背けりとて之を罰するを命ぜり。若き喇嘛は、余が足下に伏して哀を請ひしが、余は固より此裁判の秘密を推知せしを以て彼を赦したり。寒暖計を破碎せし者は、彼の迷信なる老人の喇嘛たることを疑ひなし。此喜劇の爲に、少くとも二時間を費したれば、余は烏布爾濟爾圖驛を九時四十分に至りて始めて出發するを得たり。

我等は沙喇烏蘇河の山隘に沿ひて進み、十五分を経て右方より此山隘に接

する布爾噶蘇深谷に達せり。即ち驛の念經堂のある所なり。山隘は此深谷を合するの處に於て少しく擴がるも、後ち沙喇烏蘇の河岸に近づく群山の爲に再び狭めらる。此群山中の著大なるは、河の左方に在りては雅瑪圖の赭山、右方に在りては德勒山なり。德勒山の麓に於て、余は甚だ善く保存せられたる往古の墓地を發見せしかば、之を撮影せり。此中、甲の墓地の廣さは直徑十二サージェンにて、墓石の堆積せる中央墓域の直徑は四サージェン、ハウエルシヨクなり。乙の墓地は其の墓域の周圍に、墓石の堆積五箇所ありて、普通のものと同趣を異にす。此種の墓地は、余の屢見る所にして、何かの意味ある特殊のものと思ふを得ず。若し墓地の四隅に四箇所の墓石堆積しあらんには、此墓域堆積は四方を示すものと想像するを得るも、南西に第五の墓石堆積しあるを以て、四方を示すものと解釋し難く、其の理由に關して更に疑問起らざるを得ず。墓石の堆積五箇所ある此墓地の區域は、直徑二十一サージェン、十三ウエルシヨクにして、中央の墓石堆積五箇所の廣さは五サージェンなり。此墓地のある所は非常に絶景なり。德勒山の綠色の小峡谷の斜坡に、墓地散在し、下には廣き河流れ、其の前面には純然たる圓錐形の阿勒坦喀達蘇山屹立す。此處より河に沿ひて下りつゝ進

み我等は幾もなく河の上に殆んど垂直に立つハイルハン懸崖に近づきたり。此處の通行は狭き徑路に沿ふものにて頗る危険なり。之に續く哈喇布爾噶蘇圖峡谷より同名の水源發す。此地は、ジヨン公及びホシユーチ貝子部落の境界なり。此處より進むこと二十分にして、オールド山巍然として聳ゆ、注意を惹きしが、其の麓に於て我等は四個の碑石を發見せり。尙進みて、サビルグ山に達すれば、此處より河と道路は南に急轉し、此の曲り角に阿魯濟爾噶圖驛あり。阿魯濟爾噶圖驛の夏季滞在地は、温都爾濟爾噶圖と名づけらる。即ち此名稱は、北より驛の窪地を限界する山より受けしなり。此處の驛務者等は極めて貧窮の者なり。故に彼等の居る所に據るに、此處を通過する露國商人等は、殆んど彼等の許に宿泊せずと、余は此處にて始めて園買入れの爲に曠野の地に行き支那商人に遇へり。此物産は土地の蒙古人が乾して三十乃至五十個を一東として賣るものなり。支那人は此乾園の百束に對して一磚茶を支拂ひ或は之に相當する商品を渡す。

我等は二時四十五分に阿魯濟爾噶圖驛を發し、沙喇烏蘇の山隘に沿ひて進み十二分時を経て珍奇なる伊克爾烏拉山に近づけり。此山の全體は砂礫にて

蔽はれ、恰も石の破片の大なる堆積の如き觀あり。此山より河と道路は暫時西に轉じ、此處より四露里の處に於てウチユルタインアマーの長さ深谷始まり、此深谷に沿ひて河と道路は再び南に轉ず、頗る南に傾斜したる此深谷に阿魯濟爾噶朗圖驛の念經堂あり。念經堂は黄色の粗布を以て張り廻され、白花を刺繡したる帳幕なり。ガイハハイルハン山の側に於て沙喇烏蘇は再び西に轉じ、半露里未滿を低地に沿ひて流れ、遂に布彥圖果勒に注ぐ。此三河の會合點の隅の地は、蒙古人の間にウルツツールと名づけられ、現時に於ても其の數六十に達する碑石を以て填塞せらる。是等の碑石の中に於て、我等は此地に於て屢見る墓の類なるも甚だ美なる一種異様のものを發見せり。此碑は層石を鋪きたる四角の圓にて周らされ、此圓の周圍は同じく層石を鋪きたる四十の圓圈にて周らさる。此各圓圈の廣さは、直徑ニアルシンに相當す。四角の圓の各方面の長さは二十サイジエンに相當し、圓圈より成る圓は、各方面に於て二十四サイジエンを有す。他の之と同一なる墓は、四角の圓に於て十八サイジエン半の長さを有し、圓圈を以て劃せられたる圓は、二十三サイジエンの長さを有す。是等の墓の側に、尙數個の碑あり、是等は土中に埋まりて立つ。余は勿論之を發掘するを得ざりしも、

其の上部には、眞に撮影せし碑面に刻せられたるものに類する輪狀の跡、顯然と保存せられたり。

此二河の會合點より、道路は北西に轉じ、布彥圖果勒の溪谷に沿ふものと爲り、後一直線に少しく北に轉ず。此曲角より雪の如く白き鄂託渾騰格里山明かに見ゆるに至れり。布彥圖溪谷に沿ひて進行を續け、我等は呼濟爾圖驛に着せり。布彥圖果勒の徒渉は、驛の附近の淺瀬に於て行はるゝが、此地點に於て布彥圖果勒は六支流と爲りて流る。其の中の重なる河床は四十サイジエン、未滿の幅と十二ウエルシヨクを超えざる深さを有す。

呼濟爾圖驛は布彥圖果勒の岸の廣き平原の中央に在り。驛は其の名稱を驛の北東を流るゝ呼濟爾圖河より受けたり。此驛の驛務者等は悉くアイマク(部落)の蒙古人より組織せられ、ハフスルガは達賴王及びホシユチー、貝子のホシユン(旗)人より組織せらる。此日驛に於て邁達里釋典行はれ、余が着せし時は、蒙古人舉つて各帳幕を歴訪して酒を飲み、又一方に於て此口の晚、烏里雅蘇台より驛務者の一人當驛に來りて、烏里雅蘇台の近狀を談話し、其の談話を聞かんとて來る者多く、此二つの事情に依りて、蒙古人は余が帳幕を訪はず、余は之が爲に

九時三十分程に就けり。

八月九日 日曜日

今朝行李を整へ、駱駝が出發するや、間もなく蒙古人等は余が帳幕に集り始めしが、其訪問客の中には昨朝烏里雅蘇台を發足し、昨夕此驛に來りし彼の蒙古人加はり居たり。彼が旅行は大郵路を經ず、貿易路と名づけらるゝ捷徑を經たるものなりき。烏里雅蘇台よりすれば此道路は、ボグドイン、ゴールに沿ひて多倫達巴七嶺の意嶺を越すなり。其の第二嶺の背後に烏里雅蘇台よりすれば第一のものなる山の郵路の博素喝驛あり。七嶺を過ぎて道路はシレキイン、ゴールに出で、シレキイン、ゴールに沿ひて十五露里を上り、此後道路は、河を左に乘て、深き凹地に入り、此凹地に沿ふこと五露里にして、坤都倫達巴嶺に上る。此嶺よりの下り路は呼濟爾圖驛の置かるゝ場所に於て、直接に布彥圖果勒と合する呼濟爾圖河の溪谷に通ず。

烏里雅蘇台の狀況を語りて、此蒙古人は露西亞商人が此地に於て爲す所を詳細に告げたり。此蒙古人等は何れも露國商人を信用し居り、唯だ時として露國商人の派する手代の措置に不満を懐くことあるのみ。例へば今回烏里雅蘇台へ

旅行して、此蒙古人は露國商人の手代の處置に不満なる事實を發見せり。然も其の事は露國商人イグナチエフの爲にも、又蒙古人の爲にも、不満の原因と爲るものなりき。其の事は左の次第なり。各郵驛を巡りて貿易するイグナチエフの手代は、商品と交易したる山羊を二百頭までも驅りて歸路に就きしに、呼濟爾圖驛に於て、余と談話せし蒙古人は、此山羊を買はんことを欲せり。由來驛の蒙古人が、斯る購買を爲すは敢て珍しき事に非ずして、蒙古人は旅行の官吏等の食料として、多數の山羊を消費し、家畜殊に飼養して利益ある綿羊を望むが故に、日常の消費の爲には、山羊を買ひて之に充つるなり。彼の蒙古人はイグナチエフの手許に、各當歳の山羊に對して銀五錢五分を支拂ふを申込みしに、手代は一頭の當歳の山羊は、主人に一留五十哥の相場を以て受けらるゝに、銀の五錢五分は一留三十七哥半に當るを以て、此申込に應ぜざりき。是れ當然のことにて、彼若し二百頭の山羊を、前記の約束にて賣る時は、二十五留の損失と爲る譯なれば、其の申込に應ぜざるは無理ならぬことなり。去れば彼は主人に問合さず、又問合さんともせずして、山羊を烏里雅蘇台に驅り行きたり。斯る始末にて、蒙古人は山羊を得ること能はざりしに、イグナチエフは烏里雅蘇台に於て、此山羊を五錢宛にて賣

りたれば、二百頭の數に於て、二十五頭を損失せり。斯る事は雙方の爲に不快にして、此小事の爲に終日争へり。

我等は七時三十五分に呼濟爾圖驛を出發せり。道路は間もなく布彥圖果勒の溪谷を棄て、西の方面に於て、ホトホランツィ溪谷に向ふ。此名稱は、西より驛の平原を限る高地より受けたるものなり。此處より我等は西に於て、阿斯吟圖山に閉塞せらるゝ、呼濟爾圖阿瑪の深谷に入れり。此深谷の左右に崛起する山は高からず峻ならずして草を生ずるも、深谷の平面は甚だしく礫礫にして、僅かに矮小なる苦迷にて蔽はる。我等は八時五十分、阿斯吟圖山の登り口に達せしが、此處の登り路は斜坡を行くものにて、フブネイドロリジの鞍形の山脊に沿ひて此山を越ゆるなり。北西に向ふ阿斯吟圖山よりの下り路は、案外に短距離にて、少くとも南よりする上り路の半ばを過ぎず。阿斯吟圖山を越ゆれば間もなく、ウルグンシレギンフツリ山に登る、更に新らしき上り路現はるゝが、此山の後方に、北より南に連なる高さ、俗罕得勒山見えたり。此山はウルグンシレギンフツリより同名の溪谷に下る處に於てのみ眺望せらる。其の地點に於て此山は大嶽となりて屹立し、其の北面は密なる針葉樹に蔽はる。ウルグンシレギンゴ

俗罕得勒
に於ける

ールの溪谷は、北西より南東に傾斜す。我等は此溪谷の南東のに於て、シレギンゴールを渡り、後ち溪谷の中に於て他の小河那林を横斷し、尙北に進み、不規律なる諸溝の中に於て、フライナリンと名づけらるゝ、涸れたる河床に接せり。此河床の深谷より、我等は廣き草地に出でしが、此草地の中の蒙古人等の間に、得德果勒と呼ぶるゝ小河の近傍に、俗罕得勒驛置かる。前記の驛の草地は南東に於て、俗罕得勒山に限られ、南西に於て、ハイヌークトゴイ群山に限られ、北に於てアルシヤンツィ群山に限らるゝが、アルシヤンツィ群山の後方には、蒙古人の言に據るに、病を醫する温泉湧出すと云ふ。此驛の驛務者たる蒙古人等は、車臣汗及び三音諾顏のアイマク(部落)に屬し、ハフスルガーは、シア公及びホシュチ貝子の部落に屬す。驛の帳幕を距る百歩にして、未だ見ざる形狀にして、少くとも其の構造の普通のものと異なる一墓地あり。累石の中に六個の碑立てり。其の第七のものには既に久しき以前に倒れたるものゝ如く、現時は地上に横はりて埋没す。墓は四方共に規則正しく、墓全體の長さは、東西十三、サージェン、一アルシン、南北十八、サージェン、ニアルシンなり。就中普通のものと異なる點は、其の碑なり。碑は墓上に二列に配置せられ、一列は墓の南西に偏し、他の列は北東に偏す。南

西の第一の碑は、墓の南端より一サージエン半アルシン、西端より五サージエンの距離に在り、現時此碑は甚だしく損じたるも、注意して觀察すれば、裝飾の滅したるは南に面したる箇所のみにして、且碑の下部のみなるを知るを得。裝飾は極めて少なく、且複雑ならずして細き單線の模様なり。此碑の高さは二アルシン九ウエルシヨク、幅は八ウエルシヨク半、厚さは六ウエルシヨクにして、碑の周囲は一アルシン十一ウエルシヨクなり。

墓の南西の第二の碑は、墓の南端より八アルシン西端より五サージエンの距離に在り、此碑に彫刻せられたる裝飾は、前者に比して大に複雑にして、其の上部には單線にて縁とられたる小輪刻せらる。此碑の模様は、明晰にして矢張り碑の下半部にのみあるも、複線にて刻せらる。此碑の側面には、模様なし。碑の高さは二アルシン七ウエルシヨク、幅は八ウエルシヨク半、厚さは四ウエルシヨク、周囲は一アルシン八ウエルシヨクなり。

第三の碑は、碑中の首位なるが如く見ゆるものにて、墓の南端より五サージエン、西端より同じく五サージエンの距離に在り。此碑は他の悉くの墓碑よりも模様豊富、其の上部の中央には大輪刻せられ、其の上の少しく左方に小輪刻せら

る。此二輪は其の中間に小孔ある二線の邊飾を以て、碑面の他の圖畫より區別せらる。此碑の下部の邊飾も亦同様のものにて、模様は碑の各面にあり、南面には特別の模様あり、西東の面には同一の模様あり。北面には固有の模様なく、碑の上部には大小の輪と之を區別する二重の縁とが明晰に保存せらる。此碑の高さは二アルシン十三ウエルシヨク、幅は九ウエルシヨク、厚さは五ウエルシヨク半、周囲は一アルシン十ウエルシヨクなり。

墓の北東隅に在る四個の碑は、一列に配置せられ、皆同一に墓の東端より四サージエンの距離に立つ。北方よりの第一の碑は、墓の端より十三ウエルシヨクの距離に在り、此碑は矢張り甚だしく損じたるも、其の上端は全存し、上部に大なる輪の刻せられたるを判ずるを得。此上部の邊飾は單に小孔より成り、此小孔は線を以て劃せられず。此碑の高さは一アルシン十二ウエルシヨク、幅は九ウエルシヨク、厚さは五ウエルシヨク、周囲は一アルシン十二ウエルシヨクなり。

北東隅の第二の碑は、墓の北端より十四アルシンの距離に在り、最も善く保存せられたるもの、中に數ふべきものなり。此碑の上部には、大輪刻せらるゝも小輪なし。邊飾は單に小孔を以てせられ、模様は南西の方面の第三の碑の如く

四方共に二線にて彫刻せらる。此碑の高さは三アルシン六ウエルシヨク、幅は九ウエルシヨク半、厚さは七ウエルシヨク半、周囲は二アルシン七ウエルシヨクなり。凡て是等の紀念物は「鹿碑」の種類に數ふべきものなるべきも、其の圖畫中に鹿の像を見ること亦頗る困難なり。

第四の碑は、他のものと並列せず、墓の南隅より二十五アルシンの距離に在り、腐朽甚だしくして其の彫刻の何たるを識別するを得ず。此碑の高さは二アルシン十二ウエルシヨク、幅は十ウエルシヨク、厚さは四ウエルシヨク、周囲は一アルシン十ウエルシヨクなり。

岱罕得勒驛を我等は午後二時に出發せり。此驛より道路は得勒果勒の峽谷に沿ひて眞直に西に向ふ。矮草生じ、礎礫なる此峽谷は、オロトトロゴイ山に包含せられ、オロトトロゴイ山より道路は固有名稱を有せざるも、此道路に接する諸山の名稱にて區別せらる、峽谷に沿ひて北々西に轉ず。例へば哈喇齊爾山に圍繞せらる、峽谷の南部は其の名稱を有し、北部はウランフツアアと名づけらる。此山の麓には其の中央堆積部の非常に高き塚あり。此二名を冠する峽谷は、遠く望めば全く垂直に見ゆる察哈爾及び伊克布拉克嶽に閉塞せら

れ、此嶽麓に特木爾圖驛在り。

此驛は西は察哈爾及び伊克布拉克嶽に、北はウニルツイ群山に、南はアゴイツーインゲリ山に、東は我等の前路の通ずる山隘に限らる。驛は水をツゲンツイーインゴル小河より仰ぐ。此驛より此地のフンツイーなるコンボジャアと云へる者、我等と同行せり。彼は訴訟に依りて自己に與へらる、金を受取るが爲に、烏里雅蘇台に行くものにて、最捷路を騎行するの豫定なるが故に、此日の夜に烏里雅蘇台に着するを期せり。彼が余に詳しく語りし其の訴訟の顛末は、頗る趣味あるものなれば之を記述するの必要あり。過ぎし年に、此處の驛に、土謝圖汗アイマク(部落)の帳幕あり、父子二人此に住して、郵役に服し居り、父をルフサンと呼び子をエリンチンと呼びしが、二人共に喇嘛にて妻を有せざりしかば、家政甚だ紊れ居れり。驛の長官は數度土謝圖汗部落に向ひ、此帳幕の交迭を迫りしも之に對する回答なかりき。昨千八百九十一年の七月に、ルフサン及びエリンチンは窮狀に陥り、烏里雅蘇台に於て、商業を營む支那人のウルツゼイツーなる者より一兩に對する月利五分の契約にて銀十兩を借りしに、十月の末に土謝圖汗部の會盟長より辭令來り、ルフサンは歸國を許され、彼の代りに他の者が派遣せられ

たり。彼の支那人は此事を聞知し、早速ルフサンの許に來り、貸金の返済を迫りしに、ルフサンは目下賣るべき家畜を所有せず、所有の家畜は自分の騎乗及び家財の運搬に必要なものにて債務を果すに由なきも、千八百九十二年の一月に再び驛に來るべければ、其の時元利共に返済すべしと答へたり。支那人は此延期を承諾せしも、驛の者の中より保證人を出だすべしとの條件を以てせしかば、ルフサンは此フンツイーのゴンボジャフに保證人たらんことを請へり。爾後千八百九十二年の新年來りしかば、支那人は貸金の返済を得んとて驛に來りしにルフサンは驛に居らざりき。是に於て支那人は、ゴンボジャフに迫りしが、ゴンボジャフは驛を管轄する台吉に、此事件を如何に處置すべきかと伺ひたり。台吉は之に對し、支那官憲に知らしめずして處置せざるべからずと回答し、ゴンボジャフに諭すに、蒙古人中の或る者より右金額を借りて、彼の支那人に返済すべきを以てせり。當時彼の支那人に返済すべき負債額は、元金十兩、利子三兩にして、總計十三兩なりき。ゴンボジャフは該金額の金主を搜索せしに、台吉の同僚の一人、金主たらんことを諾せしが、一兩に對し一箇月一錢の利子即ち月一割、年十二割の利子を支拂ふの契約なりき。ゴンボジャフは此金を借りて支那人に返済し、台

吉に向ひ土謝圖汗部をして此負債を果さしむる爲に、該部に此事を通牒せられたんことを請ひしに、土謝圖汗部は乾隆帝五十一年(千七百八十七年)に發布せられたる烏里雅蘇台將軍の布告を楯に執りて拒めり。該布告に曰ふ、世襲の札薩克若くは下級官吏の輪番に依りて賦役に服する者が、支那人より月利五分にて(法定の三分即ち年三割六分の代り)金銀若くは商品借り證書を作ることあらば、其の犯則者諸侯及び札薩克ならんには、清帝に奏問して譴責を受けしめ、若し其の他の官吏ならんには、彼等を嚴罰に處すべしと。此布告に基きて、土謝圖汗部は右の處置を不正のものとして認め、何人が一兩に對し一錢のみならず五分の月利を支拂ふことを許可せしやと詰問せり。台吉及びフンツイーは等しく之に答へて、其の引證する烏里雅蘇台將軍の布告なるものは、未だ曾て聞きしことなく、我等が斯く處置せしは、ルフサンが一月に負債を果すと約して、竟に驛に來らず、一方に於ては支那人より返金を迫られ止むを得ず、茲に至りしなりと云へり。是に於て會盟の評議と爲り、此負債を返済するに決せしめ、法定外の利子は、其の配下の吏員の監督を怠りたる台吉の負擔すべきものとしたり。此の如くにして本件は落着し、前年の七月に借りたる十兩の賠償として、今二十二兩一錢を支拂

ふに至れり。

我等は四時十分に進めり。道路は始め北西に向ひ、特木爾圖と名づけらるる二個の山角の間に通ぜり。我等が發足せし驛は、其の名を此山角より受けしなり。此處の道路は平坦にして、唯だ或る場處に五六サージエンの礮礮なる地あるのみ。此特木爾圖山より道路は直線に西の方イーツフライアマ峽谷に轉ず。此峽谷の崖下に特木爾圖果勒河迂回す。此峽谷は八露里の下方に於て其の名を變じ、ダーガタと呼ばる。即ち此名は南に於て此峽谷に接する嶺より受けしなり。此嶺には烏里雅蘇台よりフーレン(寺領)に至る貿易道路通ず。ダーガタ峽谷の傾斜は、矢張り西に面し、或る場處は礮礮にして多くの碑石あり、ダーガタより騎行十五分にして、石多く大にして、今に至るまで全く潤れたるサーリンゴールの河床あり。此河床を渡りて、我等は特木爾圖河の流に沿ひて進行を続け、遂に峽谷より廣き平原に出でしが、此平原に舒噶克驛ありたり。

驛の帳幕は特木爾圖河が、シュルキイン、ゴールに落ち合ふ處に散在す。シュルキイン、ゴールは蒙古人の語る所に據れば、烏里雅蘇台果勒と共に源を一の山より發すと。即ち數、サージエンを隔つる二泉より源を發し、後ち種々の峽谷に分

流し、種々の方向を受くるなり。舒噶克驛に在りては、喀爾喀の全アイマク(部落)の蒙古人は、賦役を徵せらるるも、車臣汗及び土謝圖汗の者は、此處に居住せずして、賦役を金納す。即ち彼等は、此土地の蒙古人を雇ふて代人たらしめ、此旨を烏里雅蘇台將軍及び參贊大臣に届出づ。現時の將軍の先代の將軍は、驛傳の賦役金納を嚴しく制裁し、賦役一人に付一日一兩、一年三百六十兩を納附せしめしも、現時の將軍に至りては、此制裁は弛み、代人を立つることは寛大と爲れり。賦役を行ふ爲に、蒙古人は、現時協約を結び、唯賦役金を呈出して、賦役に應ずる旨を將軍に言上するのみ。舒噶克驛に在りては、車臣汗の二帳幕及び土謝圖汗の二帳幕の爲に、此土地の札薩克、ホシユチ、貝子、其の賦役に服す。役は各帳幕に對し、一年に二百兩を納入せしめ、其の金は、勿論自身之を取り、賦役は自己の部落の人々に命じて之を行はしむ。

八月十日 月曜日

我等は八時二十五分に出發し、約十分時間北東の方向に於て、シュルキインゴールの溪谷に沿ひて上り路を進めり。此溪谷は、砂地にて頗る石多く、ハラガナ草茂生せり。此ハラガナ草の中に於て、我等は、丈低く屈曲したる二本の白楊を見た

アキツ

りしが其の形體美ならざるも、甚だ我等を喜ばしめたり。十五分間の騎行の後、我等は河の右岸に於て、アキツインスメーと名づけらるゝ大寺院を見たり。アキツインスメーなる名稱が、此寺院に附せらるゝは、此寺院がアキツインタバンの南方の麓に在るが故にして、烏里雅蘇台より庫倫に至る郵路は此アキツインタバンを通過す。アキツインスメーには百人を下らざる喇嘛常住し、大法會の時には、五百人までの喇嘛此處に集まる。然るに、此寺の附近には支那人の居住する者なく、露國商人も亦此地に足を止めず。是れ此地が烏里雅蘇台に近くして、此地の者は其の需用品を、烏里雅蘇台に到りて買ふが故なり。九時五分に我等はシュルギンゴールの右方に渡れり。此河の底は砂礫より成り、河幅は三サイジェンを超えざるべきも、非常に急流なるが故に、徒歩は頗る困難なり。其の代りに水は清澄にして、飲むに甚だ快し。シュルギンゴールの岸より、我等は嶺の平なる高處に上り始めたり。

此山の中腹に、別の無比の大伽藍アキツインスメーあり。我等は此大伽藍に、九時三十分に着せり。此大伽藍は所謂ツツインフリーなるものなり。清帝の報聞に達せし寺院の意。ツツインフリーはホシユチ貝子の部落專屬の

寺院にして、當時を去る百年前に建造せられ、其建造の當時清帝の報聞に達せり。清帝は此寺院に特別の名を賜ひ、八十人の喇嘛の常住を許せり。此時より前記の數の喇嘛は寺院内に常住し、大法會の時には、千人以上の喇嘛此處に集まる。今を去る十年前に在りては、ツツインフリーは、邁達里祭に、盛なる儀式を挙げ、人民は諸方より此處に群集せしが、後年伊拉古克三呼圖克圖が其の新寺院を、邁達里貝子の部落に建立し、邁達里祭を一層盛大に舉行するに至りて、人民も亦ツツインフリーに行かず、伊拉古克三呼圖克圖に集るに至れり。

余が到りし時は、ツツインフリーの堪布喇嘛は用事の爲に庫倫に行きて居らず、廟に住する喇嘛は常住の者も、定員外の者も、郷里に歸省し、残れるは老人幼者のみにて、僅かに二十人なりき。喇嘛が夏季に、兩親に面會せんとて、郷里に歸省するは蒙古の寺院に平素あることにして、今や教主が留守なるを以て、一層此事ありたるなり。余は寺院に近づき、半時間以上境内を逍遙せしに、一人の喇嘛にも遇はざりき。二個の廟は全く開放せられあり、廟内は銀、青銅、黃銅を以て作られたる佛堂の附屬物にて充ちたり。故に此處には盜難なきことが知られたり。寺院は皇帝の建立せる一般の廟に倣ひ、三棟に區別せらるゝも、建物全體は

縦し廣しとするも頽破して不潔なり。主なる廟は中間に在り、此廟は木造の三層にして暗赤色に塗られたり。然し楹子及び廟が腐朽し居るを以て層樓に昇るは困難に想はる。尙此廟の戸の上には、皇帝より賜はりたる寺院の名を、三國の語にして金字を以て書きたる扁額懸けあり、題して「善孚寺」と云ふ。

廟の南方の窓の上と、同じく廟の入口の兩側廊の桁の下には、支那風に頌辭を書きたる個人の扁額掲げあり、扁額は支那語、滿洲語及び蒙古語にして、其の數總て二十に達せり。支那語の扁額は重みに烏里雅蘇台參贊大臣及び官吏の奉獻せしもの、滿洲語のものも多くは同一のものにして、蒙古語のものは此土地の喇嘛及び諸侯の奉獻せしものなり。

又蒙古の喇嘛が、滿洲語にて扁額を奉獻するの例あり。但し此事は高位の者に限るのみ。例へば那魯班禪呼圖克圖は額爾克純爾濟の呼彌勒罕と共に滿洲語を以て扁額を寺院に奉獻せるが如し。

余は從に此廟の内部を視察するを得ざりき。何となれば廟は閉鎖せられあり、且つ一人の喇嘛も居らざりければなり。

此寺院を南に距る五露里の所に、ホシユチ貝子の尊號を附せられたる此地の

部落の札薩克の住所あり、其の政廳も亦此に在り。斯くの如く此地は政治上、宗教上に於て部落に於ける中央集權の地なり。此地が斯く重要な地位を占むるもの、是れ此地に支那の商人の移住したる所以ならん。寺院の南門を距る半露里末滿の處に、殆んど寺院に接近して彼等の土塙あり、其の内部に二棟の住家と若干の小屋あり。此支那人等は北京より來りて土着せしものにして、一年に一回其の贏け得たる蒙古の物産を南方の長城外に發送す。彼等の貿易は少額にして其の重なる利益は部落に營む小規模の銀行事業より受くるなり。

ツツインフル(寺院)より道路はナムシル峽谷に沿ひて北東に向ひ、後ち直線に西に轉じ、礮角なる察罕布拉克峽谷に添ふ。此峽谷に烏里雅蘇台に至る最後の驛なるフアショロツツイ驛あり。但し此處の驛はフアショロツツイの夏季の假驛と稱して可なり。何となれば此驛は冬季に察罕布拉克峽谷を距る二十露里にして其の名稱の因由する南地に遊牧すればなり。

フアショロツツイより烏里雅蘇台間は僅かに十五露里なるも途中に二つの峠ありて道路甚だ險惡なり。直線に北に進みて我等は最初に所謂「ビチクツイターバ」に登り始めたり。此峠は二露里若くは二露里半間は平坦なるも、頂上に近づ

烏里雅蘇台到着

くに從ひて益險岨と爲る。此時よりの下り路は、一層險にして烏里雅蘇台の木匠等の住する阿斯吟圖峽谷に通ず。此次にホトーンタバールと名づけらるゝ一層險岨なる他の峠あり。此時より道路はボグドレーンゴル河の溪谷に下ることとなるが烏里雅蘇台の城廓と其の城市此河の右岸にあり、露國商人は北河畔に出で、余を迎へたり、此の如く我等は長途の旅を爲して烏里雅蘇台に達し、貿易街を通過して、余は將軍の命に依りて、余が宿舎に充てられたる官用の旅舎なる廟に投宿せり。

第四章 烏里雅蘇台

烏里雅蘇台は北蒙の中心なり

烏里雅蘇台市は其の人口及び幅員の點より言へば、北部蒙古の都會中に於て第二位を占むと雖も、該市は全蒙古を統轄する將軍の駐在所たるを以て、其の行政上の位置に依り、喀爾喀の重要な都會と見做さるを得ず。烏里雅蘇台は其の性質上、庫倫と全く反對のものなり。庫倫は蒙古人の佛教の高僧の住居する所なるを以て、同市は一大伽藍たるに外ならず。之に反して、烏里雅蘇台は支那政府の蒙古に對する施政の中心地にして、且つ軍事上重要な要塞たり。蒙古

烏里雅蘇台の沿革

の歴史も亦支那の歴史も、烏里雅蘇台に付するに古昔より斯かる價值を以てせり。即ち該地を以て夙に滿洲軍守備隊の駐屯する要塞と爲せり。聖武記と稱する支那の書籍の第三卷中に左の如き言あり。曰く、乾隆帝の(治世の)半に烏里雅蘇台及び科布多建てられたりと、然るに所謂乾隆帝治世の半は即ち千七百六十六年より同七年に至るの間なるに、前記の兩城が此時よりも更に古く存したるものなるとは、吾人の確知する所なれば、前記引用の文は該二城の改造若くは新築のとを報じたるものなるや疑ひなし。烏里雅蘇台の創建せられたる正確なる年代は今に至るまで、吾人の全く知らざる所にして、唯此に斷言するを得べきは、烏里雅蘇台が科布多と共に滿洲朝廷と蒙古人の厄魯特人と戦ひし時、要塞として建てられたるものなる事是なり。此時に當りて斯の如く、要塞の支那人によりて建てられたるもの多く、即ち特斯鄂爾坤、拜塔里克、堆塔米爾、札克等に築かれたり。前記の問題に就き、余は今回の旅行に際し、額爾德尼王のホシエン(旗)の博識なる郡守と烏里雅蘇台に相會して談話したるに由りて、稍其の真相を解するを得たり。彼は余に告ぐるに、蒙古人の口碑を以てせしが、其の口碑に據れば、烏里雅蘇台は科布多城よりも後に建造せられたるものなり、而して其の

事實は下に記する所の如し。準噶爾人侵入の時代に、西蒙古に建設せられたる
數多の要塞中に於て、科布多城は準噶爾方面に最も近接する警戒地點として最
初に建造せられたり、されど科布多に派遣せられたる職隊の全部同要塞に收容
すること不便なりしを以て、此要塞と相待つて用を爲さんが爲め、更に察罕蘇爾
に他の一要塞を築きたり、然るに沃地を割て耕作地となせしも、自餘の荒野には
沃土不足にして、且燃料皆無の爲め、職隊は此にも長く駐屯すること能はざりし
を以て、當時の滿洲指揮官は更に便利なる地點を撰み、布彥圖河に沿ひて、自然の
境界を爲せる阿爾達爾に目を止めたり、即ち現時烏里雅蘇台科布多間郵便道路
の第一郵驛の在る所なり。察罕蘇爾軍隊の一部は此處に移され、之を收容する
が爲に新たに要塞を築きたり。該要塞の城址は烏里雅蘇台を西方に去ること
二十五餘里、額布根寺と稱する寺院の近傍に於て、今も見ることを得べし、然るに
間もなく該地方も察罕蘇爾に於けると同一の原因に依りて、長く軍隊を駐屯す
るに適せざることを見したり。額爾德尼王の傳記中に、當時の喀爾喀の定邊
大將軍錫保が雍正帝の治世の十年に皇帝に奉りたる上奏文記載せらるゝが、之れ
に依れば、將軍は軍隊を阿爾達爾陀羅海地方より移轉して、烏里雅蘇台山の近傍

に駐屯せしめんことを清帝に請願し、清帝乃ち之れを裁可したるを以て、其の年
を以て軍隊を同地に移したるものにして、是れ即ち烏里雅蘇台城建造の端を開
きたるものなり。尙其の傳説の説く所に依れば、當時の城寨の規模の狭小なる
到底現時のものに比すべくもあらず、城内には専ら支那人のみ住居し、滿洲人及
び蒙古人は半ば阿爾達爾の帳幕内に遊牧し、半ば烏里雅蘇台を圍繞せる諸山の
溪谷に居住したり。次年烏里雅蘇台に糧食倉庫、武庫等建てられたり。軍隊の
給養に關する物品は阿爾達爾及び察罕蘇爾より悉く輸送せられ、此等の諸要塞
に於ける剩餘の品物は科布多城に輸送せられ、同城は千七百三十四年より、施政
上大なる權能を有することとなれり、是れ額爾德尼王なる稱號を冠せる左副將
軍額駙策凌は科布多に派遣を命ぜられて、行政事務を執るに至りたるを以つて
なり。此時より、烏里雅蘇台城は依然として現時に至るまで替ることなし、額爾
德尼額爾克の編年記に據れば、乾隆治世の第六年（千七百四十一年）の條下に、烏里
雅蘇台の要塞が塔米爾河畔に移轉せしとの記事あれども、該書の注釋者の言に
依れば、此の如き記事は充分正確なるものに非ずとなり。當時移轉せしは、要塞其
の物に非ずして、唯該要塞内にありし喀爾喀軍隊の司令部のみ。乾隆帝治世の

第一年(千七百三十六年)額駙策凌が喀爾喀の大將軍(大薩克定邊左副將軍)に任ぜられたること明なるが、其の祖先傳來の遊牧地は塔米爾にありき。千七百四十一年に於て額駙策凌は年六十歳に達したるを以て、賀宴を張りたりしが、此時清帝は彼の高齡を顧み依然大將軍の印綬を帯びつゝ、其の祖先の遊牧地に居住し施政上の便利の爲め、其の主要なる事務所を烏里雅蘇台より塔米爾の要塞に移すことを許したり。此の移轉は固より實行せられ、主要なる軍事上の事務は、事實上塔米爾に於ける大將軍の官舎内に於て執られたりと雖も、名義上は依然として烏里雅蘇台の名を冠し、烏里雅蘇台は單に名目上のみなりとは云へ、喀爾喀の重なる軍政の集中する喀爾喀の大要塞として保続せられたり。されば烏里雅蘇台の此他の移轉例へば拜塔里克札克等に移轉されたりと云へる説の如きも、亦之と同一に解釋せざるべからず、要するに唯事情の如何に依り、大將軍の事務所の此處彼處に移されたることを云ふのみにして、烏里雅蘇台城は依然として保存せられ、將軍の駐在地と見做されたるなり。

千七百四十八年に於て烏里雅蘇台城は大に擴張せられたり、蓋し西部喀爾喀にありたる一切の小要塞より、軍隊此處に集注せられたりしに由る、但し此軍隊

の集中は久しきに亘らず、四年を過ぎざるに千七百五十二年大將軍成衮札布親しく皇帝に謁見したる時、各部落より多数の兵士の爲に糧食を烏里雅蘇台に輸送するは頗る困難なり、是れ若干のアイマク(部落)が同城と遠く相隔つるに依り、如之假令軍隊が再び舊所に歸還するも、即ち再び小要塞に分屯するも、之が監督上困難の事なく、且必要の時に際して適宜召集の機を失するが如き患なしと奏上したり。此上奏に依りて、兵士には其の舊屯所に歸還することを命ぜられ、烏里雅蘇台は依然他に比して稍大なる重鎮となれり、而して此事は大將軍が塔米爾河畔に駐せし時に行はれたり。額駙德尼額爾克の編年記千七百五十九年の條下に、大將軍の官舎及び喀爾喀の軍務所を塔米爾より烏里雅蘇台に移轉するの勅令を載す、其の言左の如し、從來の諸要塞には更に其の要なし、加ふるに額駙策凌の高齡なるに依り、事情を察して、朕は塔米爾に要塞を建造したるのみ、今や烏梁海事件を審鞠する必要あるを以て、要塞を烏里雅蘇台に移さざるべからずと、斯くの如くにして千七百五十九年より喀爾喀大將軍の駐在所及び要塞は烏里雅蘇台河畔に移され、此時よりして將軍は同要塞を整備すること、及び擴張することに就て常に苦心したり。編年記中、乾隆帝治世の第二十九年(千七百六十

五年)の條下に、アムバン(長官)の皇帝に奉りたる上奏文記しあり、此上奏文は即ち烏里雅蘇台城が、初夏の候に於て損害を蒙り、之を修理せざる可らざることを皇帝に報告せるものなり。此上奏に依りて烏里雅蘇台城は修繕を加へたるならんも、其の業必ずや堅固ならざりしならん何となれば同年の冬、其の粘土壁は再び破壊するに至りたるを以てなり。此後再び修葺すること不可能なりしを以て、更に上奏して在來烏里雅蘇台とチヤガスツ(齊格爾蘇台)の兩河の間にありたる舊城市の代りに舊例によりて木造の城市を建設せんことを建言し、且之を建設するに就て城壁を從來のものよりも二倍高く一サージェンと爲し、要塞の全周囲を二倍廣く五百サージェンと爲さんと期したり。城壁は之を建造するに、二列に柵を造り、其の中間の柵内には盛るに土砂を以てし、其の東西南の三方には各々一門を設け、北方は即ち河岸に臨むを以て濠を穿ち、溝梁に依りて城の四方に水を繞らさんとしたり。此建言の如く果して實行せられ、烏里雅蘇台城は現時に至るにまで其の形狀を存し、唯城壁の周圍を繞らしたる溝渠は、今や水涸れ土落ち、昔日の光景あるなし。

千七百八十年以來烏里雅蘇台に住居する人数は、勢ひ非常に減少せざるを得

ざりき。此年即ち乾隆帝治世の四十四年に清廷は蒙古施政上に關して新なる法規を發布し、之が爲めに烏里雅蘇台將軍の位置に多大の變更を與へ、之と同時に烏里雅蘇台のものにも大なる變動を與へたり。抑烏里雅蘇台大將軍の職は蒙古滿洲人が準噶爾人と戦ひし時に始めて置かれたるものにして、當時大將軍は軍總督の大權を握り、蒙古人并に滿洲人、支那人同じく其の軍隊に編入せられたり。斯の如き權能は初代の大將軍傅爾丹を始めとし、ハラピンに至るまで之を掌握せしが、其後西部の戦争の終ると共に、大將軍の職は自ら消滅せざるを得ざりき。蒙古に滿洲人の首たる代表者として残りたる者は、額駙策凌なりしが、氏は最初ツサラクチの稱を冠したり、而して其の職とする所は、舊に喀爾喀四部會盟のヘベールアムバン(副長官)及びダルガー等と、蒙古及び國境に於ける要務を決断し、四部のアイマク(部落)に於ける軍隊の行動を司り、或は郵驛隊商の事を管するのみならず、逃亡人、各種の犯罪人、盜賊等を裁判するが如き小事にも執筆したり。一言以て之を云へば、大將軍策凌は最微の事務に至るまで報告を受くる蒙古の最高支配者なりき。策凌の職を襲ひたる其の子孫成衮札布及び車布登札布の二人は、策凌と同一なる位置を保ち、烏里雅蘇台大將軍の

尊稱を冠せしも、是れ其の祖先策凌の功に依り、又は其の職務に勵精するに依りて、支那政府より彼等に與へたる者なり。車布登札布の後に滿洲人ヘツーリンガバツトと云へる者始めて烏里雅蘇台大將軍に任ぜられたり。當時の蒙古人は此任命に満足せざりしもの、如し何となれば此ヘツーリンガバツトの轉任に際し、即ち千七百八十年、乾隆帝は特殊の詔勅を發布して將軍の職は全蒙古の最要なる支配者たること、該職は管に故成衰札布の子孫の代々承繼す可からざる者たるのみならず、必ずしも喀爾喀の諸旗に依りて占めらるべきものに非ざるを以て、滿洲人ギネグエを以てヘツーリンガバツトに代へ烏里雅蘇台大將軍の職に就かしむることを宣告せり、此後恰も蒙古人を責罵する如き意味を以て、前記の法規を發布し、以て大に將軍の位置を高めたり。此法規に依り、將軍、ヘーアムバン（副長官）及び喀爾喀會盟の首長等は、各々特別に事務を裁斷することとなり、一々將軍に具申せず、將軍は自ら瑣事を裁決せず、獨り重大の事件を裁決し、施政を總管する者となれり。此の如く此新法規の發布せられて、ホジュン（旗のサヒラフチ（管理者）及び會盟の首長が、各々其の部内の判決を爲すの權を有することとなりし時より、犯罪者及び其の親戚、或は各種の用務に就き、請願せん

とて烏里雅蘇台に来るもの著しく減少するに至れり。此後更に七年を経て、喀爾喀の東部のニアイマク（部落）が其の高等官衙を庫倫に移せし爲め、烏里雅蘇台に於ける官衙の數は更に減少したり、此事情は延て人口並に商業上にも影響を及ぼし、烏里雅蘇台は漸次衰頹を來たしたり。

然れども烏里雅蘇台が、此喀爾喀全土の上に權力を振ひし時代と雖も、是れ畢竟同地が施政の中心となりしに過ぎざるのみにして、蒙古人は庫倫に對するが如く、決して此に其の心を傾注せざりき。蒙古人にして此地に来る者は、單に必要缺くべからざる用事の爲めのみ、彼等は一時の羈旅として家を構ふることもなく、單獨の生活を爲すを常とし、社會的生活は、烏里雅蘇台に於ては見ることを得ざりき。尙一層明かに此事情を明示するものは、蒙古人が其の宗教心の熱切なるに係らず、此烏里雅蘇台に一廟をも建立せられざりし事はなり。其の初めて之を建立したることは、大將軍及びヘーアムバン（副長官）が皇帝に奉りたる、千七百八十七年の條下に記する上書によりて之を知るを得。其の要左の如し、烏里雅蘇台に於ては、其の創始の時より、政府は廟を建立せざりしが、今や官吏軍人等の志願に依り、城中に一廟を建立し、之を闕帝廟と名づけたり、若し之を許容

し玉は、臣等今より公事の餘暇を以て、王公、札薩克及び百官と共に、毎年中國の慣例に従ひ春秋の二季に於て祭事を行はんと欲す、若し夫れ祭事に關する費用に至りては、當該官署に知照して支出せんと、此上奏勅裁を得、其の時より烏里雅蘇台に於て春秋二季祭事を行ふの習慣を生じたり、該關帝廟は現今に至るまで同城中に在り、蒙古人は之を呼んで、ゲセル廟と稱し、同廟は城中最古の建物なりとす、千八百六十九年東干人侵犯の時に、同城の建物中、獨り此廟のみ破壊せられざりき、斯の如く千七百八十年以來、烏里雅蘇台の位置は確定し、爾來變更なく以て今日に至れり、即ち烏里雅蘇台は北部蒙古に於ける支那官憲の代表者の駐在する都會にして、喀爾喀全部の施政の中心たりと云ふを得べし、加之同所は又三音諾顏汗及び札薩克圖汗のアイマク（部落）を管掌するアムバン（長官）の駐劄地たり。

烏里雅蘇台城の住民

烏里雅蘇台城の重なる住民は、支那政府の權力を擁護する爲に、此處に駐屯し、順次交替したる兵勇なりしが、余の知る所に據れば、時に由りて其の數を異にするれども、大約三千五百人乃至八百人の間なりとす、千八百七十六年乃至七十九年余が蒙古曾遊の時には、烏里雅蘇台は東干人侵犯の餘炎未だ熄まずして、蒙古

に派遣せられたる察哈爾及び索倫の軍隊約八百人は、當時猶殘留せしが、千八百七十九年の末には、國費節減の爲め、該兵を撤退歸郷せしめ、烏里雅蘇台城防守の爲め、之に代ゆるに土地の喀爾喀兵を以てしたり、此の如き變革に伴ふて、烏里雅蘇台の衰頹を來たし、其の周圍喀爾喀一帯の地方も、亦衰頹を來たしたること、は我等已に之を述べたり、察哈爾人及び索倫人が喀爾喀人の生活上に、文化を布きたること疑ひなし、彼等が北部蒙古人の遊牧民を感化し、烏里雅蘇台をして、遊牧民の帳幕の集合地たらしめずして、眞に常住的都會の觀を呈せしめたることは、與かりて力あり、常住的生活を爲すの便利に慣れたる、察哈爾及び索倫の兵士中、烏里雅蘇台に自己所有の家屋を建てたる者多し、加之、烏里雅蘇台城の狹隘なる故に、由り索倫人は、自ら費を投じて、特別の要塞を築きたり、烏里雅蘇台以北三露里ジガスツインゴール河の谷に、今猶半ば破壊したる家屋と共に、其の城壁を見るを得べし、前に記したる如く、察哈爾及び索倫人の撤退したる後に、喀爾喀兵召集せられたりしが、其の人員は、始め兵士四百人なりしに、其後千八百八十年喀爾喀を戰時状態と宣言するに及び、兵士の數二千人に増加せられたり、されど斯くの如き兵員の増加は、烏里雅蘇台に影響を及ぼしたること極めて微々

たり、此等の兵士は、多く城内に住せずして、烏里雅蘇台以北三十露里の山間の地に各々遊牧地を下して散在し、眞に城内に居住する人民に至りては、軍衛に奉職する者の外、當時李鴻章の天津より蒙古兵訓練教官として派遣したる支那兵四五十人増加したるに過ぎず。此臨時召集兵も千八百八十三年以降其の大部分解散せられ、烏里雅蘇台に残りたるは、喀爾喀兵僅々二百名に過ぎざりしが、彼等も亦城内に住せずして、烏里雅蘇台近傍の山野に遊牧し、夏季には伊羅、ツフル、那林、ジガスツイン等の諸河に沿ひ、冬季には額布根寺の以西抗亦呼都克の平原に沿ひ、烏遜珠爾の河に至るの間に遊牧し、即ち烏里雅蘇台を距ること七十露里なり。現時烏里雅蘇台城内に住居する者は、將軍の營中に傳令使として奉職する者及び土地の官廳に衛兵及び小使取締として奉職する支那兵及び滿洲兵の微々たる數のみ。此等の人々に日用品を供するの便を圖るが爲に、城内に夙に特種の賣買市場を設く、賣買城と總稱するもの即ち是なり。斯くの如くなるを以て、烏里雅蘇台は二部に分たる、其の一は烏里雅蘇台城其のものにして即ち常設官衛相列り、支那軍隊の一部の居住する所他の一は即ち烏里雅蘇台の賣買城にして、城を距る一露里の所にあり、ジガスツイン河の河流にて城と相隔つ。

烏里雅蘇台城は恰もジャカスツイン河及びボグドインゴールの二河の合流する地點にあり、ボグドインゴールは始め烏里雅蘇台河の名を冠し、支那地圖には今に至るまで此名稱を記すと雖も、目下實際此名は殆ど人々の皆忘るゝ所にして、蒙古人に諸河中如何なる河を烏里雅蘇台と稱するや、又此の如き名の河が果して此處にありしやを問ふも、之に答ふる者甚だ少からん。烏里雅蘇台のある土地は砂泥の粘土に屬す、城の眞下より既に砂礫の落々たるを見るべし、茲に來れる露國人は之を稱してツレスツイ(粗砂と稱せり。予が以上舉示する所に依り、略烏里雅蘇台城の外部及び其の城の壁の光景を明にすることを得るを以て、予は此に再び其の外觀を反覆することを無益と認め、唯城壁を成せる柵の最後に修繕せられたるは、他の多くの要塞の修繕を加へたる時、即ち千八百八十年なるを一言するに止めん。

されば予は今、烏里雅蘇台城を視察するに際し、官衛の諸建物、大將軍邊定左副將軍の住所、長官參贊大臣の邸宅、其の他諸廟の著しく舊態を改良したるを見たり、此等の修繕改造は、當時蒙古長官たりし、三音諾顏、達賴王の發意盡力に由りて行はれたるものなり。烏里雅蘇台城内に於て、此等建築物の占むる位置は概ね

下記の如き順序なり。

先づ南方の大門を入れば、直に埒を繞らしたる廣き庭に出でん而して同處より城内の市街に出でんとすれば、更に三門あり、但し此門たるや、門柱の屹立するのみにして、之を閉鎖する門扉あるなし。此三門中、南方の城門と相對する第一門は、官衙及び城中の首廟の前庭に通じ、第二門は左方大將軍の邸に通じ、第三門は右方滿洲長官邸に通ず。此等各門の前には支那一般の風習に従ひ木製の柵を立てあり、恰も門に對して壁を造りたるが如き觀あり、其の長さは門の廣さと同一にして、門の入口を隔つること一サージエン以内の所にあり、今夫れ官衙に通ずる第一門に至りて觀んか、門の入口の一方に方形の木架に大なる鑄鐵製の板を掛け、又他の一方には大太鼓の如きものを置けり。此等の設備は一朝事あるの時に際し、城中防備の爲に、兵士を召集する合圖に用ゆる者なり。此門を越へ、柵の立てある所を曲れば、官衙の建物のある第一庭に出でん、此處には南より北に向ひて粗造の煉化石を以て造たりる長き平家の建物あり、即ち右方は蒙古の官衙にして、左方は城中の金庫なり、前者には往年揭示を附しありたるは疑ひなきも、今は何等の揭示をも附しあらず、後者の戸の上には滿蒙の二語を以て、陸軍

要塞衙門

要塞會計部衙門と記しあるを見たり、三閤を上げれば、此庭より第二庭に通ずるの門に出でん。此等の諸門は皆平家建の建物にして、其の大き三間あり、其の中央なるものは開け放たれたる通路にして、是れ眞に門たり。其の兩側にあるものは貯藏庫たり、此にある倉庫の配置は、其の揭示に由りて容易に了解することを得べし、即ち其の右方の戸の上には滿文を以て、銀貯藏房と記し、又左方の戸の上には、絹布貯藏房と書しあり。各房の戸は、萬年信なる支那文字を刻したる、丈夫なる支那製の鍵を以て閉鎖しあり。此二庭の内にも同じく二個の衙門あり、即ち左方西に當りて、陸軍要塞内務部衙門と記する揭示ある衙門あり、右方東に向ひたる衙門には、陸軍要塞軍務部衙門と記せる揭示あり。

前記の四官衙の建物の内部の構造はトルギーヤムン(内務部衙門)に於て目に觸るゝ少差異の外、皆全く相同くして、各建物の戸と窓は庭に面し面積四間あり、内部は分て四個の室と爲す。入口よりして第一の室は當直書記の居る所にし、此室の入口の戸に向へる壁には大なる炕の設けあり、其上に卓ありて、卓の側には座褥を舖きたり。是れ當直書記の座なり、又炕の前に一箇殊設の卓あり、卓上には鍵を附したる箱に入れ、更に絹布を以て裏みたる官印、米肉入、硯箱等あり。

四壁には書類發收記入の帳簿吊しありて炕の上には事務用の紙片堆積せり。室内は常に不潔を極む此室の右方にある守兵の詰所なる室は更に不潔なり又左方に二室あり一は官衙の事務所にして他の一は各長官等の會議室とす。事務所に充てられたる室は其の構造全く入口より第一の室即ち當直者の室に同じ唯其の相異なるは第一室には炕一箇あるのみなるに此室には二箇の炕の北南の壁に沿ひて設けられたる點のみ。一方の炕上には二人の通譯官の坐するを見る甲は支那語の文書類を蒙古語に譯するを職とし乙は滿洲語を蒙古語に翻譯するものにして他の炕は二人の書記の席とす。該事務所に次ぎ各長官等の會議所に充つる第三室あり此處には炕三個ありて其の構造は敢て他と大差なしと雖も遙に清潔なりとす。炕は紅色羅紗にて蔽はれ坐褥も亦之と同じく坐褥の側に方形の高き支那枕を置き卓も亦素塗に非ずして漆塗のものなり。入口に相對する首なる炕は孰れも支那のツルガン及び蒙古のツルガン二官人の坐する所とす左方の炕は支那人たるヒトヘシー(書記官)二名の席とし右方の炕上にはアンタフの爲に二席を設くアンタフとは即ち幕賓の義にして其の所謂幕賓とは官衙の議事に與からしめんが爲め他の官衙より招きたる官吏を云ふものなり。

ドルギーヤムン(内務部衙門)の室内の構造の特殊の點に關しては唯會議室にのみ關すと云ふを得べし此會議室并にツルガンの衙門に於ては會議の議長及び議員は室の三方の壁に列坐するも炕は只兩側の壁に設くるのみにして入口に相對する重なる方面には廣くして長き腰架ありて其の前には其の腰架に準する大さの卓あり普通の官衙と敢て異なることなし。此等は皆紅色の羅紗を以て蔽はれ清潔にして美なり。此卓に對する中央の席は乃ち大將軍の座にして其の右方は滿洲長官の座左方は蒙古長官の座とす。彼等の坐する腰架は動かし得る如くに造れり是れ此會議室には單に前記の人々會合するのみにあらずして時としては各種の問題を議決せんが爲め北京又は露國政府より派遣せらるゝ他の人々も相會することあるを以てなり。此の如き場合には腰架を撤し四箇の椅子を列ね外來人は大將軍の左方同將軍と蒙古長官の間の席に坐す。千八百八十八年交渉談判の爲め蒙古に派遣せられたる北京駐劄露國公使館二等通譯官アエスワホーウイチ曾て此席を占めたることあり。露國人と蒙古人との訴訟事件解決の爲め屢烏里雅蘇台に出張する庫倫駐在領事此席を占むる